

---

# 現代と未来と異世界と

スリ師キャンドル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

現代と未来と異世界と

### 【Nコード】

N4792J

### 【作者名】

スリ師キャンドル

### 【あらすじ】

普通の高校生活を送っていた中嶋建太を中心とした登場人物5名が、未来へ行ったり異世界へ行ったりする物語になるはずです。

## プロローグ（前書き）

初心者なのでお手柔らかお願いします。

## ブローグ

「博士、死んでいただきますよ」

「お前等ときには負けん！」

二人は刀を持って向かい合っている。

「この人数を相手にしてもまだそんなことが言えますか？」

そう言うのと彼の後ろから大量の機械兵士が現れた。

「貴方の為に1000体ほど集めました。…さあ行け！機械兵士共  
！」

1000体もの機械兵士が博士と呼ばれた人物に雪崩れ込んできた。

「残念だったな、こいつでも食らえ！」

ぽいつ、ドーン！！

「俺特性の超小型核爆弾だ。」

「おのれ、だが、まだ半分は残っている」

「爆弾が1つな訳ないだろ？」

ドーン！！

機械兵士が一掃された。

「く、まさかこれだけ用意してこの様とは」

「お父さん、今の音何？」

「来るな秋季！」

「死ねー！」

彼は秋季と呼ばれた少女に刀を投げつけた。

グシャッ

博士が少女を庇い刀が突き刺さった。

「任務完了です。それでは」

「お父さん！お父さん！」

「秋季…これを…」

「何？これ？」

博士は秋季にメモリーチップを手渡した。

「それを…使って父さん…んと母さん…を連れて…きて…く…れ…」

……

「お父さん？どういことお父さん？起きて！起きてよお父さん！」

夢を見た。子供の頃の夢を見た。

「あれから10年か…」

「秋季ちゃん起きたかい？皆待ってるよ」

「獅叡さん、うん、行こう」

私は獅叡さんと皆の所に行った。

「来たか、秋季、すまないが今すぐに行ってもらえないか」

「わかりました。」

「姉さん、本当に行くの？」

「うん、行ってくる！お父さんとお母さんに会いに！」

## プロローグ（後書き）

ご観覧ありがとうございました。

## 第1話 7月14日午前

この物語は一人の少年が世界を統一する物語である。（嘘）

俺の名前は中嶋 建太、皇修学園高校に通っている高校2年生。  
今は通学の途中だ。いつもこの辺りで声をかけられる。

「よう、一緒に学校いこうぜ」

そう、こいつ俺の友達、二雄騎いちのせうきにだ。いつも一緒に登校している。

校門の近くまで来ると「お前等走れ！門閉めるぞ！」殿下の声が聞こえた。俺は雄騎に走るぞと声をかけ走った。

この殿下というのは俺たちのクラス担任の須雅多すがた清水きよみ先生だ。

ウェーブがかかった髪が肩まであり、落ち着いた雰囲気がある。

この殿下というあだ名は一年の頃雄騎が

「殿下だ！」

と叫んで以来、須雅多先生に殿下というあだ名が付いた。雄騎になぜ殿下なのか聞いたところ

「なんとなく」

と言われた。

キンコンカーンコン

「いやー今日もぎりぎりだったな」

「お前のせいだろ雄騎！」

実は雄騎は出会う女の子全員に「付き合ってよ」とか「デートしない？」などと話しかけまくっていたのだ。当然のごとく全く相手にされていなかったが。

教室についた。

「おはようございます。建太君、雄騎君」

「お前等またギリギリだな」

ついたら2人の女の子に声をかけられた。

1人目の娘が朝沙陽奏あさひかなで

綺麗な腰まである黒髪が特徴だ。性格はおっとりしている。2人目の娘は美嶋杏<sup>みしまあんず</sup>

肩までのショートヘアが特徴で少し男勝りなところがある。

「それは、なー建太」いきなり俺にふってきた。

「で？何でなんだ？建太？」

杏も俺に聞いてきた。そこへ殿下が来て話は中断した。

HR

「えーと、突然だが今日転入生が来た。」

今は7月だ、こんな時期に転入なんて…。

「おい、入ってこい」殿下に呼ばれて長髪の女の子が入ってきた。

「やつほー、私、中嶋<sup>なかじま</sup>秋季<sup>あき</sup>秋に季節の季って書いて秋季って読むんだよ、よろしくね」

秋季の席はまだ用意されてないようで、今日は来ていない獅呷<sup>しゅうわ</sup>元の席に座ることになった。獅呷の席は俺のとなりだ。「中嶋君だっけ？同じ名前だね、よろしくね」

こちらこそよろしくと返事した。



## 第2話 7月14日正午

その日の昼休み

「建太！雄騎！弁当食べようぜ」

「秋季ちゃんも一緒に食べよう？」

いつものように杏と奏が誘ってきた。今日は中嶋 秋季も一緒にらしい。

「いいの？やったー！」

秋季も承諾した。しかしいつもなら真っ先に食いついてくるはずの雄騎が黙っている。

「ごめん、今日建太と2人で話したいことがあるから」

なんと雄騎が誘いを断ったのだ。

「なんでだよ、建太とならいつでも話せるだろ」

全くその通りだ。いつでも話せる、俺も断るつもりはない。しかし雄騎は今すぐはつきりさせたいらしいので

「ごめん杏、朝に雄騎から話があるって聞いてたんだ」と杏に謝罪した。事実そんな話は聞いていなかった、しかし雄騎の真剣な顔を見てとつさに言ってしまったのだ。

「もういい！行こう奏、秋季」

「明日またお誘いしますので」

杏が怒って出ていきそのあとを奏と秋季がついていった。

行ったあと雄騎が体育館裏に行くと言うので着いていった。

体育館裏に着くと雄騎が

「お前、秋季ちゃんの事どう思う？」

と聞いてきた。当然突然転入してきた娘程度の認識しかない、そう雄騎に言つと少し考え込んでから急に走り出した。俺がどこに行くのか聞くと

「屋上！まだ食い終わってないかもしれないだろ？」

と答えた。俺への質問はもういいらしい。

俺はそうだなと言い一緒に走っていった。

屋上に着いて扉を開けた。すると

「あ、ほんとに来た！」

と言う秋季の声が聞こえた。

そこには手のつけられていない弁当があった。俺と雄騎は驚いていた。

「実はね、杏ちゃんが2人は絶対来るから待ってこうって言ったんですよ」

「ちよつと奏：もういいから早く食べるよ、お昼休み終わっちゃうだろ」

杏たちは弁当に手をつけずに待っていてくれたのだ。

「ごめん杏、それとありがとう」

「そ、そんなのいいから、早くしないとお昼休み終わっちゃうって杏は頬を赤らめながら言った。

「さつさと食うぞ建太、俺もう腹減った」

「それではみなさん」

『いただきます』

### 第3話 7月14日放課後

放課後

起立、礼、

「建太、秋季帰ろうぜ」

「わかった。雄騎帰る…あれ？」

雄騎がいない、先に帰ったか？

「杏、奏は？」

「殿下に呼ばれたから先に帰ってくれって」

「そうか、じゃあ3人で帰ろう」

俺たちは3人で帰ることにした。

帰りの話題はもちろん秋季の事だ。なぜこんな時期に転校してきたのか、とか、前はどこに住んでいた？とか、親は何をしている？とか、趣味はなんだ？とか、好きな物はなんだ？などの質問をした。そして、それらすべてに答えてくれた。好きな色は黄色、好きな食べ物はい焼、趣味は料理、こっちに引越して来る前はイギリスに住んでいたそうだ。そして秋季は両親は何をしている？と言う質問にこう答えてくれた。

「お母さんは弟を産んだあとに事故で死んじゃったって聞いた。

お父さんは殺されたんだ、私の目の前で」

「ごめん、私たち知らなくて」

「大丈夫、もう10年前の事だもん」

秋季はそう言っ明るく振る舞った。

「それにお父さんにならもう…」

そう言いかけて黙ってしまった。俺がどうしたのかと聞くと

「なんでもない」

と言われた。

しばらくして、杏の家の前に着いた。

「私の家ここなんだけど、秋季の家ってどこなんだ？」

と杏が聞いた。

その杏の問いに対して秋季は

「ここ！」

と杏の家の斜め前の家を指差した。

「え？」

「そこ建太の家だろ」

そう、秋季が指差したのは紛れもなく俺の家だった。

「あ、」

秋季はしまったというような顔をしている。

「え」とね、実はね、今私、家無いんだ。だから中嶋君の家に泊めてもらおうとおもって…ダメかな？」

秋季がとんでもない事を言い出した。

「そんなの良いわけないだろ！」

と杏が叫んだ。

俺も同感だ。まだ17歳の男女が同じ家で暮らすなんてありえないだろ。

「家が無いならうちに泊まりなよ」

と杏が続けた。

秋季は本当に良いのかと聞き直している。

そこに買い物から帰ってきた佐恵子さん（杏の母）が話に加わり杏の家に泊まることが決定した。

「それじゃあ俺帰るよ」

と言い帰宅した。

部屋に着いたらPCを立ち上げながら服を着替えてネットサーフィンを始めた。

「最近面白そうなの無いな」

そんなことをして無駄な時間が過ぎていった。

そして、そろそろ寝ようとしたとき、雄騎からメールがきた。明日は先に学校に行くらしい。俺は「了解」と返信して眠りについた。

第4話 7月15日始まりの朝（前書き）

時間かかりました。スミマセン（――）m

#### 第4話 7月15日始まりの朝

朝起きて顔を洗い歯を磨き朝食を食べ服を着替えるという朝の一連の行動を済ませて家を出た。

今日は雄騎がいないから余裕で間に合うだろうと考えていたら、うちの高校の制服を着た少年が家の塀によじ登っているのを見つけた。俺はその少年に話しかけた。

「なにしてんの？」

その少年は驚いて塀から落ちてきた。俺はもう一度なにをしているのか聞き直した。

「妹を探してるんだよ。」

と答えた。登校中にはぐれたらしい

「俺も一緒に探すよ」と言った。少年は少し迷ったような素振りを見せたあと頷いた。

俺と少年は二手に分かれて探し始めた。

家の周囲を探したり、空地を探したりしたが見つからなかった。次に公園に探しに来た。だがまだ朝の8時だ。こんな時間に誰かいるはずもない、俺はとりあえず中を探し始めた。しかし案の定誰もいない、俺は次の場所を探しに行こうと公園を出ようとしたときに声が聞こえた。

「兄ちゃんちょっと助けてーな」

俺は周囲を見回したが誰もいない

「上や上」

その声に従い上を見上げるとそこにはさっきの少年とそっくりな少女が木の枝に座っていた。

「うち、飛び降りるから受け止めてな」

そう言っただけ少女は俺めがけ飛び降りてきた。俺はなんとか少女を受け止めることが出来た。

「ありがとーな兄ちゃん」

少女が礼を言っているとき、少年が走ってきた。

「よかった。見つかったんだ。兄ちゃんありがとう」

少年は安心したように言った。

「兄ちゃん、お名前なんて言うん？」

と少女が聞いてきた。

俺は自己紹介をした。

「中嶋建太言うんや、じゃあ建にいやね」

俺は建にになってしまった。次に少女と少年が2人の自己紹介を始めた。

「うち、細波珊瑚ちざなみ やすい言うんよ、よろしくな建に」

「俺は細波礁ちざなみ しょう俺たち一卵性の双子なんだ。よろしく建に。」  
礁にまで建にと呼ばれてしまった。…別にいいけど。

気を取り直して俺は珊瑚になぜ木の上にいたのか聞いてみた。

「ねこさん追っかけて木に登ったら降りられんようになってもうたんや」あれ？この子は天然なのか？そんなことを考えていると。

「あなたたちこんな時間にこんな所で何してるの？」  
後ろから声をかけられた。

「アリアさん？」

「あら、建ちゃんじゃない」

この人はアリア・スフィール・フェンリルさん。皇修学園高校の3年生、生徒会長をやっている。

「建ちゃんその子達は？建ちゃんの弟と妹？」

と聞いてきた。俺は

「そう見えますか？」と言うと

「全然。」

と言われた。おそらく俺はこの人に一生勝てないだろうな。

「そんなことより、早く行かないと本当に遅刻になるよ」

俺たちは時計を見て慌てて走り出した。

俺たちが走っている横をアリアさんが車でおいこしていった。

「お前等走れ！門閉めるぞ！」

「やばっ！殿下だ！」俺がそう叫ぶと礁が

「殿下って何？」

と聞いてきた。

俺はとりあえず先生のあだ名だということを教えた。

キーンコーンカーンコーン

「なんとか間に合った。」

俺たちはチャイムが鳴る直前に校内に入ることが出来た。

「それじゃあ俺たちこっちだから」

そう言つて珊瑚と礁は自分達の教室に向かつていった。

俺は「またギリギリに登校してしまった」はどと考えながら教室にむかった。下駄箱に着いたとき意外な人物に出会った。

「杏？」

「あ、建太」

なんと杏と秋季がいたのだ。

「お前、またギリギリだな、あれ？雄騎は？」

「雄騎なら先に行くって言つてたけど、杏、お前も今日はギリギリじゃないか」

普段なら俺や雄騎よりもずっと早く学校に着いているのに

「どっかの誰かが全然起きなかったからね」

と嘆いている。その横で秋季が

「えへへ、ごめんなさい」

と笑いながら謝っている。

俺たちが教室に着いたら雄騎と奏が迎えてくれた。

そして雄騎が驚くべきことを言い出した。

「俺たち付き合うことになった」

「「え？ええええー」」

俺と杏は絶叫していた。



**第4話 7月15日始まりの朝（後書き）**

また時間かかるかもしれませんが頑張って書きますので、また次も見てくださいたら嬉しいです。

第5話 7月14日雄騎編（前書き）

ぐだつてます

## 第5話 7月14日雄騎編

昼休み

「ふう、食った食った。」

俺は屋上で皆と昼食を食べたあと満足感と満腹感に浸っていた。

そして、食べ終わって5分後くらいに杏が

「そろそろ行くか？」

と切り出した。

それに従い皆教室に向かっていた。

教室に向かう途中俺は奏に手紙を渡し午後の授業を受けた。

手紙と言ってもただノートを破り、折り畳んだだけだが

手紙の内容はこうだ。

「今日の放課後誰にも気づかれずに屋上に来て下さい。 雄騎」

午後の授業を終えてすぐに屋上に向かった。

そして奏が来るのを下校している生徒たちを見下げながら待っていた。

下校している生徒たちの中に建太たちを見つけた。杏と秋季と3人で下校している。

下を見てみるとだんだんと下校している生徒がまばらになってきた。野球部も準備体操を済ませ練習を始め出していた。

硬球のボールを金属バットで叩く『カキン』といういい音が聞こえてくる。

しばらく待っていると吹奏楽部のトランペットの音が聞こえてきた。奏を待っている時間はものすごく長く感じる。

俺は携帯で時間を確認した。すると携帯の時計は16時52分を差していた。

もう1時間以上経っていた。どうりで長く感じるわけだ。

「奏、ちゃんと手紙見てくれたよな？」と考えながらひたすら待ち続けた。

空を見上げながら待っていると、野球部のバットでボールを打つ力キーンという音から、バットでボールを打った数秒後に『バシッ』というグローブにボールが入る音に変わっていた。

どうやらバッティング練習から守備練習に変わったようだ。

だが、そんなことはどうでもいい、今は奏が優先だ。

遅い、遅すぎる、既に時刻は18時2分だ。2時間以上経過している。

何かあったのか？

でも何が？

学校内で何がある？

なら手紙に誰にも気づかれずにつて書いてたから全員下校してから来るつもりか？

いや、違う。奏はそんなバカなことはしない。

ならもしかして忘れてるのか？

でも渡したのは昼休みだ。たった2時間で忘れるか？

いや、奏はそんなに記憶力は悪くない、むしろ良い方だ。

だが待てよ、

手紙を読んだあとそれと同等かそれ以上の何かが起きてそっちに気をとられていたら？

または小さいけど複数の情報によって手紙のことが記憶から薄れていったとしたら？

……いや、さすがにたった2時間でそんなに大きなこと、または小さいことが大量に起こるなんて考えにくい。

……そもそも何かって何だ？

まさか手紙を読んでいない？

いや、さすがに家に着いたら気づくだろっ…

？

なぜそう思った？

なぜ気づくと思った？

これは気づいていないだろ、奏の家は学校から徒歩で約40分位だ。往復約1時間20分、2時間も掛からない。なら捨てられたか？

いや、それはない、奏が人から貰ったものを捨てるわけがない。なら無くしたか？

だがそれなら用件を聞きに来るはずだ。俺が直接渡したんだから。ならどうしてこない？

俺がそんなふうに考えていたら、屋上の扉が開かれた。

「はあ、はあ、ごめんなさい、雄騎君、はあ、はあ、」

奏が息を切らせながら走ってきた。

「私、はあ、家に着いてから手紙を読んで、はあ、はあ、走ってきたんですが、はあ、待ち、ましたよね？」

奏が申し訳なさそうに言ってきた。

俺はとりあえず奏に息を整えるよう言い、屋上にある自動販売機でイチゴミルクを買い奏に渡した。

奏は俺に礼を言いながらイチゴミルクを飲み始めた。

5分後

奏がイチゴミルクを飲み終えたところで俺が

「そろそろ本題に入っているかい？」と聞いた。

奏は「はい」と答えてくれた。

「阿沙陽 奏さん、昔から貴女の事が好きでした。俺と付き合ってください。」

俺は、奏に告白した。

それに対し奏はこう答えた。

「二 雄騎さん、私も貴方の事がずっと大好きでした。こんな私で良ければ是非お付き合いして下さい。」

奏が俺の告白をOKしてくれた。

そこに

「お前等、部活やってない奴は早く帰れ！」

と言いながら殿下が現れた。

殿下に言われ、俺たちは帰ることにした。

俺が屋上から帰ろうとしたとき、殿下が耳打ちで「よかったな」と言ってくれた。もしかして待っていてくれたのか？

帰り道

「すみませんでした。私が授業中に手紙を読んでいたらこんなに遅くはならずにすみましたのに」

「大丈夫、全然気にしてないから、でも何で2時間も掛かったんだ？」

「実は、殿下先生に用事を頼まれまして……」

「そっか、なら仕方ないな」

そして少し沈黙が続いた。

その後、俺は奏に前からずっと気になってた事があったので聞いてみた。

「奏、間違ってたらスマン」

俺は前もって謝罪をした。

「はい？」

「奏って実はちよつと無理してるだろ」

「え？な、何がですか？」

奏が立ち止まって聞き直してきた。

「その丁寧な口調だよ、何となくだけど俺には無理してるように感じるんだよ」

少し沈黙し、空を見上げた。

「……そっか、バレちゃったか、でも最初に気づいたのが雄騎で良

かったよ」

やっぱり、奏は子供の頃と同じ口調を演じていたんだ。

「やっぱり、か…何で今までそんな演技してたんだ？」

俺は奏に聞き直した。

「だって…今さら変えられないよ…」

奏は少し声のトーンを下げて答えた。

「何で？今からでも遅くないだろ」

「だめだよ…今さら…」

この時、奏の声が少し震えていた。が、この時の俺は熱く成りすぎ  
ていてそれに気づけなかった。

「今さらって何？全然いけるって！」

そう言い終わった後、奏は涙を流しながら叫んだ。

「無理だよ！だって私、ずっと同じキャラで今まで来たんだよ？今  
変えたら、また一人ぼっちになっちゃう！」

そうか、奏は怖いんだ。

今の関係が、今の俺たち、建太や杏たちとの関係が壊れるのが怖い  
んだ。

俺たちに出会う前の、一人ぼっちだったあの頃に戻るのが……

「大丈夫だよ、建太も杏もきつと秋季だって、キャラなんて気にし  
ないよ」

「でもっ！」

俺は奏を抱き締めながら続けた。

「大丈夫！…大丈夫、心配しなくてもあいつらはキャラなんかで人  
を判断するような奴らじゃない。奏だって解ってるだろ？」

そう奏に言い聞かせた。

「それに、どんなキャラでも奏は奏だろ？俺はどっちの奏も大好き  
だ！」

奏も泣きながら続けた。

「雄騎い、雄騎い、本当は私も杏みたいに皆を呼び捨てで呼びたか  
ったよお、君やちゃんなんて他人行儀な呼び方したくなかったよお」

そして、奏も泣き止み奏の家の前に到着した。

「ごめんね雄騎、急に…」

「ううん、俺は気にしてないよ、それより、明日建太たちにも本当の奏を見せてやる?」

と奏を煽ってみた。

「うん、私、頑張ってみる」

それに奏は賛同した。

「それじゃあ奏、また明日」

「うん、また明日、学校で!」

こうして俺は帰路にたった。

「雄騎いー」

俺が歩いていると奏に呼び止められた。

「雄騎、だあいすき!」

そう言って部屋に入っていった。



## 第6話 獅童 元という男（前書き）

やっと小説のタイトルが決まりました。

以後、このタイトルは変えませんのでよろしく願いますm（

）m

## 第6話 獅童 元という男

「と、いう訳なんだ」

と雄騎が昨日の出来事を語ってくれた。

俺と杏は啞然としていた。

そりゃそうだろ？普通に学校に行ったら友達が付き合い始めてたんだぞ？

皆驚くよな？

「そう言う訳で、私、変わるね」

と奏が続けた。

言い終わったら殿下が来て話を中断した。

「え、また、転校生が来ました。」

その、殿下の一言で教室中がざわついた。

クラスメートの1人が殿下に質問をした。

「殿下！今度は男ですか？女ですか？」

「気にするな、冗談だ。」

まさかの冗談だった。

「秋季、お前の席、建太の後ろな。じゃ、HR終了。」

殿下はあっさりHRを終わらせ、出ていった。

殿下が出ていくのと入れ換えに獅叡 元が登校してきた。俺は元が机に着くとすぐに、なぜ昨日来なかったのか聞いてみた。

すると元はすぐに答えてくれた。

「あ、昨日な、昨日は、貧乏な親子に違法取り立てしてたチンピラ共の組織を潰してた。」

「…そつかあ、流石だな、元」

ま、いつもの冗談だろう。

「ていうか、お前、誰？」

元は秋季に向かって言った。

「あ、私、中嶋 秋季、昨日転校してきたんだ、よろしくね」

秋季は元気いっぱいに答えた。

それに対し元は「ああ」と淡白に返事をした。

1限目は社会科の自習だった。

なのでこの時間、この教室は無法地帯になつてしまふ。

ま、俺はその無法地帯の中に居るんだけどね。

俺は早速前の席に座つて雄騎と話し始めた。

「建太、これ見てみろよ」

雄騎は携帯で二ユースを見せてきた。

「何？何？」

と後ろから秋季が覗きこんできた。

『先日、7月14日に西村組が壊滅させられていたところ、逮捕されました。西村組首領、西村玄治氏の証言によりますと

「あの高校生尋常じゃねえ」

との脅えた様子で語っていました。警察庁では西村組を壊滅させた人物を探し、その人物に金一封が贈られるようです。

次の二ユースです……』

……

「なあ建太、この高校生つてさ、どんな奴なんだろうな？」

雄騎がそんなことを聞いてきた。

俺がそんなこと知るわけないだろ。

「それってもしかしたら獅呶君じゃないかな？」

秋季が凄いことを言い出した。

「だってさつき、『チンピラの組織を潰した』って言ってたし」

「いや、さすがにそれは冗談だろう？」

俺はすぐさま否定した。

「そういえばそんなこと言ってたな元のやつ」

雄騎までも言い出した。

……違うよな？

俺は不安になり元に確認しようと話しかけた。

雄騎と秋季が俺の後ろで聞き耳を立てて待機している。

「なあ元？」

「あ？何？」

「おまえさ、組織潰したって言っただろ？なんて名前だったんだ？」  
俺は当たり障り無いよう聞き出した。

「…なんてったかな？確か…西村組？だったと思うぞ、多分」

（こいつだー！） 建太心の声

（元だー！） 雄騎心の声

（獅叡さんだー！） 秋季心の声

「それがどうかしたか？」

「元！お前、ニュースになってるぞ！」

雄騎が大声で叫んだ。

「元、お前、警察行こ！」

雄騎に続いて俺も叫んだ。

「なぜ俺が警察なんぞに行かなならんのだ？」

元が抗議してきた。

まあ当たり前か。いきなり警察行けと言われて、はいそうですかと  
はならんだろ。

俺たちはさっきのニュースのことを元に説明した。

「遠慮しとく」

「なんで？」

元は拒否しそれに雄騎が食いついた。

「興味ない」

また元が否定した。

「勿体ないって！」

それにまた雄騎が食いついた。

その後、元が否定し雄騎がそれに食いつくという流れがしばらく続  
いていた。

最終的に雄騎が負けたようで

「あゝあ、勿体ないなー」

と嘆いている。

諦めろ、雄騎、

その後、1限目をぐだぐだして過ごした。

そんなこんなで1限目は終了した。

ぶっちゃけ、授業中のネタは考えてないので2〜4限目まで跳ばして昼休み。

「建太、雄騎、元、秋季、奏、お弁当食べに行こ！」  
杏に誘われて皆で屋上に向かった。

## 第6話 獅童 元という男（後書き）

早く続きを書きたいのですが時間が無いので楽しみにしていただいている方には申し訳ないです。

その前に、楽しみにしていただいている方が居るかどうかですけどね。

第7話 7月15日下校（前書き）

最近荒川アンダーブリッジにはまっています

## 第7話 7月15日下校

俺たちが屋上で弁当を食べているとき、雄騎が皆で遊びに行こうと言いだした。

「で？どうする？皆？」

と雄騎が皆に聞いてきた。

「もちろん俺は行くよ」

俺がそう答えたあと、秋季が

「私も行くー！」

と続いた。

「元も行くよな？」

と雄騎が元に問い出した。

「まあ、良いけど」

元も承諾した。

「奏と杏も行くよな？」

今度は杏と奏に聞いている。

しかし、杏は

「何言ってるの？もうすぐ期末テストなんだぞ？遊んでないで勉強しなよ」

と、返してきた。

「なんだよ、まだ2日もあるじゃん」

「2日しか無いの！」

雄騎が痛いところを突かれている。

しかし、雄騎がこの程度で諦めるわけがない。

「だからこそ、鋭気を養う為に遊びに行くんだろ」  
「やっぱりまだ粘ろうとしてる。」

「そんなこと言っていないでちゃんと勉強しなよ」

杏は正論を述べている。

「ほら、奏も言ってるやんなよ」



杏は奏に同意を求めた。が、しかし、

「私も行くつもりだったんだけど…」

奏の思わぬ言葉に愕然としている。

「大丈夫だよ。雄騎には後でちゃんと私が責任もって勉強教えるから」

「うっ、わかったよ」

奏の一言で杏もとうとうおれた。

「それじゃあ、全員参加ということで、どこ行くか決めるか、皆、どこ行きたい？」

と聞いてきた。

「シヨッピング！」

と、秋季が提案した。

だが、しかし、雄騎が反論した。

「シヨッピングって遊びじゃないじゃん」

それを聞き秋季がブーブとブーイングをしている。

だが、そんなことは完全に無視して自分の提案を出した。

「そんなことより、俺はゲーセン行きたい！」

「私もゲーセンがいい！」

と秋季も賛同した。

…どっちなんだ？

「ま、私は別にどこでも良いけど」

「私もゲームセンターで良いよ」

杏と奏も賛同した。

俺と元も了承したので放課後皆でゲーセンに行くことになった。

ていうか雄騎、はじめからゲーセンに決めてただろ

そして放課後

俺たちは全員揃って下足箱の前まで来ていた。

「あら、皆さんお揃いで、…あら？1人増えてる？」

突然、背後から話しかけられた。

振り返ると、そこにはアリアさんが満面の笑みで立っていた。

「あ、アリアさん！」

雄騎が即座に反応した。

「私はアリア・スフィール・フェンリルよ、貴女のお名前は？」

アリアさんは秋季に笑顔で自己紹介した。

秋季もアリアさんに自己紹介をした。

「私たち、今からゲームセンターに行くんですけど、アリアさんも一緒にどうですか？」

奏がアリアさんを誘った。

「いいの？なら一緒に行こうかな」

と、いうことで、アリアさんも一緒に行くことになった。

俺たちが学校を出ようとしたとき、

「ここは通さん！通りたければ俺様を倒していけ！」

と、俺たちの前に1人の男が立ちはだかった。

なので、俺はその男の腹を思いつき蹴飛ばした。そしてその男は

「ぐはっ」と言って崩れ落ちた。

「じゃあ、倒したから通るぞ。」

俺は、そう言って通り過ぎて行った。

「相変わらず容赦ねえーな」

と雄騎が言っているのが聞こえてきた。

「ま、待て、俺はお前たちの目的を知ってるんだぜ？」

その男が訳の分からないことを言い出した。

「いい加減しつこいぞ、蒼太」

実はこの男、俺たちの友達の赤井蒼太<sup>あかい そうた</sup>だったのだ。

こいつは1年の頃同じクラスだったけど2年になってクラスが変わった友人たちの1人なのだ。「お前たち、今から皆でゲーセンに行くんだろ？」

と蒼太が問いかけてきたので、俺は「それがどうした?」と返してやった。

「なら、俺も、連れてけ!!!」

「やだ」

俺は蒼太の要求を速攻で断った。

「.....」

.....

「えっと、ごめんなさい、連れていってください」

「やだ」

蒼太が言い直したが、また、速攻で断った。

「まあ、良いじゃんか建太、連れていってやっても」

と杏が言うので俺も承諾した。

これで、蒼太を加えて合計8人でゲーセンに向かった。

先に言つとくが、俺は別に蒼太ことが嫌いな訳ではないぞ?

第7話 7月15日下校（後書き）

もう少しで次話も完成します。  
もう少し待ってください

## 第8話 7月15日戦場（ゲームセンター）前編（前書き）

最近、モンハン2ndGを始めた、スリ師キャンドルです。  
イヤンクックが倒せません。

やはり、ボーンククリじゃダメなのでしょうが

まあ、そんなことは置いといて、

9話目出来ました。それではどうぞ。

## 第8話 7月15日戦場（ゲームセンター）前編

俺たちはゲームセンターの前までやって来た。  
それにしても、俺、雄騎、杏、奏、秋季、元、アリアさん、ついでに蒼太で合計8人か、結構人数多いな、

「よっしゃ、じゃあ皆、行こうぜ」

雄騎が先人をきって入っていった。

それに続き俺達もゲームセンターの中に入っていった。

中に入ったら、雄騎が何処からともなく、？マークの書かれた箱を2つ取り出した。

「この中に4枚づつ紙が入ってる、男子は右、女子は左の箱から1枚づつ引いてくれ」

と雄騎が言ってきた。

俺たちは順番に箱の中から1枚づつ引いていった。

俺が引いた紙には『£』と書かれていた。

なんだこれ？

俺は雄騎に説明を求めた。

俺の問いを聞いて紙について説明しだした。

「その紙にマークが書かれてるだろ？それと同じマークの相手とチームを組んでもらう、それで皆で勝負しよう、と言うことだよ。」

つまりはチーム戦か、俺は『£』だから同じ『£』マークの相手とペアを組めば良いんだな。

そう考えて俺は近くにいた元に話しかけた。

「元、お前は何だった？」

「俺は『£』だ。」

「ちなみにペアになるのは男子と女子だからな」

と雄騎が忠告してきた。

そうか、元と組めたら楽に勝てると思ったのにな。

俺がそんなことを考えていると秋季がパートナーを探し始めた。

「『 』の人誰？」

「それ俺だ！良かったな、俺が居たらもう勝ったも同然だぜ！」

秋季のパートナーは蒼太か、…秋季、ご愁傷様

さて、俺もパートナーを探すか、

「この『 』の人は？」

「あ、それ私だ。」

俺のパートナーは杏だった。

隣で、雄騎が奏と同じマークの紙を持つてるから、この2人はペアだろう。

ということとは、

「獅叡君、宜しくね」

「…こちらこそ、先輩」

…アレー？なんだこれ？元とアリアさんがペアって、パワーバランス崩れてるじゃないか、いや、むしろ崩壊してるぞ、これ

そんなこんなで、雄騎のくじによるチーム分けで勝利が絶望的になつてしまったが、まあ、やれるだけやろう

「それじゃあそろそろ行こうか」

と蒼太が何も考えずに歩き出した。

そのあとを、皆付いていった。

まず始めに俺たちはカートレースゲームをやることになった。

台が4台しか無いので£対、\$対で勝負して、その勝ったチーム同士で決勝をする。…らしい

まずは一戦目、俺、杏チーム対秋季、蒼太チーム  
コースは1ー1...と言っても解らないよな？つまり、楕円形のコー  
スを、先に、3周したプレイヤーの勝ちになるステージだ。

杏と秋季はこのでのゲームはやらないと言っていた。蒼太は相手に  
ならないだろう、などと考えていた。

最初のカーブに差し掛かったとき、インコースを取りに行った、が、  
先にインコースに入ったのは、なんと、蒼太だった。

「な!？」

「建太、俺はこのゲームの大会で2度優勝した事が有るんだよ、  
このゲーム、大会なんかやってたんだ。

って言うか何だって？優勝？蒼太が？

「この勝負、俺が勝たせて貰うぜ！建太！」

そう言つて、蒼太はドリフトを駆使し、俺をどんどん引き離して行  
った。

俺もできる限り応戦したが、差は縮まらず蒼太の圧勝で終わった。

蒼太に、負けた。

後ろで雄騎が「なかなかやるなあ」などとほざいていた。

「次は俺たちの番だな、始めようぜ、元」そう言つて雄騎と元が台  
に座った。

「私たちも頑張りますよう、ね？奏ちゃん」

「はい、頑張ります！」

奏とアリアさんも台に座った。

コースは1ー1、つまり俺たちと同じコースだ。

レースが始まり、1つ目のカーブで、元が雄騎にインコースを取ら  
せないように走っている。

その後も元は、インコースを走り続け、徐々に雄騎を引き離してい  
った。雄騎も奮闘したが、差は縮まらず、元の勝利で終わった。

「だあー！負けた！」雄騎が相当悔しがっている。



このコースでは、いかに、相手よりも先にインコースを、走れるかが掛かっているようだ。

「俺の相手は元とアリアさんか、相手にとって不足なし！」

と蒼太が吠えている。

遂に決勝戦が始まる。

4人が席につき、レースが始まる。

4人一斉に発進した。直線では、全然差が拡がらない、やはり、勝負が決めるには、いかに早くカーブを曲がるか、だな。

「この勝負俺が貰うぜ！」

最初に動いたのは、蒼太だった。蒼太がドリフトを使いカーブに差し掛かった。だが、元もドリフトを使い蒼太を邪魔した。

「蒼太、これはチーム戦なんだぞ？」

そう言うと、元の後ろから、アリアさんが2人を抜いて、トップに躍り出た。しかし、それに続き秋季も2人を抜き、走っていった。

「あら、やるわね、秋季ちゃん」

「負けませんよ！アリアさん！」

1つ目のカーブを越え、直線に入った。

今の順位は、1位アリアさん、2位秋季、3位元、最下位蒼太となった。

やはり、直線では差は拡がりも、縮まりもせず、2つ目のカーブでアリアさんと秋季が、先頭を奪い合った。しかしながら、その後も順位は変動せずに、決着がついた。

## 第8話 7月15日戦場（ゲームセンター）前編（後書き）

最近、ポケスペを見て、私もポケモンを書いてみたくなったので、  
そちらも書いていこうと思います。

よろしければ、そちらも見てください。

タイトルは『ポケモンオリジナル』です

第9話 7月15日戦場（ゲームセンター）中盤（前書き）

モンハンに時間を奪われ1ヶ月以上経ってしまいました。  
イヤンクツクは狩猟笛で簡単に倒せました。  
そして昨日、遂にH R 9 になりました。  
やっただぜ（ ）v

## 第9話 7月15日戦場（ゲームセンター）中盤

「くそ、やっぱり元、アリアさんチームが勝ったか」と雄騎がぼやいている。

「これで元、アリアさんチームは100点リードだな」と雄騎が言い出した。

何だって？100点リード？

俺は雄騎に説明を求めた。

雄騎曰く、このチーム戦は、ゲームをやって、勝ったチームにポイントが入っていき、最終的に、一番点数の高いチームが優勝するらしい、

「それじゃあ、次行こうぜ」

次にやって来たのは、パンチングマシンだ。

雄騎曰くこのポイントの付け方は、マシンで計測された数字の合計を、そのまま加算するルールらしい。

しかし、女性陣が「痛そうだからやだ」と言うので、女性陣は、誰が何位かを当てて、正解した人数に応じてポイントを、加算していく方法をとった。1人当てるにつき100ポイントだそうだ。

女性陣は予想を提示させていった。

杏の予想

1位元、2位建太、3位雄騎、4位蒼太

奏の予想

1位元、2位雄騎、3位建太、4位蒼太

## 秋季の予想

1位元、2位蒼太、3位雄騎、4位建太

アリアさんの予想

1位元、2位建太、3位蒼太、4位雄騎

……なんか、1位の予想だけ全員一致だな。

「それじゃあ、1人ずつ殴っていこう」

と雄騎が言った。

何か、この言い方だと雄騎が俺たちを1人ずつ殴っていくみたいだな。

最初に殴るのは雄騎だ。

「よし、行くぞ」ドン！

小気味の良い音が鳴り響き計測が始まる。

計測結果は124ポイントだ。

「ま、こんなもんかな」

雄騎は少し誇らしげに言っている。

このゲームは合計3発殴って、合計が定数を越えていればゲームクリアになるゲームだ。

なので、あと2発残っている。

「それじゃあ、2発目だ」  
ドン！

118ポイント

少し下がった。

雄騎も少し悔しがっている。

そして、次が最後だ。

ドン！

1 3 6

「おしっ！」

雄騎が打ち終わった。

「じゃあ次は俺が行くは」

次は俺が殴ることにした。

1 発目

ドン！

1 0 1

1 0 1 か、雄騎って結構強いんだな。

2 発目

ドン！

9 8

くっ、下がった。

そう思っていると元が助言してくれた。

「建太、殴るときに少し体を捻りながら踏み込みを入れて殴ってみる」

3 発目

俺は元に言われたようにやってみた。

少し体を捻って、踏み込みを入れて、殴る！

ドン！

1 3 8

すごい、さっきより40も多い。

「ま、それでも勝つのは俺だけだな」

「何だよ！40も上がんのか？なんで俺の時に教えてくれなかったんだよ」

「お前は必要なかっただろ？」

「凄いね、建太」

「強いね、健ちゃん」

「凄い、おと……じゃなくて、建太」

「いや、むしろスゴいのは元じゃないのか？」

2発目と3発目の差を見て、蒼太は自信満々に戯れ言をほざいている。

雄騎は元に文句を言っている、が、元はそれをいなしている。

奏とアリアさんと秋季は俺を賞賛してくれている。

杏はむしろ元を賞賛している。

「よっしゃ、次は俺様の出番だな。」

と、蒼太がゲームを始めた。

1 発目

1 2 5

2 発目

1 2 4

3 発目

1 2 6

何とも平均的な数字だな。

「くそー、130越えねー」

蒼太が吠えた。

「まあ、こんなもんだろ」

この時、この場に居る蒼太以外のメンバーが、同じ事を思っていた。そして最後に元の番が来た。

「……やつとか」

元の1発目

バン！

151

…え？151？初代ポ モンの数？

「ま、1発目はこんなもんか」

と元が呟いた。

2発目

バン！

155

また上がった。

2発目を終えた所でアリアさんが

「元君、最後は本気でやってみてよ」  
と元に頼んだ。

何？150以上を出しておいて、本気じゃないのか？

「150位なら、ボクシングやってる奴なら、当たり前のように越えてるからな」

と、雄騎も言っている。

そうなのか、知らなかった。

「分かった。一回だけな」

アリアさんと雄騎に言われて、元が本気を出すようだ。

そして、最後の1発

元は俺に教えた様に、体を捻り、踏み込みを入れ、殴った。  
ボンッ！

『ボンッ！』？なんだこの音？さっきまで『バン！』だったのに、  
そんなことより点数は…



572

なんだ？500！？元のやつこの1回で俺の合計を越えてるじゃないか。

そして、結果発表

「まず、俺が378ポイント、次に建太が337ポイント、蒼太は375ポイント、元が878ポイントで、順位が元、俺、蒼太、建太でした。」

その後、初めの予想の点数を合わせた計算が完了した。

俺、杏チーム

437ポイント

建太、奏チーム

578ポイント

秋季、蒼太チーム

575ポイント

元、アリアさんチーム

1078ポイント

が加算されます。

§チーム、圧倒的だな。

**第9話 7月15日戦場（ゲームセンター）中盤（後書き）**

次は今月中にはあげたいです。

**第10話 7月15日戦場（ゲームセンター）後編（前書き）**

今回は早めに出来ました。

## 第10話 7月15日戦場（ゲームセンター）後編

現時点での結果

- 1位 元、アリアさんチーム1178点
- 2位 雄騎、奏チーム578点
- 3位 秋季、蒼太チーム575点
- 4位 俺、杏チーム437点

勝利は絶望的だな。

「まさかここまで差が開くとは…、どちらにせよ次でラストだぞ」と雄騎が言いながら移動を開始した。

次にやって来たのは、エアホッケーだった。

「最後の種目はご覧の通りエアホッケーだ。ここでは建太でも逆転可能だぞ！」

逆転出来るのか…。って、何？出来るのか？500以上の点差があるのか？

「ではルール説明に入る。」

そう言つてルールを説明しだした。

今回のエアホッケーは7点先取したチームが勝利し、決勝戦に進出するトーナメント方式らしい。

1勝すれば100点、優勝すれば勝利点100+優勝点500で合計600になる。

更に、1ゲーム内で1点取る度に50点追加される。

そして、ストレート勝ち、つまり7-0で勝った場合、ボーナスポ

イント300点&相手の点数を100点マイナスできるのだ!!!  
もしも、2戦ともストレート勝ちすれば1戦目で7×50で350点  
勝利点100点  
ストレートボーナス300点  
決勝戦で7×50点で350点  
勝利点100点  
ストレートボーナス300点  
優勝点500  
合計2000点もポイントが加算される。  
出来たらの話だけだ。

「…やるしかないな。この『帝皇』の名に懸けて!」と俺は叫んだ。  
「出るのか!あの『低皇伝説』が!」  
と蒼太が後ろで叫んでいる。  
「違うぞ蒼太、今はもう『低皇』ではなく、真の『帝皇』に成っている。」  
と元が蒼太に説明している。

実は俺は昔、修学旅行で、今ここに居る秋季とアリアさん以外のメンバー全員にホッケーで勝負して『無勝』という結果に終わり、皆から『低皇』と呼ばれるようになったのだ。  
しかし、その後俺は、ホッケーの特訓をして、その後の試合は全て勝ち続けて、『帝皇』に成り上がったのだ。

「そんな事があったのか。」  
と蒼太が驚いている。  
雄騎がまたあの?ボックスを取り出してきた。  
また、くじ引きをするらしい

くじ引きの結果、第1試合俺、杏チームvs秋季、蒼太チーム、第

2試合、雄騎、奏チームvs元、アリアさんチーム

また秋季と蒼太か…

「それじゃあ、第1試合、建太&杏vs秋季&蒼太、試合開始！」  
その雄騎の掛け声と同時に試合が始まった。

先手は俺たちからだった。

「秋季、蒼太、悪いけど一瞬で終らせるぞ」

そう言つて俺は、パックを台に置いて、それを打ちだした。

カンッ！

ガコン！

俺がパックを打ったあと、秋季と蒼太は動く事が出来ず、パックはポケットに吸い込まれていった。

「「え？」」

秋季と蒼太は哑然としている。

俺が

「さあ、次はそっちの番だぞ。」

と言うと蒼太がパックを台に置いて打つてきた。

カンッ！

カンカンッ！

パックは壁に反射し、こちらに向かってくる。

俺はそれを直接ポケット目掛け打ち返した。

カコン！

パックは再びポケットに吸い込まれていった。

「秋季！アタックは俺がやるからお前はブロックを頼む。」

「分かった！」

秋季たちがフォーメーションを変えてきた。役割分担をするようだ。  
そして蒼太がパックを打ち込んできた。

カンッ！

さつきとは違い今度は直線的に杏目掛けて向かってくる。

カンッ！

それを杏は打ち返した。

杏が打ち返したパックは壁に当たり、蒼太のパックを打つやつ（名前知らねーや）に当たり軌道が変わりポケットに入っていた。

「な！？…ごめん秋季ちゃん」

「ううん、大丈夫だよ」

秋季たちはまたフォーメーションを変えてきた。

今度は秋季がアタック、それがブロックをするらしい。

「行くよ！建太！」

と秋季が言い、パックを打ち込んできた。

カンッ！

カンカン！

秋季も壁にパックを反射させ打ってきた。

しかし俺はそれを打ち返した。

パックはポケット目掛け向かっていく、が、蒼太によって防がれた。蒼太によってポケットに入らなかったパックは、その勢いを残したまま、こちらに跳ね返ってくる、それを俺は壁を利用してポケットにシュートした。

その後も秋季たちの奮闘したが、結果7 - 0で俺たちが勝利した。

第10話 7月15日戦場（ゲームセンター）後編（後書き）

後編だからといって終わりとは限りませんよ



**第11話 7月15日戦場（ゲームセンター）完結編（前書き）**

最近忙しくてなかなか書けません、今回は頑張って時間を作って書いてたら結構早く出来ました

## 第11話 7月15日戦場（ゲームセンター） 完結編

1回戦は俺たちの勝利に終わり2回戦目の雄騎、奏チームVS元、アリアさんチームの試合は（都合によりカット）雄騎、奏チームが7-6で元たちに勝利し、決勝で俺たちと勝負することになった。

「まさか決勝がお前たちとはな、雄騎」

「俺も勝てるとは思わなかったよ、建太」

「私たち、何か忘れられてないか？」

「どうだろうねえ」

そして、俺、杏チームVS雄騎、奏チームの試合が始まった。

先攻は雄騎たちだ。

雄騎がバックをポケット目掛けストレートに打ってきた。それを杏が打ち返す。バックは壁に当たり反射しながらポケットに迫っていく、しかし、奏がそれをブロックしバックは力なく跳ね返ってきた。俺は、跳ね返ってきたバックを打ち返しポケットに叩き込んだ。

1-0先制点は俺たちが貰った。しかし、次は雄騎たちに点を奪われ1-1になってしまった。

その後も俺はポイントを奪ったり奪われたりして、6-6というかなりの接戦を繰り広げた。

そして最後は俺たちのショットから始まる。

最後のショットを打とうとしている時に横で元たちの会話が聞こえてきた。

「これが最後になるんだな」（蒼太）

「そうだね、どっちが点を入れてもゲームが終わるから」（秋季）

「…ん？…この勝負勝った方が優勝だな」（元）

「そうなの？」（秋季）

「そうなのか？」（蒼太）

「そうね、良い？あーちゃん、そうちゃん、説明するわね」（アリア）

元、アリアさんチーム1178点

雄騎、奏チーム578点

秋季、蒼太チーム575点

建太、杏チーム437点

だった。そこにエアーホッケーの点数を加えて

元、アリアさんチーム1478点

雄騎、奏チーム点

1028

秋季、蒼太チーム475点

建太、杏チーム1187点になる。（決勝の点数は計算していない）

ここで雄騎たちが勝てば、点数点350+勝利点100+優勝点500で950点増えて1978点になる。建太たちは点数点300のみプラスされ1487点になり雄騎、奏チームの優勝、逆なら建太、杏チームが2137点、雄騎、奏チームが1328点となり建太、杏チーム優勝

「となるの、解った？」

横でアリアさんの説明を聞き終わり、俺はパックを打った。

そして、そのままパックがポケットに入り試合終了、……とはならず雄騎が打ち返してきた。

その後もお互いにゴールを決めようと打ち続けるが、なかなか決まらず一進一退の攻防が続いた。

どれくらいの時間が経っただろうか、俺は少し疲れてきていた。その俺の疲労を雄騎は見逃さなかった。雄騎はその隙について力一杯俺たちのポケット目掛けパックを打ちはなった。

パックは俺から遠ざかる様にしてポケットへ向かってくる。

俺は手を伸ばした。しかし届かない。俺は負けたと思った。だがパ

ツクはポケットには入っていなかった。パックは杏がプロックしていたのだ。

杏にプロックされたパックは力なく跳ね返っていく、そして、俺は咄嗟に跳ね返っていくパックを後ろから打った、しかしあまりにも咄嗟だったので芯を外してしまった。それでも十分に勢いの増したパックが相手コートに迫っていく。

パックは雄騎とは反対側に向かっていく、しかし、そこには奏がいた。俺は打ち返されると思った。多分皆もそう思っただろう、しかしパックは奏に届くよりも早く雄騎の方へと方向転換をしていた。壁には接触していないのに。つまり、途中でカーブしたのだ。

雄騎も奏もその急な方向転換にはついていけず、パックは雄騎たちのポケットへ入っていった。

雄騎が結果を発表している。

「えゝ、では結果発表です。まずは4位、475点、秋季&蒼太チーム」

「あはは、負けちゃった。」

「まさか…、俺が4位だと」

4位の結果を聞き蒼太は…置いといて、秋季は笑っていた。

秋季曰く「楽しかったからそれで良い」らしい

「えゝ、次に3位は1328点で俺と奏チーム」

雄騎は結果発表で忙しそうだ。奏はその隣でニコニコしている。

この2人は特にコメントは無いようだ。

「続いて2位、1478点で元&アリアさんチーム」

「あらら、ざんねん」

「まあ、分かってたけどな」

アリアさんは残念と言いながらも笑顔だった。元は…まあ、さつき計算してたしな。

っていうかこの2人だけだよな、暗算でポイント計算したの、雄騎

も電卓使ってたし。「そして、今回の優勝者は…、初めはどん底からのスタートで、4位からの奇跡の逆転勝利」  
えらい引っ張るな。

「優勝は2137点で建太&杏チームだああああ!!!」

「叫びすぎだ!」

俺と杏は完全に同じタイミングでツッコんでいた。

戦いは終了しているのに俺たちはまだ戦場にいた。

蒼太が雄騎に質問している。

「おい雄騎、まだなんかやんのか?」

「嫌なら来なくていいぞ、蒼太」

そう答えた雄騎に対して何故か秋季がつつかかっていた。

「ダメですよ、蒼太さんも一緒じゃないと」

何故秋季は敬語なんだ?というか秋季は行き先を知ってるのか?

雄騎は「行けば分かる」とだけ言い歩き続けた。

次に俺も質問してみた。

「ところで雄騎?今回の資金は何処から湧いてきたんだ?」

「今回の資金援助は全て元にまかなって貰いました。」

と答えた。

なに?本気か?結構な額だと思うぞ

そんなことを考えていると雄騎が立ち止まり、言い放った。

「皆でプリクラ撮るぞ!先に言っとくがこれは秋季の要望だからな」

それで秋季は知ってたのか。

この雄騎の、もとい秋季の申し出に反対する奴がいるはずもなく、8人全員で撮ることになった。(もちろんここの資金援助も元だ)皆でプリクラの中に入り、設定をしてカメラの前に集まった。そして、3、2、1、パシャッ!

そうしてこの日は、終了した。

**第11話 7月15日戦場（ゲームセンター）完結編（後書き）**

次は時間かかるかもしれません。

## 戦士の休暇 1（前書き）

これは本編ではありません。

今回はここまでのメインの登場人物の雑談 or プロフィールを載せています。興味のある方はご覧ください。



## 戦士の休暇 1

杏

「戦士の休暇って何よ？」

建太

「さあ？」

雄騎

「この小説に戦闘要素あったか？」

奏

「そう言えば、プロローグで戦ってたよね？」

秋季

「うん、戦ってたよ『博士』と『もう一人』が」

元

「ま、もう皆も誰が戦ってたか解ってるだろうかな」

雄騎

「そうなのか？」

杏

「まあ、博士の方は解るけどさ、もう一人は解らないよな？」

元

「当たり前だ。今までの本編とは全く関係ないからな。」

建太

「え？じゃあアレ何？」

元

「それはまだ俺の口からは言えない。」

奏

「ネタバレってやつ？」

秋季

「それで、戦士の休暇って？」

元

「作者の息抜きだ。」

雄騎

「何だよそれ、いいのかよ」

建太

「まあ良いんじゃないのか、たまには」

杏

「本当に『たまに』になるのか？」

奏

「それは作者次第じゃないかな？」

元

「そつだ、忘れてた。」

秋季

「どうしたの？元さん」

元

「ここで全員のプロフィール揭示しとけて作者が言ってたぞ」

建太

「え？マジで？このタイミングで？」

元

「そつだ。とりあえずこれが俺のプロフィールだ。」

つうはこ  
獅童元

17歳

血液型O型

5月27日生まれ

身長、176cm

体重、58kg

一人暮らし

スポーツ万能、成績優秀だが普段はそんな素振りは見せない。  
基本愛想が無い。

口数は少ないが質問には答えてくれる。なんでも知っている。

建太

「あゝ、普通にやるんだな。じゃあ俺も」

なかじま けんた  
中嶋建太

17歳

血液型A型

身長、172cm

体重、56kg

6月2日生まれ

一人暮らし

特に苦手なものはないが、これといって得意なものも無い。

雄騎

「次は俺だ。」

いちのめつき  
二雄騎

17歳

血液型B型

身長、177cm

体重、60kg

10月19日生まれ

両親と共に暮らしている

なにかイベントを開催する場合基本的に雄騎の発案。  
ちなみに両親が出演する予定は今のところ無い。

奏

「それじゃあ、次は私ね」

あさひ かなで  
朝沙陽奏

17歳

血液型AB型

身長、162cm

体重、ヒミツ

3月26日生まれ

両親と共に暮らしている。成績は優秀だが、スポーツは少し苦手。本編の序盤で口調が替わった。本当の理由は、作者があこの口調がめんどくさくなったので、7月14日雄騎編を無理矢理作成し、強引に変更した。

杏

「なんかスゴいわね奏…」

みしまあんず  
美嶋杏

17歳

血液型A型

身長、163cm

体重、女の子にそんなこと聞かないでよ

1月17日生まれ

両親と共に暮らしている。

スポーツは万能だが勉強の方は奏よりやや見劣りする。

杏の母親（佐恵子さん）は7月14日放課後で登場

秋季

「次、私」

なかしまあき  
中嶋秋季

17歳

血液型A型

身長、158cm

体重、内緒

12月23日生まれ

杏の家に居候。

突然イギリスから引越してきた。なぞの少女。

性格は明るく、なんでも楽しむ、しかし、母親は病気で亡くなり、父親は目の前で殺されるという暗い過去を持っている。

補足

すがた きよみ  
須雅多清水

25歳

血液型AB型

身長、178cm

体重、教えない

建太たちのクラス担任、建太たちが一年の頃に、雄騎に『殿下』というあだ名をつけられて以来殿下という愛称で親しまれている。基本的に淡泊な喋り方なので一年の頃は少し恐い先生とされていた。

建太

「まさか、殿下まで紹介するとは…」

殿下

「私は結構重要な役らしいぞ」

建太

「うわっ！殿下出てきた！」

雄騎

「ていうか、重要な役とか言っているのか？」

殿下

「ストーリー的にマズイだろ、下手したらネタバレだ。」

雄騎

「ダメじゃん！」

杏

「あのー、奏が落ち込んだじゃってるよ」

奏

「私、めんどくさかったんだ…」

雄騎

「大丈夫だ奏、俺がついてる。」

建太

「奏は雄騎に任せるとして、元、これで良いのか？」

元

「これでいい、後は作者から預かったこの手紙をお前が読んで終了だ」

建太

「俺が読むの？えーと、ここまでに登場した双子の細波珊瑚、礁と赤井蒼太は以後登場の予定はありません。あしからず。」

礁

「もう出番終了かよ！」

珊瑚

「うち、もう出られへんの？」

蒼太

「どういことだよ作者！なんとか言えよ！」

作者

「www」

珊瑚・礁・蒼太

「「笑うなー！」」

今回の元は進行役のため特別仕様です。本編ではあまり喋りません。

## 戦士の休暇1（後書き）

実は前回の戦場<sup>ゲームセンター</sup>で『現代と未来と異世界と』の『現代』の一部が終了したんですよ。

次回からは『現代と未来と異世界と』の『未来』編のスタートです。  
お楽しみに



第12話 7月16日テスト前日（前書き）

前回の予告通り今回からは『現代と未来と異世界と』の『未来編』の第1話です。

## 第12話 7月16日テスト前日

朝起きて、顔を洗い、歯を磨き、服を着替え、朝食を食べるとい  
朝の一連の行動を済ませ、家を出た。

家を出ると、杏が自分の家の前で佇んでいた。

俺は杏のもとへ近づき話しかけた。

「どうした？こんな所で？」

「秋季を待つてるのよ、あの子朝弱いみたい」

と言った直後「そんなことないもん」と秋季が飛び出してきた。

秋季曰く、時差ぼけに掛かっているらしい。

「それじゃあ行こっか」

と秋季が言い歩いていった。

…いや、お前を待つてたんだぞ。わかってんのか？

そんなこんなで学校へむかって歩いていった。

学校へ着くまで昨日やっていたテレビ番組の話をしながら登校して  
いた。…と、言っても俺は話についていけないので2歩後ろをつい  
て歩いているだけだが…。

学校に着いて靴を履き替えようと下駄箱を開けると中に1通の手紙  
が入っていた。

「どうした？建太？ラブレターでも入ってたか？」

と杏が冗談混じりで聞いてきた。

……

杏は俺の手の中にある手紙を見て硬直している。

そこへ秋季が来て手紙の中身を読み出した。

そのファンシーな便箋に見覚えのある字でこう書かれていた。

『突然このようなお手紙を出してしまい、誠に申し訳ありません、  
もし、お暇でしたら今日の放課後、屋上までお越しください』

……

手紙を読み終えた俺たちは、教室に急いで向かった。

教室に着くとやはり雄騎は先に着いていた。

俺は雄騎に歩み寄り、片手を空に掲げ、降り下ろした。  
ゴンッ！

「つてー！何すんだよ建太！」

「お前がふざけてるからだろうが！」

俺はそう言いながら、さっきの手紙を雄騎に見せた。

「…こ、これがどうかしたのか？」

まだしらをきるつもりだろうだ。

「どう見てもこの字はお前の字だろうが！」

そこまで言つてようやく認めた。

雄騎の奴、何がしたいんだよ。

そんなことをしているうちに殿下が来てHRが始まった。

「ホームルーム始める、…：特にやることないから1限目の用意し  
とけ、以上だ。」

1限目の授業は殿下の世界史だ。

生徒は各自、世界史の準備を始めた。

そして、始業のチャイムが鳴ると同時に、殿下が「自習」と宣言し、  
どこかへ歩いていった。

1限目の用意しとけつて言つてたよな？

そして、殿下が出ていった後、いきなり秋季が真剣な顔で「テスト  
が終わったら屋上に来て」と言つてきた。

「良いけど」

俺が心の中でもしかして告白か？などと考えていたがそんな考えは  
「皆もこれから誘ってくる」という秋季の1言であっさり打ち砕か  
れた。

それだけ言つと、秋季は、俺の前で教科書をしまい始めている雄騎  
を誘い始めた。

雄騎はその申し出を承諾したようだ。そして、秋季は杏たちの方へ  
歩いていった。そこで何かを話しているようだ。少し間をおき、杏

と奏が頷く素振りを見せた。そして秋季は俺のへと戻ってきた。

「2人もOKだった。」

そして、その後、1限目は雄騎と秋季と3人で話をしていた。

「また元さん来てないね」

実はまだ元は学校に来ていなかった。

「そうだな、またどつかの組織潰してたりしてな」

と雄騎がまたアホな事を言い出した。

そんな話をして、1限目を過ごしていた。

そして、1限目の授業が終わる5分前に元が登校してきた。

元が教室に入った瞬間に秋季が元目掛け走っていった。

何かを話しているようだ。恐らく俺たちに話したことだろう。

そして秋季が戻ってきて「OKだった」と俺に報告してきた。

…別に報告要らないからな。

こうして1限目は終了した。終業のチャイムが鳴ると同時に、殿下がやって来てこう告げた。

「校長からだ『今日はもうめんどくさくなったから帰るよ、皆も帰っていいよ』だそうだ」

それを聞いて、1人の生徒が「帰って良いの？」と殿下に質問した。殿下は「そうだ」とだけ言い残し、教室を出ていった。

は？何？今日の授業終了？マジで？

こうして、この日の授業は全て終了した。

実際は1時間しかしてないけど…。しかも自習だし…。

その後、俺たちは明日がテストであるため、全員家に帰り、テスト勉強を開始した。

もちろん俺も。

そして、この日俺は、1日中テスト勉強をして過ごした。

**第12話 7月16日テスト前日（後書き）**

1話はきっかけだけですが、これから未来へ行きます。

第13話 7月17日～7月22日 テスト、そして…（前書き）

ちよつとした問題を載せましたので、よろしければ、皆さんも御一緒に考えください。

第13話 7月17日～7月22日 テスト、そして…

初めは国語からだ。

え〜と…

次の漢字の読みを答えなさい。

蟋蟀

紫陽花

釦

…読めるかー?!

次の平仮名を漢字に直しなさい。

ゆうつつ

いんぼう

ふんがい

…何かどっかで見たような？

次は数学だ。

次の計算の答えを求めなさい。

2 5 6 × 9 4

1 0 6 × 4 4 5

6 9 4 × 1 0 5 2

∴ 電卓使いてえ。

次の5、6、7、8の数字を+、-、×、÷、（ ）を用いて、1番大きい数字と、1番小さい数字を作ちなさい。

∴ えらく簡単だな。

次は英語

次の英単語を日本語に訳せ。 electronics

manufacturer

performance

よし、何とか解る。

次の日本語を英単語に直しなさい。

メダカ

鮪

鯨



… 魚類？ いや、鯨は哺乳類だ。

理科

元素記号『a』を含む物質を3つ答える。

これは簡単だな。

地球上に存在する金属の内、固体以外の金属を1つ答える。

解る、解るぞ！

社会

国の名前を10個答える。（日本以外）

… 何か殿下の問題、雑だな…。

以上が期末テストの主な5教科の問題の1部です。

テストは全て終了した。やれる事はやった。あとは欠点が無いことを祈るだけだ。今回は雄騎もちゃんと出来ていたようだ。奏に教わったのがよかったのか？

そして、俺の後ろの席の主は既にそこにいなかった。

先に行ったようだ。

俺は雄騎、杏、奏、元と共に屋上へ向かった。

屋上の扉を開け放つと、そこには、秋季の姿があった。

「ありがとう、来てくれて」

屋上の扉をくぐると秋季にそう言われた。

更に秋季は続けて質問を投げ掛けてきた。

「皆は、この世界が好きですか？」と。

さすがに驚いた。こんな質問、されたことがない。というより普通されない。

それでも、皆は少なくとも嫌いでは無い事を秋季に告げた。

すると、秋季は「よかった」と一言呟き。俺たち5人に「助けて」と言ってきたのだ。

俺たちはその言葉に驚き、何があつたのか秋季に問いかけた。

すると、秋季は「信じられないと思うけど」と前置きをして、説明を始めた。

秋季の説明はこうだ。

秋季は実は未来から来た未来人で、未来では人と機械人間の戦争があり、人の戦力は枯渇状態なのだ。

それで、秋季は過去へ遡り、俺たち5人に未来を救ってもらうために、この時代に来たのだという。

その説明を聞いた俺たちは少し沈黙を続けた。

さすがにそんな話をされて「解った。それじゃあ行こう」とはならない。

そんな俺たちを見て秋季は「やつぱり…むり、だよね…」と俯きながら言った。

その時、俺の目には、俯いている秋季の目元から零れ落ちる、1滴の涙が見えた。

その涙を見て、俺の決心が固まった。

「俺、行くよ、未来」と秋季に告た。

「ホントに！」その言葉と共に、秋季の顔には瞬く間に光が戻り、いつもの明るい秋季が戻ってきた。

そして、俺が未来へ行く事を決意すると、他の皆も、それなら自分も、と未来へ行く事を決意した。

「で？どうやって行くんだ？」

と雄騎が聞いている。

秋季はそれに答える。

「このメモリーチップを携帯端末にセットして、移動先の時間と移動する人を指定すればいいの」

秋季はmicroSD位の大きさのメモリーチップと手の平サイズのデバイスを取り出して説明をしてくれた。

その説明を聞き終えた所で、俺は疑問に思っていることを秋季に聞いた。

「未来では戦争してるんだろ？ならもつと人を集めた方が良くないんじゃないか？」

その言葉を聞いた秋季はそれを否定した。

「無理だよ」そのあとに続けて「未来に連れていけるのは、未来に居ない人だけだから……」

俺は、いや、俺たちはその言葉に押し潰されるかのように、言葉を出せずにいた。

その沈黙の中で秋季は未来へ連れていく為のルールを説明をした。まず、同じ空間の同一時間内に異時間同異体が存在してはならないつまり、今の自分と未来の自分が鉢合わせてはいけない。という事らしい。もし、鉢合わせた場合、両方の存在が消えてしまう。そう説明をうけた。

ならば直接出会わなければ良いのではないかと、思ったがそれは出来ないらしい。

なぜなら、同一時間内に異時間同異体が存在するというだけで、存在は消えないものの未来が変わってしまう可能性があるからだそうだ。

ということは、今ここにいる5人は、未来ではもう死んでいる、と

いう事か？

「俺たち…死んだ、のか？」

俺は声を震わせながら聞いた。

「そうじゃないよ、ただ、存在が確認出来ないだけ」

俺の質問に対して秋季は否定するように答えた。

「確認出来ないってやっぱり死んでるんじゃないか！」

俺は冷静さを喪い声を荒げて言った。

それに対し、秋季も声を震わせ、否定してきた。

「確かに死んじゃってるかもしれない…でも遺体は見つかってないの！元さんも、雄騎さんも、杏さんも、奏さんも！」秋季はそう言った後、再び涙を流し、俺の方を向いて

「それにお父さんも！」

その言葉に俺は圧迫されていた。

秋季は俺の方を向いて「お父さん」と言った？ということは俺が秋季の父親なのか？でも秋季の父親は秋季の目の前で殺されたんだよね？ならなんで「遺体が見つかってない」なんて言うんだ？

「お父さんは…ぐすつ、間違いなく私の目の前で刺された…でも次の日に…ぐすつ、お父さんの遺体が無くな…ってたの」

秋季がそこまで言って、雄騎が言葉を放った。

「建太、確かめに行こう、未来の俺たちを」その言葉に俺たちは未来に行く決心を固めた。

第13話 7月17日〜7月22日 テスト、そして…（後書き）

問題の答えです。

蟋蟀〓コオロギ

紫陽花〓あじさい

釦〓ぼたん

ゆううつ〓憂鬱

いんぼう〓陰謀

ふんがい〓憤慨

2 5 6 × 9 4 = 2 4 0 6 4

1 0 6 × 4 4 5 = 4 7 1 7 0

6 9 4 × 1 0 5 2 = 7 3 0 0 8 8

一番大きい数字

5 × 6 × 7 × 8 = 1 6 8 0

一番小さい数字

( 5 - 8 ) × 6 × 7 = 1 2 6

electronics

電子工学、電子技術

manufacturer

製造業者、メーカー、工場主

performance

演奏、上演、公演

メダカ "killifish"

鮪 "tuna"

鯨 "whale"

『a』を含む物質

金、銀、ナトリウムなど

固体以外の金属

水銀

国名

アメリカ、アジア、アフリカ、イギリス、イタリアなど

です。

## 第14話 7月22日 敵

秋季の話聞いた俺たちは未来へ行く事を決心した。

「ところで、何で俺たちだけなんだ？戦争ならもつと死んだ奴もいるだろ？」

と雄騎が秋季に聞いている。

雄騎よ、もう少しオブラートな言い方があっただろ。

秋季は雄騎の問いに答える。

「未来での戦闘能力が皆さんだけずば抜けて高かったからです」と答えた。

元はともかく俺たちはたいして強くないと思うけどな？

「ところで、何年後にいくの？」

と奏が聞いている。

「今から行くのは、20年後の2539年です」

秋季はそう言った後小さな声で

「20年後しか行けないから…」と呟いた。

そして、少し間をおき

「…それじゃあ、行きますよ」

と言い、デバイスにメモリーチップを差し込んだ。

それと同時に

「ちよい待ちい、そう焦んなや」

という声が聞こえてきた。

俺たちが声の方へ振り返ると、そこに1人の青年が立っていた。

秋季はその青年を見ると「イサギ！」と叫んだ。

そのイサギとは未来の機械人間である。簡単に言くと敵だ。

「いやあ、あんた等の時間移動先（居場所）探すん苦労したで」

「嘘言わないで！あなた達が時間移動制限してるくせに！」

秋季はイサギを見た途端に戦闘体制をとった。

「あちゃ、やっぱバレとったか、しもたなあ」

とイサギは言っているが、言葉で言ってる程困っている様子は無い。  
「こいつが機械人間？」と杏が驚いている。なぜならイサギはどこからどう見ても普通の人間にしか見えないからだ。

「まあええは、とりあえずあんたら、未来行かんと、過去に行つて来い」

イサギは手の平をこちらへかざしてきた。

その直後、俺たち6人はその場に倒れた。

何が起った？

動けない、なんだ？皆大丈夫か、声を出そうとするが唇すら動かせない、強烈な睡魔に襲われる、だめだ、目蓋が重い、もう耐えられない、眠……い

こうして俺たちは深い眠りについてしまった。



## 第15話 記憶1（前書き）

なぜだろう

ネタはあるのに全然書けない…

と考えていたら

それは時間がないからだ。

という答えに達したスリ師キャンドルです。

そんなことは置いといて、本編どうぞ

## 第15話 記憶1

「…くん…建太くん」

誰だ？俺の名前を呼ぶのは？

「早く起きなよ建太くん」

俺はその声に応えるように目を覚ました。

「やっと起きた」

俺が目を覚ますとそこにはポニーテールの女の子がいた。

「夏耶？」

彼女は山乃邊<sup>やまのへ</sup>夏耶<sup>かや</sup>、俺が小学生の頃、一番よく遊んでいた友達だ。

「建太くん、早く行こ？」

どこに？

「どこつて、決まってるじゃない？」

決まってる？

…ちよつと待てよ、この景色どこかで見たような気が…。

「もしかして本当に忘れたの？」

いや、待て。

…思い出した。

「やつと思い出した？」これは俺が小学生の頃、夏耶と2人で過ごしてた時と同じだ。ということは、今から行くのは…。

「建太くん、準備できた？」

「おお、今行く」

夏耶に呼ばれ、荷物を持って家を出た。

外に出ると夏耶が待っていた。

夏耶は「早く行こ」と言い手を差し伸べてきた。

俺はその手を取り、夏耶と肩を並べ歩きだした。

まず、俺たちは駅へ行き、切符を2枚購入した。

ちなみに2枚とも子供料金だ。

準備していた時に気付いたのだが、どうやら今の俺は小学生の頃の体型になってしまっているようだ。

そして、電車に乗って海までやって来た。

今は夏休みの真最中なので、浜辺や海の家などは海水浴に来た人で賑わっていた。しかし、俺たちの目的地はここではない。俺たちの目的地は秘密基地だ。

実は、この浜辺には少し離れた所に離れ小島が有る、そこを俺たちの秘密基地にしている。

そして、その離れ小島には誰も人が立ち寄らない。と言いか立ち寄れない。

なぜ、頑張れば泳いでも渡れる位の距離の小島に誰も立ち寄らないかと言うと、実はその島の周囲50m付近の潮の流れが異様に速いためだ。

泳ぐのはもちろん、船を出しても潮に流されるほどの激流が流れている。

なのでいまは無人島になっている。

ならば、俺たちはどうやって島に行くかと言うと、この浜辺に岩場のエリアが有り、そこに秘密の洞窟がある。その洞窟を抜けると島に行けるようになってる。

「建太くん、懐中電灯貸して」

俺たちは早速、洞窟の中へ入っていった。

もちろん誰にも見つからないように

洞窟の中は、入口付近は狭いが、少し奥へ行くとかなり広い空間に出る。

この辺りからは2人並んで歩ける。

しばらくすると、道が右、左、まっすぐの3つに分かれていた。

しかし、俺たちは迷うことなく、まっすぐ進んでいった。

その後も、何度か分かれ道があったが、全てまっすぐ進んでいった。そして、10分程歩いていると、再び道が狭くなってきた。

もうすぐ到着する。俺たちの秘密基地、ドリームアイランドに。

洞窟を抜けると青々と茂る木々が目の前に広がった。この辺りは小さな森になっている。

森を抜け、浜に出るとさっきまで俺たちがいた浜辺が遠くに見えた。

「じゃあ、泳ごつか」

夏耶に誘われ、俺たちは泳ぎ始めた。

しばらく波に揺られていると「競争しよつか」と夏耶が言ってきた。俺たちはこの島に来る度に競争していた。

俺と夏耶の戦績は大体五分五分だ、そして、俺の記憶が正しければ、今回勝つのは俺だ。ただ、そこまでは思い出せるが、その後が思い出せない。そんなモヤモヤを抱えたまま、レースを開始した。

このレースのルールは、砂浜に木の枝を突き立てて、沖から砂浜に向かって泳ぎ、木の枝を取った方が勝ちだ。沖と言っても砂浜までの距離は20m程だが…。

俺たちはスタート地点に向かった、到着すると、2人同時に「よい、スタート」と掛け声をかけスタートした。

俺は全力で泳だ、夏耶も全力で泳いでいる。差は拡がらない。15m位泳ぐと、砂浜に足がつく、ここまで来ると後は走るスピードの勝負になる。

俺は泳いでいる体勢から上手く走る体勢に切り替えることが出来たが、夏耶は少しもたついてしまった。その一瞬の差で、俺は夏耶に勝った。

「あゝあ、負けちゃった。今回は建太くんの勝ちか」

と言っていたが、余り悔しそうでも無かった。

泳ぎ終わった後、俺たちはそろそろ帰ることにした。

荷物を片付けて、最後に貝殻を1つ拾って帰った。これはこの島に来たら毎回やっていることだ。俺たちは、ここへ来た時に使った洞窟を通って帰ってきた。

こちらの浜はまだ、海水浴の人達で賑わっていた。

俺たちはその光景を横目に見ながら駅へ向かった。

駅に着くと切符を買い、電車に乗って自宅のある駅に向かった。

駅に着くと、俺たちはそのまま帰路についた。

「今回は負けたけど、次は私が勝つからね」

「いや、次も俺が勝つ」

「お、言っただろ」

などと、他愛の無い話をしていたその時、曲がり角の死角から車が飛び出してきた。

キキィー、ドンという音と共に、夏耶の身体が宙に舞った。

宙を舞う夏耶の身体はすごい勢いで地面に叩きつけられた。

「夏耶…、夏耶起きろよ！」

俺は夏耶のもとへ駆け寄り、身体を揺すり声を掛けた。

しかし、夏耶はピクリとも動かない、それどころか、心音は弱くなり、呼吸は止まり、頭からは大量の血が流れだし、地面に溜まっていた。

「夏耶……！！！」

この5分後、救急車とパトカーのサイレンの音がこの周囲一帯に鳴り響いた。

**第15話 記憶1（後書き）**

次回は10日後です。

## 第16話 記憶2（前書き）

前回10日後と言っていたのに、ぎりぎりになってしまった。  
AM2時はセーフですか？それともアウトですか？  
出来ればセーフにしていたきたい。  
それはそれとして『記憶2』どうぞ

## 第16話 記憶2

「杏、早く起きなよ、遅刻するわよ」

うーん、お母さんもう朝？

……え？朝？

「早く起きなさい！」

「え？あれ？お母さん？」

私はお母さんに起こされていた。何でだろう？

確か学校の屋上でイサギって人と会って…それから…どうしたわけ？

「もう！いいから早くしなさい！」

私は、お母さんに怒鳴られ、考えるのを中断して学校へ行く為に服を着替えようとした。しかし、皇修学園の制服が見つからなかった。

「お母さん、制服無いよ？」

「いつもの所に掛けてあるでしょ？」

確かに、いつもの場所に制服は掛かっていた。ただ、掛かっているのは、皇修学園の制服ではなく、中学校の制服が掛けてあった。

「皇修学園の制服は？」

「なに言ってるの？あんたが皇修に行くのは2年後でしょ？」

え？2年後？と言うことは、今は3年前って事？

私は仕方なく、中学校の制服に着替え、中学校に向かうことにした。おかしい、何かが変わだ、未来に行くために集まったのに、過去に来ている…、そういえば、あのイサギって奴、過去に行つてこいつて言つてたけどあいつのせい？

そんなことを考えながら登校していると、後ろから、声を掛けられた。

「あーちゃん、おはよう」

振り返ると、ツインテール女の子が立っていた。

「おはよう、ずっきー」

彼女は、綾風瑞紀あやかぜ みずきこの頃の友達、高校は別の学校へ通うことになる。



「ねえ、今日だよね」

「何が？」「お兄さんが帰ってくるのがだよ、9月8日だって言うてたじゃん」

「あ、うん、そうだよ」

今日は9月8日なのか？

「じゃあ、今日あーちゃんの家遊びに行くね」

「別にいいけど」

そう答えると瑞紀は「やったー」と喜んでいた。

教室に入ると友達に「おはよう」と挨拶をして席についた。

しばらくすると1限目が始まる。

しかし、私は授業を全く聞いていなかった。

「（今日が3年前の9月8日なら、今日お兄ちゃんは、家に帰ってくる日だ。確か他にも何かあったような…）」

「それじゃあ、次の問題、美嶋さんお願いします」と、先生にあてられた。

しかし、考え事をしていて全然聞いていなかった。

「すみません、どこですか」

そう聞いて、問題を読み、答えた。

「X＝3、Y＝-2です」

「はい、正解です。では、次の問題を…」

答えを言い終わると、私は再び、考え始めた。お兄ちゃんが帰ってきた後のことを、しかし、結局思い出せずに、1限目は終了した。その後も、一向に思い出せずに6限目まで終了してしまっていた。

放課後

「あーちゃん、帰ろ」

授業が終わるとずっきーが私の机までやってきた。

私とずっきーは2人一緒に帰路についた。

「あーちゃんのお兄さんに会ったのほんとに久しぶり、早く会えない

かな？」

と、ずっきーは私の家に付くまでこの調子だった。

「お母さんただいま」

「お帰りなさい、あら瑞紀ちゃん、いらっしやい」「お邪魔します」と、定番の挨拶を済ませ私の部屋へ向かった。部屋につくとずっきーがいきなり聞いてきた。

「で？いつ帰ってくるの？」

「5時」

今は4時30分後30分ある。

「30分後か、その間どうしよつか、あーちゃん」

特にやることはなかった。なので雑誌を読みながら時間を潰すことにした。

10分後

「あーちゃんこの服、どう？」

「うーん、それなら私はこっちな？」

20分後

「ずっきー、この服はどう？」

「ん？いいじゃんそれ今度見に行こ！」

30分後

「うーん、ちょっと疲れた…」

ずっきーがそうだった時、「ただいま」という声が聞こえてきた。

「帰ってきた！」

そういつて、ずっきーが玄関に走っていき、みんなでお兄ちゃんを出迎えた。

「母さん、ただいま」

この人が私のお兄ちゃん、美嶋颯斗22歳

「お帰り、颯斗」

「お帰りなさい、颯斗さん」

「お、みーちゃん来てたんだ。うん、ただいま」

「お帰り、お兄ちゃん」

「おう、ただいま」

「突然なんだけど、みんなに紹介したい人がいるんだ…入ってきて」  
お兄ちゃんがそういった後、お兄ちゃんの後ろから1人の女性が現れた。

「この子は幸村沙綾、俺この子と結婚することになったんだ」

「幸村沙綾です。颯斗さんとお付き合ひさせていただいてます」

知っていた、私はこうなることが分かっていた。そして、ずっきーがお兄ちゃんのこと好きだったことも知っている。

「……」

「ずっきー…」

ずっきー落ち込んでるの？

そう思っていると、ずっきーが口を開いた。

「颯斗さん、沙綾さん、おめでとうございます、どうかお幸せに」

そういい残し、ずっきーは私の部屋に入って行ってしまった。

私もその後を追って部屋に入って行った。

「あーちゃん、私、帰るね…」

そういって、ずっきーは帰路についた。

その後、お兄ちゃんたちも夕食を食べたあと、東京に帰って行った。

そして、その6時間後に、お兄ちゃんたちの乗った車が事故に遭ったことを知ったのは、次の日の朝だった。

## 第16話 記憶2（後書き）

10月1日には掲載したいです。

前は日にち指定をして大変だったので、今回は曖昧な表現で申し訳ないです。

### 第17話 記憶3（前書き）

本当はこの話は2ヶ月前には掲載できていて、次のが今くらいになるはずだったんですが、予定が狂ってしまい2ヶ月も遅れてしてしまいました。

楽しみにしていただいていた皆さん、すみませんでした。

それと、今回から少し設定を変更させて頂いてます。といっても、小説の内容が変わってる訳では無いのでご安心ください。

変更させて頂いているのは小説の書き方ですので皆さんにはあまり関係無いのですが、知っておいた方が読みやすいと思いますので、お伝えしておきます。

今回、変更（というより追加ですね）したのは

まず、人物が喋る際、直前に1行改行し、喋っている人物の名前を載せています。

これはリアルの友人に感想を聞いたところ、「ここ誰が喋ってんの？」と聞かれたためです。

次に誰の目線でストーリーを進めているか、です。

この小説は基本的には主人公である中嶋健太の視点で話を進めているのですが、たまに別のキャラクターの視点でストーリーを進めていたのをおきずきだったでしょうか？

おきずきにならなかった方も少なく無いと思います。

ですので、今後はその話の前書き、今回ですと雄騎の視点で進めさせて頂きます。

これも友人に指摘されたために改善させて頂きました。

今回は以上の2点です。

皆さんもよろしければ感想やご意見がありましたら書き込んでください。

まだまだ未熟ものですが今後もよろしくお願いします。

## 第17話 記憶3

ピピピピピ...

時計のアラーム音が部屋に鳴り響いている。

「止めなきゃ」俺はそう思い時計に手を伸ばした。

ピピピッ

アラームは鳴り止んだ。

朝か

…あれ？朝？なんで？しかもここ、俺の部屋だし

雄騎

「悩んでも仕方ないし、学校行か、建太たちと話しすれば、なんか解るかもしれないしな」

そして、俺は学校へ向かった。

登校中、1人で歩いている健太を見つけた。

とりあえず俺は、健太に声をかけ、事情を聞き出そうとした。しかし。

健太

「雄騎、とうとう夢と現実も分からなくなったか、残念だよ」と、軽くあしらわれた。

嘘だろ、どうなってんだよ、昨日のイサギって奴はどうなったんだよその後、学校につくまでの間、健太に説明し続けたが、反応は変わらなかった。

学校に到着し、教室に向かった。

しかし、その時、健太に止められた。

健太

「雄騎、どこ行くんだった？そっちは2年の教室がある方だぞ」

何？どういうことだ？俺は2年だぞ？バカだけどちゃんと進級できたはずだ。

しかし、健太は俺たちは、まだ1年だと言う。

仕方がないので1年の教室へ向かった。

教室につくと、健太の言った通り、奏、杏、ついでに蒼太まで居る。しかしその中に、元は居ない、だが、元は元々あまり学校に来ないので気にしていなかった。

殿下が教室に入ってきてホーームルームが開始された。

殿下

「今日は転校生が来たぞ、入って来い獅童」

殿下に呼ばれて入って来たのは、紛れもなく元だった。

元

「…獅童元…しいうでよろしく」

元が転校してきた？ということとは本当に1年前なのか？

殿下

「お前ら、1限目体育だからさっさと着替えて行け、じゃ解散」  
男子が教室から出て行く中、俺と健太は元の席までやってきた。

雄騎

「男子は更衣室で着替えるんだ。一緒に行こうぜ」

そういうと、元は何も言わず俺たちの後について来た。

更衣室に向かって歩いているとこの学校の柄の悪い3年生達が歩いてきた。

俺と健太はその3年生を避けて通ったが、元は避けずにぶつかってしまった。

3年生



「おいその1年坊、ぶつかつといて挨拶なしか？ああ？」  
なんだ？いつの時代の不良だ？アホ丸出したぞ…、ま、口には出さないけど。

3年生

「おいこら、ちょっとツラかせや」  
と、アホな3年生達が元に突っかかってきた。  
しかし元は諸ともせず言い返した。

元

「止めとけ、後悔するぞ」  
その元の言葉が感に障ったのか、3年生は更に絡んでくる。

3年生

「ああ？後悔するだあ？俺がお前にやられるってか？」

元

「それもあるがそうじゃない、ここは職員室の前だ、問題を起こせば停学は避けられないぞ」  
それを聞いた3年生は「ちっ」と舌打ちをし、「覚えてろ」と捨て台詞を残して去っていった。  
本当絵に描いたような不良だな。

アホな3年生達に絡まれた後、体育館へ来て体育の授業を受けていた。

ちなみに授業内容はバスケットだ。

俺は元、健太、蒼太、久しぶりに学校に来ていた戸田幸之介達とチームを組んでバスケの試合をしていた。

戸田幸之助は体重96Kgのぽっちゃり（けしてデブとは言わせない）体型、あだ名はムーちゃん（理由は聞かないで）

相手チームは安田（剣道部）、朝風（サッカー部）、文山（バスケット部）

部）、川瀬（陸上部）、宮村（野球部）の5名だ。

ふざけてるだろ、これ

最初にボールを手にしたのは文山だった、文山はそのままロングシュートを狙ってきた。そのボールの軌道はゴールに吸い込まれていく、しかし、ボールはゴール到達する前に蒼太によって弾かれた。

蒼太の弾いた球をムーちゃんがキャッチし、相手のゴールヘドリブルで切り込んでいく。なんとムーちゃんは動けるデブなのだ！

でも流石は運動部、動けてもデブはデブのムーちゃんを意図もたやすく追い詰めた。

逃げ場のなくなったムーちゃんは健太にボールをパスした。健太はそのボールを受け取り、ムーちゃん同様、ドリブルで切り込んでいった。

しかし、そこは現役バスケット部の文山にボールを奪取され、そのままゴールされてしまった。

雄騎

「強え〜」

健太

「流石現役運動部、動きいいな」

蒼太

「ま、1点くらい俺がすぐに取り返してやるよ」

ムーちゃん

「バスケットから1点じゃなくて2点だぞ蒼太」

ゲームが再開され蒼太が突っ込んでいったが宮村にボールを奪われ、更に2点、点差が開いた。

雄騎

「何が取り返すだよ、逆に取られてんじゃない」

ゲーム再開、再びムーちゃんがドリブルで突っ込んでいく、が、やはり文山に奪われる、またゴールを決められると思った時、

文山

「なっ！」

元が文山からボールを奪い取り、俺にパスしてきた。しかも俺はかなり前に出ていたため、周りには誰もいない、完全にフリー状態でシュートを放ち、入った。その後、相手にゴールを決められ2対6、俺達も奮闘し4対6になったところで残り時間が5分になった。相手ボールからの再スタート、文山達は的確にパスを回し迫ってくる。

俺達も負けじとボール奪いにいく、すると健太が安田からボールを奪い取った。そのままゴールヘドリブルで走っていく、しかし、川瀬に追いつかれた為、ゴール下にいるムーちゃんにパスした。しかし、ムーちゃんも宮村にマークされていてシュートが出来ない、なのでムーちゃんも蒼太にパスした。しかし蒼太は受け取った後、ブロックされているにもかかわらず、シュートした。

もちろんそんなのが決まるわけもなく朝風に止められ、反撃されてしまう、と思いきや、朝風に奪われたボールを元が奪い返し、スリポイントシュートを放った。

元の放ったシュートはきれいにゴールへ吸い込まれていった。

これで7対6、逆転だ。

そして、ここで試合終了！…とはいかず後50秒残っている。

相手も諦めていない、ゲームが再スタートされた。

文山、朝風、宮村の3人でパスを回しながらゴールを目指してくる。残り30秒ゴール下での攻防、シュートを決められれば俺達の負け、守りきれば勝ち、そんな状態で俺達は攻撃を捨て、完全に守りに徹していた。

（学校の授業でどこまで必死なんだよ、とか言うなよ？）

文山達は果敢にシュートを放ってくる、それを俺達は止める。後10秒その時文山が1歩さがりシュートを打ってきた。

俺は手を伸ばした、しかし届かない

「こりや無理だ、取れない、逆転負けか…」と思ったとき、後ろの方で「パシッ」という音が聞こえ、振り返ってみると、元がボールをキャッチしていた。

そして、着地した元は、ドリブルで前へ出て行き、スリーポイントシュートを放った。そのボールの軌道は寸分狂わずゴールへ飛び込んでいった。

第17話 記憶3（後書き）

ちなみに

記憶1は健太

記憶2は杏

次回の記憶4は奏の視点で物語を進めています。

## 第18話 記憶4（前書き）

前回は言いましたが今回は奏視点の物語です。  
では皆さん、どうぞ

## 第18話 記憶4

「…うん」

起きなきゃ、そう思った。なぜかそう思った。何でそう思ったんだろう？

目を覚ました私はその理由を理解した。

ここは私の大嫌いな場所。

私が私でいられない場所。

もうすぐ6時になる。6時になるとあいつがやってくる。

???

「おら、さつさと起きろ、…ってもう起きてんじゃねーか、さつさと降りて来やがれ」

奏

「神楽坂…」

こいつの名前は神楽坂「かぐらざか」晃瑤「こうよう」、私は6歳の時にこいつにさらわれた。

神楽坂はこんな喋り方をしているが、実は女性なのだ。

神楽坂

「てめえ、1年もここにいてまだわかんねえのか？口の聞き方には気をつける」

と私の髪の毛を引っ張りながら言ってきた。

奏

「そう…でした…ね。すみま…せん…でした」

そついうと神楽坂は私の髪の毛を離した。

神楽坂

「分かりやいいんだよ、ほら、さつさと来い」

そついつて神楽坂は階段を降りていった。

私もその後をついていく、目的地はわかっている、パソコンが1台置かれていて、それ以外は何もない部屋。

神楽坂

「ほら、さつさと始めな」

神楽坂にそつ言われ、私はパソコンに向かってキーを打ち込んでいく。

当時の私は自分で何をしているのかわからずにキーを打ち込んでいたが、今ならわかる、今、私が神楽坂にやらされているのはハッキングだ。

神楽坂

「今日はそのファイアウォールを全部解除したら終わりだ」

そつ言つて神楽坂は部屋を出て行った。

私は神楽坂が出て行くとパソコンに向き直つた。

なぜ私がこんな事をさせられているかと言うと、私は過去に一度だけ日本国軍のデータベースにアクセスしてしまったことがあつた。その後、どこから聞きつけたのか神楽坂にさらわれたのだった。

今私が消すように言われたファイアウォールは、おそらく米国軍のデータベースに侵入するためのファイアウォールだろう、何の為かは分からないけど。

しかし、今の私にはそんなのは関係ない、私はここから逃げ出すん



だ。

まず、この建物のシステムを書き換える。

ここの警備は神楽坂が1人と後はロボット警備兵が15機配置されている。

そのロボット警備兵は別の部屋にあるマザーコンピューターと呼ばれるコンピューターで管理されている。なのでそのマザーコンピューターにアクセスしてプログラムを書き換えればここを抜け出せる。

午前11時30分

プログラムの書き換えが完了した。

私はパソコンの電源を落とし、部屋を出た。

部屋の外にはロボット警備兵が2機配置されていた。普段ならここで警報が鳴り響き、ロボット警備兵に捕獲されるところだった。でもプログラムを書き換えたからその心配はない。

私は出口を目指し進んでいく。

しかし、出口にたどり着く前に神楽坂に見つかってしまった。

神楽坂

「あゝら奏ちゃん、こんな所で何してるのかな？さつさと戻って作業を続ける」

奏

「嫌だ！私は家に帰る！お願い、ロボット警備兵さん達！」

私のその声に反応してロボット警備兵達が神楽坂を取り押さえた。

私はその隙に出口を目指し駆けていった。

神楽坂

「逃げられると思うなよ！」

神楽坂はポケットからリモコンを取り出し、スイッチを押した。

するとロボット警備兵達の動きが一瞬止まり、私の方へ迫ってくる。

奏

「ロボットさん達、神楽坂を足止めして」

神楽坂

「無駄だ、このスイッチを押すことでこいつ等のプログラムは全て初期化される。」「ウソでしょ」

そう言いたくなった。

でもそんな事を言ってる場合じゃない（別に言う位は問題ないけど）それよりも私は出口を目指した。

私が出口に到達する直前に出口の扉が開き、目の前にロボット警備兵が2機現れた。

神楽坂

「はい、残念でした、もうちょっとだったのにね」

神楽坂がそう言ってる中、扉側のロボット警備兵達が私に迫ってきている。

私がダメだ。捕まる。と思ったその時、扉側のロボット警備兵2機が突然爆発した。

私はその爆風で少し吹き飛ばされた。

???

「お、すまん奏、巻き込むつもりは無かったんだけどな」  
そこに現れたのはひとりの男の人だった。

神楽坂

「だれだてめえ、何しにきた」

???

「俺はこの子を助けに来たただの通りすがりの学生だよ」  
そう言いながら男の人は私を抱きかかえた。

神楽坂

「させるかよ！行けポンコツ共！」

神楽坂の命令に従いロボット警備兵達が私を取り返すべく、男の人に襲いかかった。

しかし、男の人は微動だにせず、片手をロボット警備兵達に向けた。

???

「ダークネスブラスト」

男の人がそう呟くと男の人の手の平から黒い炎が出てきてロボット警備兵達を襲った。

炎は瞬く間に建物を飲み込み炎上している。

そして私は、男の人の腕の中で気を失ってしまった。

???

「ん？あー、気絶しちゃったか、ま、良いか、それじゃあ家に帰ろう、奏」

次に私が目を覚ました時は、目の前にお父さんとお母さんの顔があった。

私が目を覚ました途端、お母さんは泣き崩れ、お父さんは私を抱きしめた。

## 第18話 記憶4（後書き）

今回は連続投稿です。  
次は記憶5です。

## 第19話 記憶5（前書き）

連続投稿です。

今2時50分です。

眠たいです。

そんなことは置いといて、今回は秋季視点です。

## 第19話 記憶5

ドーン

なんだろう今の音？外から聞こえてきたけど…

私はドーンという大きな音に目を覚ました。

あれ？なんで私、こんなところで寝てたんだろう？それにここ、見覚えがあるような…

そんな疑問を残しながらも、外へ様子を見に行った。

外に出ると、再び『ドーン』という大きな音がした。

！！

私は外の景色を見てここがどこなのか理解した。

????

「く、これだけ用意してこの様とは」

ここは、あの日の夜だ

????

「おや？お嬢さんが起きてきましたよ、博士」

あれ？あの日あいつはそんなこと言っただけ？

20年後健太

「秋季、家に入ってる！」

そうだ、ここであいつが、ジグザが私に刀を投げってくる  
それで私を庇ってお父さんが…

ジグザ

「そうはさせませんよ」

ドカーン

え？

ジグザ

「さて、これで隠れる場所は無くなりました」  
なんと、ジグザは今まで私の眠っていたテントを破壊した。  
違う、あの夜とは何かが違う

秋季

「お父さん、私も戦うよ」

そう言っつて、私は機械人間の刀を拾い、構えた。

20年後健太

「…わかった、無理はするなよ」

そう言っつた次の瞬間、私達は左右に分かれてジグザに走っていき、  
同時に斬りかかった。

キンッ

ジグザ

「その程度ですか？」

ジグザは私達の斬撃を受け止めて、そう聞いてきた。  
私はその言葉を聞いて、連続で斬りかかった。  
が、ジグザはそれを全て受け流している。

ジグザ

「やはり、貴女は弱いですね」

私はその挑発に、簡単に引っかけかり、更に斬り続けた。

ジグザ

「貴女程度の力では、いくらやっても同じですよ」

ジグザの言う通り、私の攻撃はかすりもなかった。

20年後健太

「秋季！下がれ！」

その言葉で、私は我に帰り、後ろに退避した。

それと同時にお父さんが、プラスチック爆弾をジグザに投げつけた。  
ドカーン！

ジグザ

「ふう、危ないところでした」

プラスチック爆弾はジグザに届く前に、ジグザによって叩き斬られた。

ジグザ

「やはり、貴方は邪魔ですね」

そう言つて、ジグザは近くに落ちていた機械兵器の刀を拾い、それをお父さんに投げつけた。

キンッ

しかし、その刀はお父さんに到達する前にお父さんによって、叩き落とされた。

それでも、ジグザは刀を拾い、投げつけてきた。だが、今度は1本ではなく、10本同時に、が、それでもお父さんはそれらを全て叩き落としていた。

しかし、10本目を落としたと同時にジグザが目の前まで迫っていた。

ジグザ

「死ねえ！」

ガッ

ジグザの刀が、お父さんに触れる直前に、私はジグザを刀で弾き飛ばした。

そして、お父さんは、ジグザが飛ばされた場所目掛け、爆弾を投げ



た。

ドカーン！ドカーン！ドカーン！

.....

秋季

「やった？」

砂煙が出ていて、詳細はまだ分からない、ただ、沈黙が続いている。時間がたち、砂煙が晴れてきた。しかし、そこにジグザの姿は無かった。

そして、次の瞬間、私の足下の地面に穴が開き、そこからジグザが現れ、私を捕獲した。

そして、私の首に刀を突きつけて

ジグザ

「さあ、この子を助けたいのなら、動かないでください」とお父さんに向けて言った。

20年後健太

「...わかった」

そう答えたお父さんは刀を捨て、その場に座り込んだ。

秋季

「お父さん、ダメ！お父さんが死んじゃったら、こいつ等に勝てなくなる」

20年後健太

「大丈夫だよ、秋季、俺が死んでも、俺たちには心強い仲間が居るだろ？それに、子供を見捨てる親なんていないよ」  
そう言って私に笑顔を向けた。

ジグザ

「では、これでさよならです。博士」  
グシャッ

ジグザはお父さんの心臓を刀で貫いた。

ジグザ

「ミッションコンプリート」

秋季

「イヤアアア！！！」

私はジグザに解放され、そのまま地面に崩れ落ちた。

また、殺された、助けられなかった…。

また、死んだ、私のせいで…私を庇って…

## 第19話 記憶5（後書き）

記憶編はここまでです。  
では次回をお楽しみに

## 第20話 未来へ（前書き）

どうもこんにちは（それともこんばんは？）

未来編で過去の話を書いているスリ師キャンドルです。

「過去の話載せるなら、過去編にしとけよ」

と思った人もいたと思いますが、もう大丈夫です。今回でとうとう現代から未来へ向かいます。（実際に未来に着くのは次回の『未来の景色』ですが…）

違いましたね、次回は戦士の休暇2を掲載予定ですからその次ですね。

では、改めまして、『未来へ』今回は元視点でどうぞ

## 第20話 未来へ

イサギ

「わいの能力は相手<sup>ちから</sup>を眠らせて、記憶ん中にある最も印象に残ってる頃の記憶を、繰り返し体験させるんや、たまに普通のもあるけど……って、皆寝てもおて説明しても意味無いなあ」

と、建太たちの眠っている前で自分の能力を説明し出した。

イサギ

「でもまあ、こんなあつさり済むとはなあ、上からの情報と全然ちやうやんけ、もっと手間取る思つとつたのに」

イサギはまだ1人で喋り続けている。

イサギ

「まあ、楽やったからええか、でもこのまま1時間はこいつ等見とかなあかんねんな、わいがここ離れて、1時間以内に誰かがこいつ等に触れでもしたら、こいつ等起きてまうもんな」

イサギがそこまで言ったところで1人がむくつと起き上がった。

イサギ

「お前！何で起きれんねん！」

元

「それは、異世界編になったら解るさ」  
起き上がったのは元だった。

元は建太の所へ来て肩を揺さぶった。

しかし建太は目を覚まさない

????

「起きないね」

元の肩の上に浮かんでいる小さな女の子が言った。

イサギ

「残念やったな。わいがここにおける限りそいつ等は目え覚まさん」  
イサギはその女の子に気づいてないようだ。

元

「なら、お前を倒す。紫、お前は下がってろ」

紫

「うん！わかった！」  
紫と呼ばれた女の子は健太の陰に隠れた。

イサギ

「無理や、わいは機械人間や、素手の人間にやられるわけないやろ、  
っていうか紫ってなんや？」

イサギがそう言った直後、元はイサギに向かって走っていった。

元

「答える必要は無い」

そう言い、イサギに1発蹴りを入れた。  
ガンッ！

イサギ

「ほらな？無駄やろ？」  
しかし、イサギは元の蹴りを受けながらも、何くわぬ顔で直立している。

元

「強度は50Gといったところか」  
蹴りを入れた元は1歩下がりそう呟いた。

イサギ

「50G? なんやそれ?」

イサギは元に聞いている。

元は律儀にもそれに答えた。

元

「Gというのは地球表面上の標準重力加速度の事だ。」

イサギ

「な、なんや? じゅうりよく、かそくど? それがなんやねん!」

元

「それだけの衝撃を与えられれば壊せる」  
という元に対してイサギは

イサギ

「50Gって言われたかで、どないなもんか分からんやんけ!」  
と言いキレだした。

元

「人間が与えられるGはせいぜい5、6G程度だ。」  
と、また律儀に説明している。

イサギ

「なら、どないして50Gも与えんねん」

イサギはもつともな疑問を口にした。

元

「50Gも与える必要はない」と答え続けて

元

「お前の耐久値を下げればいい」  
そう言い、元は階段から消火器を持ち出してきた。

イサギ

「そないなもん持ってきてどないすんねん、そいつで殴るてか？」  
それを聞き終わる前に元はイサギに向かって消火器を使用した。  
消火器の中の白い粉がイサギに覆い被さった。

イサギ

「そないなことやって、なんにな…あ、あれ？腕が動かへん」  
消火器を浴びたイサギは急に動きが鈍くなった。

紫

「機械つて言うのはね、稼動する関節部分に異物が入ると稼動がスムーズに出来なっちゃうんだよ。」  
動こうと必死にもがいているイサギへ1歩ずつ近づいていく元。

紫

「それに、電気回路に異物が混入した場合、混入した部分はショートしてしまつて、使い物にならなくなるんだよ」  
そして、イサギの目の前まで行くとイサギを蹴り飛ばした。

イサギ

「がはっ！…なんでこんな急にダメージが…」



今度の蹴りはしっかりくらっているようだ。

紫

「そして、異物が入った部分は、無理矢理動かそうとすると壊れやすくなるんだよ。…って言ってもイサギには聞こえてないんだからね」

イサギ

「まさか、わいが、この時代の、人間に、やられる…とわ…な…。」  
イサギは動かなくなってしまった。どうやら完全にショートしたらしい。

紫

「やったね。元！…ん？みんな起きたみたいだよ元！」

健太

「う、…ここは…」

そして、イサギが動かなくなつたと同時に、建太、奏、杏、雄騎、秋季が目覚めました。

目を覚ました秋季は、イサギが倒れているのを見て、かなり驚いていた。

そして

秋季

「それでは、気を取り直して、2539年へ」

紫

「レッツゴー！」

こうして、俺たちは倒れているイサギを横目に、未来へ向かった。

紫のキャラ設定は次回掲載予定の戦士の休暇2にて明らかにする予定です。

## 第20話 未来へ（後書き）

私だけかもしれないですけど、なんとなくキャラクター同士で会話をさせるとストーリーの進行が楽なんですよね

ま、それがどうしたって感じですが…。

それはさて置き次回戦士の休暇2です。（本編とは関係ないけど）  
お楽しみに！

## 戦士の休暇2（前書き）

アウグーリオ・ボナーノ！

（あけましておめでとう）

新年初投稿は『戦士の休暇』のスリ師キャンドルです。

戦士の休暇は本編と全く関係ないですからね、なんとなく悔しいです。

本編から始めたかった…。

まあ、自分的には本編よりこっちの戦士の休暇の方が気に入ってたりするんですけどね。

では、戦士の休暇2です。

これは本編とは関係ありません、興味のある方はご覧ください。

（これやらないと戦士の休暇は始まらないのです）

## 戦士の休暇 2

紫

「おはらっきー、紫だよ！」

健太

「いきなりパクリか！しかも若干古い」

紫

「古いとは何だ古いとは！あきらさまに謝れ！」

健太

「いや、お前が謝れよ！」

雄騎

「それより君誰？」

紫

「私は紫だよ」

奏

「紫ちゃんは本編に出てたっけ？私見たことないんだけど」

紫

「当たり前だよ、私は元に見えないから」

杏

「そっなのか？じゃあ何で今、私達はお前を見れてるんだ？」

紫

「だって戦士の休暇は本編と関係ないもん、ここでは本編のルールを守る必要が無いんだよ」

秋季

「なるほど、それでここでは紫さんが見えるんですね」

紫

「そうだよ、でもね異世界編になれば私も普通に出てくるよ」

元

「紫、それくらいにしとけ、ネタバレすると作者に怒られるぞ」

作者

「私は別に怒りませんよ？」

健太

「うわ！作者出た！」

作者

「うわ！お化け出た！的な感じで言うなよ、照れるだろ？」

健太

「照れるなよ！」

杏

「本当、何でも有りだな、ここ」

作者

「説明めんどくさいからプロフィール載せるね」

獅童<sup>しじゆう</sup> 紫<sup>むらさき</sup>

獅童 元の妹、現在の身長は10cm、体重50g、この姿は獅童  
紫が魔法で作り出した自身の分身である。

本物の獅童 紫は異世界編の舞台でもある異世界「アグライヴ」と  
いう世界の住人である。

そして、なぜ元にしか見えないか、と言うと、ただ単に魔力が足  
りないからである。

健太

「紫って元の妹だったの！？って言うか魔法使えるの！？」

紫

「そっだよ、使えるよ」

雄騎

「じゃあ何か使ってよ」

紫

「ごめん、ゆうきん、今無理」

杏

「プロフィールに魔力が足りないって書いてるでよ」

雄騎

「あ、そっか」

健太

「アホだ、こいつ」

奏

「ところで、紫ちゃんは元の妹で異世界の住人なんだよね？」

紫

「そだよ」

奏

「それじゃあ元も異世界の住人なの？」

紫

「え？え〜と作者さん！」

作者

「はい作者です。その件はここまで来たらもう隠せないの言っけどぶっちゃけその通りです。」

健太

「ネタバレとか気にしないのか？」

作者

「ネタバレも何もこれぐらい予想つくでしょ」

杏

「それ言っちゃダメだろ」

作者

「それじゃあ私はこの辺でドロ〜ンするので後はよろしく」



健太

「顔文字使って消えるな！」

秋季

「あんな作者で大丈夫なのか？」

紫

「大丈夫だ問題ない、一番良い作者を頼むw」

健太

「ネタ振りじゃねーよ」

珊瑚

「なんや楽しそうやね」

健太

「お、珊瑚だ、どうした？」

礁

「俺たち、もう本編には出れないだろうからこっちに出てきたんだよ」

健太

「礁も来てたのか」

杏、雄騎、奏、秋季、紫

「誰？」

元

「細波兄弟だ」

健太

「元は知ってるのか？」

元

「当然、知らないなら『7月15日始まりの朝』を読んでこい」

.....

五分後

雄騎

「わかった！」

奏

「よろしくね、珊瑚ちゃん、礁くん」

珊瑚

「うちこそよろしゅうな」

礁

「よろしく」

紫

「ねえねえ知ってた？戦士の休暇2つてもう終わりなんだよ」

礁

「まじかよ！俺たち出てきたばかりなのに」

紫

「それじゃあ、まったねー」

健太

「お前も顔文字使ってたじゃねー！」

## 戦士の休暇2（後書き）

2011年が始まりましたよ皆さん！

皆さんは新年の予定とかがつてありますか？

私は全くありません

なのでお仕事が普通にあります。泣きそうです。もっと遊びたかったです…。

まあ、私の事はいいです、皆さんはより良き新年を迎えてください！

では、また次回に！

いつになるかは分かりませんが…。

## 第21話 未来の景色（前書き）

21話やっと出来ました。  
今回は健太の視点です。

## 第21話 未来の景色

頭がグラグラする。

上も下も前も後ろも右も左も分からない。

方向感覚が奪われている。

目も開けられない。

なんだこれ？

秋季

「皆さん、今私達は時間の壁を越えています、慣れていないと苦しいと思いますが少し我慢してください」

なるほど、つまりこれは時間酔いつてやつか…。

俺たちはしばらく、この時間酔いに耐えていた。体感時間としては10分程だろうか、正直気持ち悪い。

しばらく耐えていると、急に気持ち悪さが消え、地面に足がつく感覚が伝わってきた。

???

「おお秋季、戻ったか、皆さんようこそ、対機械人間殲滅最終特別部隊本部、通称『オリュンポス』へ」

健太

「対機械人間…、えーと、何だっけ？」

???

「対機械人間殲滅最終特別部隊本部ですよ、健太殿」

健太

「俺の名前知ってるんですか！？あなたはいつたい？」

???

「私は対機械人間殲滅最終特別部隊本部指揮官代理兼戦闘部隊隊長代理のオルペウスで御座います」

オルペウスと名乗る老人はにつこりと微笑んだ。そして

???

「お帰り、姉さん、その人が？」

そう言いながら、車椅子に乗り、パソコンを持った少年が近づいてきた。

秋季

「そくだよ秀院」

秀院と呼ばれた少年は俺を見上げた。

秀院

「あなたが、父さん…。それで？姉さん、母さんはどっち？」

秀院は杏と奏を見比べながら秋季に問いかけた。

それに対し、秋季は苦笑しながら答えた。

秋季

「残念ながらお母さんが誰なのかは分からなかったんだ。ごめんね」

秀院

「そつか…残念だ…。」

秀院は落ち込んでしまった。

奏

「健太と結婚するのは杏ちゃんじゃないかな？」

と、秀院の落ち込み様を見ていた奏がとんでもないことを言い出した。

俺が？杏と？いや、杏の事は好きだけど、友達としてだぞ？

と、俺が思っていると杏も否定しだした。

杏

「な、かな、おま、な、何言い出すんだよ奏！わ、私が健太と結婚なんてあり得ないだろ！」

と顔を真っ赤にしながら否定した。

そこまで否定されると結構傷つくな…。雄騎は雄騎で「それもありじゃね？」と笑いながら茶化してくるし…。

そんな中、

元

「根拠の無いことを言って場を混乱させるな」

元はそう言って場を納めてくれた。

そう言われた奏は元に謝った。

というか元、もう少し優しく言ってやれよ

オルペウス

「皆さん早速で申し訳ないのですが敵が攻め込んで来たので迎撃をお願いします」

そう言われ部屋に取り付けられている液晶モニターを見ると、これぞロボットという感じの機会兵士がこちらに向かってきていた。

健太

「迎撃って俺たちが？」



オルペウス

「はい、健太殿、雄騎殿、元殿、杏殿、奏殿の5名です」

そう言われ、俺たちは日本刀とハンドガンを手渡された。

ちよつと待て、俺たちはこんなもん使ったこと無いぞ。それでもオルペウスは俺たち5人をオリュンポスの外へ出した。

健太

「やるしかないのか？」

杏

「だろうな……」

雄騎

「俺、こんなの使ったこと無いぞ」

奏

「私もだよ」

元

「ハンドガンの使い方は基本的にエアガンと同じだ。ただしトリガーはエアガンよりも重くなっている。更に撃った時の反動はかなりのものだから素人は両手で支えて撃つことを推奨する」

と元はハンドガンの簡単な使い方を説明してくれた。  
っていうか元はハンドガンを使ったことあるのか？

更に元は続けて日本刀の使い方も説明しだした。

元

「日本刀は刀身が細い割にかなり重たい造りになっている。なので両手で構えることを推奨する。刀を振るときは剣道の動きを参考に

するといい、あれはそのまま実戦にも使える」

俺たち4人は少し圧倒された。

元はなんでこんな事を知ってるんだ？

そんな疑問を抱いていると、オルペウスの声が聞こえてきた。

オルペウス

「皆さん、敵は約2500機程です。頑張ってください」

は？2500？なんだその数字、ていうか頑張ってじゃねーよ、あんたも戦えよ！

そう思っていると機会兵士達が目の前まで迫ってきていた。

仕方がないので俺たちはハンドガンで機会兵士を撃ち始めた。しかし、当然のごとく弾丸は弾かれている。

雄騎

「オルペウス！やっぱハンドガンじゃ無理だ！」

そりゃあそうだろ、分かりきってた事だ。

オルペウス

「ですが元殿は着実に撃退してますぞ」

振り返ると確かに元はハンドガンと日本刀を駆使し、着実に機会兵士を破壊していた。

いや、普通こんなん出来ねえよ

雄騎

「あんなこと出来るの元くらいだつて！」

この雄騎の訴えによって、オルペウスはロケットランチャーを渡してくれた。

有るなら初めから出せよ

ロケットランチャーを受け取ったので元に使い方を聞いてみた。

すると、元は機会兵士を破壊しながら「適当に撃つとけ」と言ってきた。

随分適当だな。

それでも俺たちは元に言われた通り適当に撃つてみた。

撃つた時の反動で吹っ飛ばされたが弾丸は機会兵士達の中で爆発しかなりの数の機会兵士を破壊する事が出来た。

その後、ロケランをぶっ放して機会兵士全てを破壊する事が出来た。本当、最初からロケラン出しとけよ

その後、オリュンポスの中へ戻った。

オルペウス

「皆さんお疲れさまです。只今戦える者が居なかったので助かりました。では皆さん、お部屋をご用意しましたのでそちらでお休みください。」

オルペウスにそう言われ、俺たちは各々に用意された部屋へ行き休むことにした。

## 第21話 未来の景色（後書き）

次回は少しめんどくさいのを予定しています。  
何がめんどくさいのかは、次回のお楽しみです。

## 第22話 再会それと出会い（前書き）

今回も健太視点です。  
では、どうぞ

## 第22話 再会それと出会い

俺たちがこの時代に来て3時間が経過した頃、俺は用意された部屋で頭を抱えていた。

健太

「…やばくね？今更だけどやばくね？戦争だよ戦争、下手したら死ぬよ、なんか勢いで来ちゃったけど冷静に考えたらあり得ないよな」という後悔の渦に飲み込まれていると、雄騎が俺を呼びに来た。

雄騎

「健太、オルペウスが呼んでるぞ、エントランスに集合だつてよ、早くしろよ」

雄騎に急かされて俺はエントランスに向かった。

オルペウス

「これで全員揃いましたね」

俺がエントランスに到着すると同時にオルペウスが喋り出した。

オルペウス

「先ほど進撃部隊から、もうすぐ戻ってくると連絡が入りましたので、皆さんに紹介しようと思ひまして」

オルペウスが言い終わると同時に通信が入った。

???

「オルおじさま、戻ってきたので扉を開けてください」

俺たちは今の声を聞いてお互いに顔を見合わせた。

そして、声の主がエントランスに現れた。

その人は、髪は茶色で長く、腰辺りまであり、瞳は青で、もの凄く

スタイルの良い女性だった。

その人は、俺たちの姿を見るや否や俺に抱きついてきた。

???

「健ちゃん久しぶり！元気してた？10年前に死だつて聞いたときは本当にショックだったんだから」

俺にそう言い終わったあと、杏と奏に抱きついていた。

ていうか、俺は本当に死ぬのか…。

???

「杏ちゃんも奏ちゃんも元気そうで良かった」

彼女がそこまで言ったところで俺は彼女に質問を投げかけた。

健太

「あなたはもしかしてアリア・スフィール・フェンリルさんですか？」

???

「健ちゃん…。なんでフルネームで聞いてきたのかは分からないけど、その通りよ」

やっぱり、この人はアリアさんだった。

オルペウス

「やはり気付きましたか、皆さん流石ですね」

アリア

「やっぱり分かつちゃったか、そんなことより皆本当に久しぶりだね、雄君も20年前と全然変わってない」

と、雄騎に頼ずりしながら言っている。雄騎は心なしか嬉しそうだ。ていうか変わってないのは当然だろう、20年前から来たんだから。そして最後に元の方を向いた。

アリア

「元っちも…！！…そっかやっぱり、元っちってめちゃくちゃ強かったんだね、私も強くなったから今ならわかるよ、戦闘力18万くらいかな？それでも相当力を抑えてるよね」

え？戦闘力18万？っていうかこのドラ ンボールだよ！

戦闘力18万っていうと、 空が ニュー と闘ってるときに界拳を使ったときと同じくらいか。

…違ったか？

それでも力抑えてるって事は、もしかしたらフーザ様も倒せるんじゃないか？てか、俺もさっきからドゴンボールネタばつかな…。自重しないと

そこへ、1人の少年が話に割り込んできた。

???

「それでも今のアリアさんには誰も適わないと思うぜ」

雄騎

「誰？」

雄騎は俺たちの疑問を代弁してくれた。  
そしてその疑問に対して少年が答えた。

???

「はあ、こんなのが俺の親かよ」

へ？「俺の親」？そう言ったのか？俺の子供は秋季と秀院だけのはず。なら誰の…。

???

「自己紹介、俺の名前は二修騎ニシュウキ 雄騎と二 奏の息子だよ」

二 奏？もしかして奏でのことか！



雄騎

「俺の息子？」

奏

「私と雄騎の子供？」

修騎の言葉に雄騎は驚き、奏はなぜか喜んでいる。

修騎

「ま、とりあえずよろしく」

修騎の自己紹介が終わりしばらくしたころ、エントランスの扉が開き、1人の青年がエントランスに入ってきた。

???

「H A H A H A、キョウモツブシタヨ、テキノキチ」

こいつはカタカナがデフォルトなので読みにくいと思います、なので通常使わないような所で句読点を使っていることがあります。これは、少しでも読みやすくする為なので、どうかご容赦ください。

???

「オ？コノガキドモカ？カコカラツレテキタノハ」  
ガキって俺たちのことか？なんかムカつく。

アリア

「こら、ちゃんと自己紹介しなさい」  
このときのアリアさんは、顔は笑っているが、その奥で凄く怒っている気がした。

???

「Oh、ソーリー、オレノ、ナマエハ『ジョニー』ヨロシクナ」  
さらに、ジョニーと名乗った青年は、なにかを思い出したかのように  
続けて喋り出した。

ジョニー

「ソウイエバ、コノ、ショウセツサイトノ、ヘイト、トカイウヤツ  
ガ、ムカシ、オレサマヲ、オマケデ、ツカッタヨウダガ、カンチ  
ガイ、サレルマエニ、コレダケハ、イッテオク、オレガ、オリジナ  
ルダ！」

健太

「何がだ!?!」

ジョニー

「シルカ?」

逆ギレかよ!

ジョニー

「H A H A H A H A」

その後しばらく、オリュンポスには、ジョニーの笑いが木霊してい  
た。

## 第22話 再会それと出会い（後書き）

次は15日の朝7時に掲載します

## 第23話 死の予言（前書き）

健太視点です。

後3話くらいはすべて健太視点になると思います。

## 第23話 死の予言

ジョニー

「H A H A H A H A」

健太

「まだ笑ってたのかよ!」

と、ジョニーにツツコミをいれた。

まさか前回からずっと笑ってたのか?

ジョニー

「ゼンカイツテ、イツテモ、ハナシノ、ナカジャ、ジカン、ススン  
デナイ、カラナ」

そういうこと言うなよ、っていうか、俺の心読むなよ。

それはさておき、まさかこの時代で知り合いと再会するとは思って  
も居なかった。

しかもこっちに来て出会った少年は雄騎と奏の子供だったし、ジョ  
ニーは…、よくわからないけど、やっぱり俺たちって何かの縁があ  
るのか?

オルペウス

「それでは皆さん、これで全員揃いましたので、これより奴ら（機  
械人間）の本拠地、『マシナーズキャッスル』を陥落させる為の  
作戦会議を開催します」

アリア

「それじゃあ健ちゃん、作戦練って」

え？俺が考えるの？作戦会議ってみんなで話し合っんじゃないの？

アリア

「10年前まではここ（オリュンポス）での作戦は全部あなたが考えてたのよ」

10年前までって、今の俺の10年後じゃないか、そんなんの今の俺に出来るわけ無いじゃないか。

それでも、オルペウスとアリアさんは俺が作戦を考えるよう言ってきた。

当然、俺は講義した、が、それでも最終的にアリアさんに押しきられ俺が作戦を考えることになった。

健太

「とりあえず、俺たちの戦力を確認したい」

そう言った後、俺はオルペウスに武器のリストを見せてもらった。

ー武器リストー

ハンドガン30丁

ハンドガンの弾138000発

ライフル8丁

ライフルの弾2200発

ロケットランチャー2丁

ロケランの弾10発

手榴弾40個

健太特製超小型核爆弾4つ

日本刀10本

以上

ハンドガンだけやたらと数が多いな。

オルペウス

「ハンドガンは安いですからね」

それと、今戦えるのは、俺（健太）、雄騎、元、杏、奏、秋季、アリアさん、修騎、ジョニーの9人つと、

秀院

「父さん、僕も闘えるよ」

と、車椅子に乗っていた秀院が車椅子から降りて言ってきた。

雄騎

「秀院、お前歩けるのかよ！」

秀院

「別にどこが悪くて車椅子に乗ってた訳じゃないから」

と、言うわけで、戦闘要員はさっきの9人に秀院を入れた合計10人だ。

オルペウス

「ちなみに獅童弥めいどうがすでに敵の基地へ潜入してますので」

獅童 弥？獅童ってことはもしかして…

オルペウス

「はい、元殿の息子さんですよ」

マジですか、元の子供いるのか、やっぱり、元みたく戦闘力18万とかあるのか？

アリア

「弥ちゃんの戦闘力は5500よ」

あれ？結構低いな

いや、普通の人間は10だから十分に強いのか？

ジョニー

「オマエ、マタ、ドラゴンボールネタ、ツカッテルゾ」

…五月蠅いな、そんな事はわかってるよ、でもドラゴンボールだとわかりやすいだろ？

というかジョニー、文字伏せるよ。

まあいいや次に機械人間たちの戦力だ。

機会兵士のボス

ジグザ

機械四皇帝

その他機会兵士達

（数不明）

これが今わかっている敵の戦力だ。

実際にはもっと居るかもしれないけど、とりあえずはこれだけだ。

その後、俺はこの戦力で機械人間の基地を落とすための作戦を考え始めた。



1時間後

俺は練った作戦をみんなに発表した。

まず、Aグループ、俺、雄騎、秋季、元で正面から突撃し、囷として敵の注意を引きつけてBグループ、秀院、修騎、ジョニーで裏から攻め込み敵の戦力を分散しているところを殲滅、杏、奏、

アリアさんはオリュンポスの防衛

後で潜入している獅童 弥とAグループ又はBグループのどちらか一方が合流、合流後、機械四皇帝とジグザを1機ずつ倒す、その後全員合流してボスを倒す！

武器はAグループとBグループで同じ数ずつ所持、ハンドガンのみ1人2丁ずつ所持、  
これでどうだ

アリア

「初めてにしては上出来じゃないかしら」

オルペウス

「では、これでいきましょう」

ジョニー

「ソナナニ、ウマク、イクトハ、オモエナイケドナ」

アリアさんとオルペウスは賛同してくれてるのに水差すなよジョニー

元

「健太、その囷作戦、俺1人でやって良いか？」

オルペウス

「何を言っておられる元殿、1人でなど危険すぎますぞ！」

と、元の申し出をオルペウスが止めようとしている。  
しかし、俺は元の申し出を受け入れることにした。

オルペウス

「健太殿！さすがにそれは危険すぎますぞ！」

オルペウスの言うことももっともだ、だけど、

健太

「だけど、俺たちがいたら多分、元が全力で暴れられないんだ。」

オルペウス

「…分かりました。今回の作戦は健太殿の作戦です。これ以上余計な口出しは止めておきましょう」

こうして、俺の作戦で機会兵士の基地に攻め込むことになった。

杏

「ちょっと待ってよ、なんで私たちはここの防衛なの？私もみんなと戦いたい！」

健太

「ダメだ、杏はここで待機しててくれ」

杏

「なんで？なんで一緒に戦わせてくれないの？私が弱いから？足手まといだから？」

そうじゃない、そうじゃなくて…

杏

「もういい！」

そう言つて杏はエントランスを飛び出していった。  
そして、杏が飛び出していつてしばらく経った頃、オルペウスが監視モニターを見ていた。

オルペウス

「皆さん、少しこちらを見てください」そう言つて、オルペウスはエントランスに監視モニターの映像を映し出した。

ジグザ

「皆様、お久しぶりです。」

そのモニターに映し出されたのは紛れもなくジグザだった。

ジグザ

「今回、私は争いに來たわけではありません」  
「なんだと？なら何しに來たんだ？」

ジグザの『私』は『わたくし』と読んでください

ジグザ

「そこに過去から來た『中嶋』の名を持つ者がいますね？」  
「俺に何か用なのか？」

ジグザ

「彼が私たちのマシンナーズキャッスルに來られますと、彼、死にますよ」

なん、だと…

ジグザ

「お伝えしたいのはこれだけです。では、忠告は致しましたよ」  
「そう言つてジグザは歸つて行つた。」

## 第23話 死の予言（後書き）

次はいつになるでしょう？

自分でも分かっていません

でも最低でも月に1回は掲載しますので今後ともよろしく願います

## 第24話 出撃（前書き）

意外とすぐに掲載出来ました。  
今回もやはり健太視点です。

## 第24話 出撃

俺、また死ぬのかよ…。

……………。

あれ？

ちよつと待てよ？

確か俺が最初に死んだって聞いたのは、今の俺の10年後の話だよな。

今の俺が17だから10年後は27だよな？

てことは、今の俺が死んだら27の俺が存在しない事になる。

と、言うことは今の俺は死なないと言うことになるよな？

そうだよ、やっぱり。

俺はそう自分に言い聞かせた。

他のみんなも「俺は死なない」「死ぬわけがない」と口々に励ましてくれた。

ジョニーだけは「マ、シンダラ、シンダデ、ソコマデノ、オトコ、ダツタト、イウダケ、ダケドナ」と俺を軽く罵った。

ジョニーがそう言った直後、ジョニーがアリアさんに引つ張られ、別の部屋に連れて行かれた。

オルペウス

「どうしますか健太殿？敵とはいえ、あのような事を言われては…、やはり健太殿はここ（オリュンポス）で待機なされますか？」

と、オルペウスは俺に気を利かせてくれた。

しかし、俺はオルペウスの提案を、少し迷ったが断った。

なんだか俺は行かないと行けない気がする、ストーリー的に！

それに、冒頭の予測もあるし、根拠は無いけど大丈夫だろ。

そこまで話が進んだところでアリアさんと、

ジョニー

「ミナサン、スミマセンデシタ、デスギタ、マネデシタ、シンデ、オワビシマス」

とジョニーが泣きながら戻ってきた。

ていうか、ジョニーはなんで泣いてるんだ？なんかあったのか？

つて、おい！ジョニー！腹に刀突き立てて切腹しようとするな！本当ジョニーに何があったんだ

その後、ジョニーの切腹はアリアさんによって止められた。そして

オルペウス

「それでは、健太殿も戦線に立たれると言うことで、作戦は明朝7時に決行しますので本日はこれにて解散と致します。」

俺たちは各々の部屋へ戻っていった。

結局、最後まで杏は姿を見せなかった。

翌日

健太

「ん、ん……ふう、よく寝た。今何時だ？」

俺は部屋に取り付けられている時計を見た。時計の針は6時30分を少し過ぎたくらいを示していた。

てか、時計アナログなんだな。

と、そんなどうでもいいことを考え、俺はエントランスへ向かった。

アリアさん

「あら、健ちゃん、早いわね」

奏

「おはよう、健太」

オルペウス

「お早いですな、健太殿」

ジョニー

「オマエニシテハ、ナカナカ、ハヤイ、ジャナイカ」

エントランスに着くと既にアリアさんと奏とオルペウスとジョニーが待っていた。

てか、ジョニー元に戻ってるし。

俺がエントランスに到着して5分後くらいに秋季と秀院がエントランスに現れた。

秋季

「おはようございます、皆さん早いですね」

秀院

「おはよう、父さん、みんな」

健太

「おう、秋季、秀院おはよう」

秋季と秀院が来たと言うことは、後は修騎と雄騎、元、それと杏か…、杏は来るのかな。

10分後



修騎

「おはよう、よし、それじゃあ早速行くか……。ん？どうしたんだ？」

健太

「お前の父親がまだ来てないんだよ。」

あと元と杏もだけど

雄騎がまだ来ていないことを修騎に告げると修騎は頭を抱えてしまった。

雄騎、早く来いよ、修騎が哀れだぞ。

そして、修騎が来た30分後、

雄騎の部屋

雄騎

「ん、ん？ん？寝過ぎたあゝ！ヤバイヤバイ、どうしよう、みんな絶対怒ってるよな」

エントランス

アリア

「雄くん遅いわね」

とアリアさんですらしびれを切らした頃、ようやく雄騎が現れた。

雄騎

「ごめん、寝過ぎた！」

修騎

「勘弁してくれよ」

雄騎も到着したし後は元と杏だけか。

元

「俺はもういるぞ」

うわっ！いつの間に

オルペウス

「元殿は我々が来たときには、既にエントランスにいましたよ」

え？てことは、俺が気づかなかっただけ？

オルペウス

「杏殿はまだ来ていませんが、時間も推してますのでそろそろ作戦に移ります」

結局、今回も杏は姿を見せなかった。

オルペウス

「それでは皆さん、ご武運を」

俺たちはオルペウスたちに見送られ、マシンナースキャッスルへ向かった。

俺たちがオリュンポスを出て1時間程が経過した頃、俺たちは荒野に差し掛かっていた。

雄騎

「なあ修騎、まだ着かないのか？」

雄騎が耐えきれなくなったのか、愚痴を漏らした。

修騎

「もうすこしだよ、後10分位で見えてくるよ」

雄騎の愚痴に修騎はちゃんと答えた。

そして10分後、恐らくマシンナーズキャッスルであろう建物が見えた。

秋季

「皆さん、あれがマシンナーズキャッスルです」

やはり目の前に現れた建物がマシンナーズキャッスルだった。

健太

「それじゃあ元、頼んだ」

俺の言葉を聞いて元は、正面からマシンナーズキャッスルに入っていた。

## 第24話 出撃（後書き）

それではまた次回で

## 第25話 正面突破（前書き）

今回は元の視点です。  
あと、連続掲載です。

## 第25話 正面突破

元の所持武器一覧

日本刀1本

ハンドガン2丁、弾500発

手榴弾4個

以上

健太達と別れ、1人マシンナースキャッスルの正面から突入した。入り口を開けると機会兵士が10機程いた。

元が機会兵士たちに気づくのとほぼ同時に機会兵士たちに元のことを気づかれた。

元の存在に気づいた機会兵士たちは刀を構え一斉に襲いかかってきた。

紫

「元、危ない！」

紫が声を発するのと同時に元は日本刀を構え、襲いかかってくる機会兵士たちの斬撃をかわしながら1機ずつ確実に真つ二つに切り裂いた。

元

「紫、俺がこの程度でダメージを受けるわけないだろ？」

そう言つて元は笑った。

そこへ更に機会兵士が10機程現れた。

元は1番最初に現れた機会兵士に切りかり撃破した。すると2番目、3番目に現れた機会兵士が元に切りかかってきた。元は片方の機会

兵士が持っている刀をハンドガンで撃ち飛ばし、もう片方の機会兵士の攻撃を日本刀で受け止め、その2機を両断した。  
しかし、その後ろから4、5、6機目の機会兵士が切りかかってきた。

元は体を回転させ、3機の機会兵士の後ろへ回り込んだ。

そして、その3機を切り捨てた。

残り4機、元はさっき倒した機会兵士が持っていた刀を拾い上げ、残りの機会兵士に投げつけた。

投げた3本の刀は見事機会兵士に命中し、3機を破壊した。

そして、最後の1機を難なく葬った。

その直後、元の後ろから突然何者かの声がした。

???

「なかなかやるね、君のような人間はこちらのデータベースには存在しないのだが？」

そこに現れたのは、先ほどまで戦っていたロボット型の機会兵士とは違いイサギやジグザなどと同じ人型の機会兵士だった。

???

「君、もしかしてオルペウスのところの新しい戦力かい？」

元

「だっ たらどうする？」

???

「君を倒すまでさ」

そう言うと同時にその機会兵士が元に襲いかかって…は、来なかった。

その機会兵士は律儀にも自己紹介を始めた。

???

「僕の名前は『シュジャ』機械四皇帝の1人だよ」なんと、元の目の前に現れたのは機械四皇帝だった。

シュジャ

「僕の自己紹介は終わったよ、次は君の番だ」

シュジャは元にも自己紹介を強要してきた。

その申し出を元は承諾したらしく、自己紹介を始めた。

元

「俺の名前は獅童元、機械人間に仇なす者だ」

シュジャ

「へえー、獅童元、ね、それじゃあお互い自己紹介も済んだし、そろそろ始めようか」

そう言つて、戦いの火蓋が切つて落とされた。

まず最初に動いたのはシュジャだ。

シュジャの右手が刀に変わり、元に切りかかった。

その攻撃を元は1歩も動くことなく受け止めた。

しかし、シュジャの攻撃はそれだけでは終わらない、刀を交わしながら、シュジャは左手までも刀に変え、その左手で元を貫こうとした。

元も流石にこの攻撃はシュジャの右側へ体を傾け、かわした。攻撃をかわされたシュジャは一度元から離れ、再び切りかかってくる。

元はそれを後ろに飛び避ける。

シュジャは後ろに飛び退いた元に追撃をかけた。

そこへ、元は手榴弾を投げ、シュジャに直撃した。

元は手榴弾の爆風で吹っ飛んだ。



しかし、元は無傷だった。

手榴弾が直撃したシュジャは外傷はあまりないが、かなりのダメージを負ったようだ。

流石の機械人間も近距離での手榴弾の直撃はかなりの痛手らしい。

シュジャ

「流石、正面から1人で突っ込んでくるだけはある、なかなか強い」

シュジャは素直に元を賞賛した。

シュジャ

「これは僕も少し本気を出さないといけないかもしれないな」

そう言うと、シュジャの両手の刀が炎で包まれた。

元

「!?!」

シュジャ

「これは、炎の双剣、フレイムツインソード僕のとっておきの魔法だよ」

シュジャは燃え盛る炎の刀『炎の双剣』を元に見せつけた。

元はシュジャの炎の双剣を見て、何かに気がついた。

元

「なるほど、別に魔法でも何でもない」

元のその言葉に紫は「どういうこと？」

と、説明を要求した。

元

「炎の双剣の正体は簡単に言うと熱した刀だ」

シュジャ

「へえー、見ただけで分かったのかい？いいよ、聞いてあげる」

元は炎の双剣の正体について説明しだした。

元

「炎の双剣の作り方は簡単だ、刀に火炎放射器などで炎を当ててやればいい、そうすると炎に当てられた刀は高温に保たれ、その炎を刀身に纏う」

そこまで言ったところでシュジャが声をあげた。

シュジャ

「恐れ入ったよ、まさか本当に見ただけでそれに気づくとはね、…でも、それでも君の絶対的不利に変わりないよね！」

シュジャはいきなり元に切りかかった。

元は炎の双剣を日本刀で受け止めた。

しかし、日本刀は炎の双剣に触れた途端に焼き切られた。元は日本刀が焼き切られたと同時に飛び退いた。

シュジャ

「クククツ、いくら君が強くても武器が無ければただの人」

シュジャは日本刀（戦術）を失った元に一步また一步と近づいていく。

元

「紫、アレ持ってるか？」

紫

「持ってるけど、アレ使うの？」

元

「ま、武器無くなったし」

そこまで言って元はハンドガンを2丁取り出しシュジャの、先ほど付けた手榴弾の僅かな傷を狙って撃ち始めた。

傷ついた部分は衝撃に弱くなりハンドガンの威力でも十二分に足止めができた。

シュジャを足止めしている間に元は呪文の様なものを唱えだした。

元

「我、なんじ汝の誓約せいやくに基づき、今誓約を果たす。汝の幻影を手に汝の想いのままに、我の御霊みたまを汝に、汝の力を我に、汝の姿、今ここに現せ」

元が誓約を言い終わると、元の目の前に霧の掛かった刀が現れた。

シュジャ

「なんだそれは」

## 第26話 決着（前書き）

連続掲載二つ目です。

今回も元の視点です。

と言つか一個前の続きです。

では、どうぞ！

## 第26話 決着

シュジャ

「なんだそれは」

シュジャが目にしたのは宙に浮く刀、その刀には霧が掛かっている。驚くシュジャを横目に元は目の前に現れた刀を手にとった。

元が手にしている刀は宙に浮き、霧の掛かっている刀、シュジャはそれが信じられなかった。

これこそ本物の『魔法の剣』なのではないかと思い始めた。  
自分の炎の双剣では勝てないのではないか、そんな考えすら浮かんでくるようだった。

シュジャはその考えを振り切るように叫んだ。

シュジャ

「なんだそれは！」

そのシュジャの言葉に答えるように元は言った。

元

「宝剣『幻影の刀』ミラーシュブレイド 真正正銘魔法の刀だ」  
シュジャ

「そんなもの、また焼き切つてやる！」

シュジャは先ほどの考えを振り切るように元に突っ込んでいった。  
シュジャが迫ってくる中、幻影の刀から声が聞こえてきた。

幻影の刀

「元、久しいな」

元

「ああ」

幻影の刀

「所であやつの刀からは魔法力を感じんがどういう事だ？」

そこまで言ったところでシュジャの炎の双剣が元を切り裂いた。

元の身体は上半身と下半身のふたつに分かれてしまった。

しかし、それでもまだしゃべり続けている。

幻影の刀

「なるほど、今ので理解した」

シュジャ

「そんな、ばかな…、人間が胴体を切り離されて生きてられる訳が

…」

シュジャがそこまで言ったところで二つに切り離されていた元が霧となって消えた。

次の瞬間、シュジャの後ろに元の姿があった。

そして、元は幻影の刀でシュジャを切り捨てた。

今度はシュジャの上半身と下半身が二つに分かれた。

この瞬間、元の勝利が決まった。

そして

紫

「やったね元、それにミラちゃんも」

ミラちゃん「幻影の刀

幻影の刀

「紫か、御主も久しいな」

紫と幻影の刀が挨拶している。どうやら幻影の刀には紫が見えているようだ。

シュジャ

「獅童元、一つ教えてよ、僕の最後の攻撃、どうやってかわしたの？」

元

「俺はかわしてなんかいない、元々お前の斬った場所に居なかった」  
それ以上言葉は要らなかった。それだけでシュジャは理解した。

シュジャ

「なるほど、『幻影の刀、ミラージブレイド』か、つまり僕に幻影を見せたんだね」

シュジャは大人しくなった。もう動こうとしない。

シュジャ

「獅童元、君に一つだけ良いことを教えてあげるよ。僕以外の機械四皇帝は全員、裏口に向かったよ。」

そこまで言ってシュジャは動かなくなった。機能が停止したのか、それとも、ただ反応を見せないだけなのかは分からないが、既にシュジャから戦意が無くなっていた。

シュジャに勝利した後、元はシュジャに折られた日本刀を拾い上げた。

元が日本刀を一撫ですると、折れていた日本刀が元通りにくっついていていた。折られた痕跡もなく、元がオリユンポスで手にしたときと全く同じように見えた。

日本刀が元通りになったとき、幻影の刀が話しかけてきた。

幻影の刀

「私はここまでだな、あまりこちら側で私を使わない方がいいだろ」

そう言った直後、幻影の刀は霧となって消えてしまった。  
幻影の刀が消えたとき、紫が元に話しかけた。

紫

「どうするの？みんなを助けに行く？」

しかし、元はそれを制した。

元

「いや、俺は上を目指す」

元は裏口へは向かわず、辺りにいる機械兵士を倒しながら上を目指した。



## 第26話 決着（後書き）

自分で言うのもなんですが、元、強かったですね。

でもって、次回からは健太に戻ります。

では、また次回に

## 第27話 潜入（前書き）

久しぶりの投稿です。

ここ最近地震のニュースばかりでしたが少しずつ番組が戻ってきて嬉しい限りです。

そんなことは置いといて、今回は健太の視点です。  
では、どうぞ！

## 第27話 潜入

健太たちの武器一覧

日本刀、一人1本ずつ

ハンドガン、一人2丁ずつ

手榴弾、一人四個ずつ

ライフル、健太、秋季、ジョニー、秀院、修騎が所持

ロケラン、雄騎が所持

健太特製超小型核爆弾、健太、秀院が所持

元がマシンナースキャッスルに入っていった10分程が経過した頃、俺たちは、裏へ回り、突撃の準備をしていた。

ジョニー

「ソレジャー、ソロソロ、イクゾ」

そのジョニーの言葉を合図に俺たちはマシンナースキャッスルに入っていた。

マシンナースキャッスルの裏口を開けると機会兵士が4機いた。機械兵士を目視した瞬間、秋季と秀院と修騎とジョニーが一人一機ずつ破壊した。

雄騎

「これって、もしかしたら俺たち足手まといになるんじゃないか？」  
確かに雄騎の言う通り、俺たちだけ反応できなかった。  
そこへ、三人の機械人間が現れた。

???

「お前等四人は流石にやるな」

???

「ですが、後ろの二人はなんとも」

???

「この中で注意すべきはジョニーと秋季、と言ったところかな」

その三人組を見た健太と雄騎以外の面々は驚愕していた。

秋季

「何であんた達がこんなところにいるの！」

???

「まあ、その前に、読者のために自己紹介を、僕は『セリユ』  
二番目の???」

???

「俺様は『ビヤコ』、覚えとけ！」

一番目の???

???

「僕は『ゲン』、ビヤコ、少し五月蠅い」  
三番目の???

セリユ

「僕たちは機械四皇帝のうちの三人です」  
セリユ達はそれぞれ自己紹介をした。  
自己紹介が終わるとビヤコが動いた。

ビヤコ

「おら、戦闘開始だ!」  
ビヤコの片手が刀に変わり、その刀で切りかかってきた。  
それを秀院と修騎の2人掛かりで止めた。

ビヤコ

「俺様の相手はお前ら2人か? 良いぜ、掛かって来やがれ!」  
そう言うときビヤコはもう片方の手を刀に変えて秀院と修騎、2人を相手に戦い始めた。

ゲン

「ビヤコは喧嘩っ早いな」

ジョニー

「ヨソミ、シテルナヨ、オマエノ、アイテハ、コノオレダ」  
ジョニーはゲンと戦いを始めた。

セリユ

「ビヤコもゲンももう戦い始めたか」

そう言うときセリユは俺たちの方に向き直った。

セリユ

「そうですね、僕らは少し、話をしましょう」

セリユは俺たちに会話を持ち掛けてきた。

セリユの思惑は分からないが、俺たちに選ぶ権利は無かった。

ここで拒めば間違いなく殺される。俺の直感がそう告げていた。

セリユ

「沈黙は承諾、とみていいですね。ふむ、中嶋秋季、また戦闘力が上がってますね」

セリユは眼鏡のような物を目に掛け、秋季を見てそう言った。

セリユ

「戦闘力42000ですか、なかなかですね。ですが僕は今の状態で60000はある。」

なんだと、秋季の戦闘力は42000もあるのか、でもセリユはその上をいく60000だと？ふざけるな！

……ていうか、それスカ　ターだよな？いいのか？

セリユ

「そして、後ろの二人は…、ふつ、たつたの10、話になりませんよ」

やっぱり俺たちは武器を持った普通の人間だったようだ。前に秋季の言ってたような力は無かったらしい。

雄騎

「健太、やっぱり俺たち足手まといだな」  
と、雄騎は苦笑しながら言った。

俺も同感だ。俺たちじゃ相手にならない。

秋季

「一つ聞かせて、さっきも聞いたけど、何であんた達がこんな所にいるの？」

秋季の話では、機械四皇帝は、このマシンナーズキャッスルの、六階層目の、機械人間のボスの部屋へ続く廊下で、待ち構えているはずなんだそうだ。

セリユ

「簡単なことです、あなたたちの行動を見ていたからですよ」

セリユの話では、マシンナーズキャッスルの周りには監視モニターが設置されており、そのモニターで俺たちが戦力を分散して攻め込むのを見て、一気に殲滅するべく、機械四皇帝が動いた。と言う。

セリユ

「表にはシュジャを送りました。今頃表から潜入してきたあなた方のお仲間も、既にこの世にはいないでしょう」

セリユは元が既に死んでいる、と宣言した。

しかし、俺はセリユの言葉を否定してこう言った。

健太

「残念だったな、元は戦闘力180000あるんだ。シュジャなんかには負けないさ！」

と、俺のその訴えに対し、セリユは高笑いでかえした。

セリユ

「はっはっはっはっ、残念ですが、僕たち機械人間は『本気』を出せば、戦闘力800000まで上がります。180000程度では、とてもとても」

セリュの言葉に俺は言葉を失った。

セリュ

「それともう一つ、オリュンポスへも兵を要しておきましたので、  
勿論機械人間ですよ」

健太

「そっちは大丈夫だ、手は打ってある」

そこへ、ビヤコの怒鳴り声が聞こえてきた。

ビヤコ

「おいセリュ！遊んでねーでさっさと戦え！」

セリュ

「怒られてしまいました。仕方ない、そろそろ始めますか」

セリュの片手が刀に変わり、戦闘体制となった。

俺たち三人も日本刀を構え、戦闘体制をとった。



## 第27話 潜入（後書き）

ご観覧有り難う御座いました。  
ではまた次回に！

## 第28話 機械暗殺者（マシンアサシン）（前書き）

やっと投稿です

最近は暖かくなってきました

これからどうなるかはわかりませんが私にとってはうれしい限りです

それでは、本編をどうぞ

今回は杏の視点です

## 第28話 機械暗殺者（マシンアサシン）

ここはオリュンポス、健太たちがセリユたちと出会ったところ、オリュンポスでは杏がエントランスに顔を出した。

奏

「杏ちゃん！もう大丈夫なの？」

私がエントランスに顔を出すと、奏が心配そうに聞いてきた。

杏

「うん、もう大丈夫…、でも何で私たちは連れて行ってもらえなかったんだろ…」

奏

「それは…」

奏が言いかけたところで、オルペウスが監視モニターを見て叫んだ。

オルペウス

「皆さん、機械人間が現れました！」

オルペウスは監視モニターの映像をエントランスに映し出した。

そこには4機の機械人間がオリュンポスへ向かってくるのが映し出された。

何で？今健太たちが戦って…

アリア

「多分、狙われたのよ、今、私たちの戦力は殆どマシンナーズキャッスルに送り込んだから、今なら落とせると思ったのでしょうね」

オルペウス

「実際、ここが落とされれば我々の負けですから」  
そんな、それじゃあ健太の作戦がバレてたって事？

アリア

「だから、健ちゃんはこういう時の為に、私たちをここに残したのよ」

そうか、健太はそこまで考えて…、なのに私は…

奏

「杏ちゃん、今は私たちの役目を果たそ」

奏に言われ、私は武器を手にも、オリュポスの外へ出て、機械人間が来るのを待った。暫くすると、4機の機械人間の姿が見えた。向こうもこちらに気付いたらしく、言葉を出した。

???

「まだ居たのか、まあいい、殲滅する」

???

「……………」

ハライド

「どうも、俺ハライドです。今喋ったのがアルミスで後ろの無口なのがカミル、で、その隣が…」

ハライドがそこまで言った所で気がついた、機械人間最後の1人は、なんとイサギだった。

杏

「イサギ！」

イサギも私たちに気付いたらしく、返事を返した。

イサギ

「なんや、あんたら、こつち来てたんかいな」

イサギは意外そうに言った。そして、ハライドが自分たちの事を説明しだした。

ハライド

「僕らはこの4人で機械暗殺者<sup>マシンアサシン</sup>やってんねん、基本的に僕らは裏方ばかりで、僕らの事知ってる奴おらんけどな」

ハライドがそこまで説明したところで、アルミスが話に割って入ってきた。

アルミス

「もういいだろ、さっさとこいつら殺るぞ」

そして、アルミスの言葉を聞いたイサギも、それに賛同し、今までの機械人間同様、片手を刀に変えて、その刀を振りかざした。

カミル

「!?.....」

イサギが振りかざした刀は迷うことなく、カミルの胴体を真っ二つにした。

アルミス

「イサギお前、裏切ったか！」

イサギ

「裏切りなあ、ところであんたら、誰やつけ？」

イサギはそう言って笑いながら私たちの方へ寝返った。

杏

「どういうこと？」

私がそう聞くと、イサギは説明してくれた。

イサギの説明はこうだ。

あの時、私たちが未来へ行く直前に襲ってきたイサギは元と戦って、負けた。

その後、名前は知らない女性に拾われ、直してもらった。

その時、その女性に頼まれ、機械人間を裏切りこちらに寝返った。

イサギ

「こつちの方がおもしろそうやし、もう獅童と戦いたないしな、あいつに勝てる気せえへん」

イサギは苦笑しながら言った。

アルミス

「貴様、裏切りの代償は高くつくと思えよ」

ハライド

「ありやりや、アルミスめっちゃ怒ってるし、怖」

イサギの話を聞いたアルミスは怒りを顕わにし、ハライドはそんなアルミスを見て感想を述べている。

アルミス

「ハライド、イサギには俺が制裁を与える、お前は手を出すな」

ハライド

「そんじゃ、僕はこっちの嬢ちゃん達か、可愛い娘ばっか、役得じやん」

アルミスはイサギを、ハライドは私たち三人をそれぞれターゲットにしたようだ。

アリア

「杏ちゃん、奏ちゃん、あなたたち二人は私とイサギくんの援護よろしくね？」

いやいやアリアさん？って…。  
すごい余裕ですね。

アルミス

「イサギ覚悟しろ！」

アルミスがそう叫び、手を刀に変え、イサギに切りかかる。イサギはそれをギリギリでかわす。

それと同時に、ハライドも手を刀に変えて、奏に切りかってくる。それをアリアさんが日本刀で受け止めた。

アリア

「貴男の相手は私よ、奏ちゃんに手を出すな！」

アリアさんは怒りを顕わにし、ハライドに怒鳴りつけた。

アリアさん、少し怖いです

ハライド

「うわ、怖、びっくりしたわ、でも僕は気の強い人も好きだぜ！」

ハライドがそこまで言ったところでアリアさんが本気を出した。

アリア

「こんなおばさんでいいの？でもお生憎様、私、雑魚には興味ないの？」

アリアさんがそう言った次の瞬間、ハライドの機能が停止していた。よく見るとハライドの腹部に日本刀が突き刺さっていた。

一方イサギの方は

アルミス

「避けるだけじゃ勝てないぞ！ま、今までお前が俺に勝った試しは無かったがな」

アルミスの斬撃が更に激しくなるなか、イサギはその斬撃を全てかわしていた。

イサギ

「…。もうええわ、やっぱあんた弱いわ」

イサギはそう言うつとアルミスを切り裂いた。

イサギ

「わいが今まで勝たせたってたん気づかんかったんか？」

そして

杏

「アリアさん強い！」

アリア

「もちろん！私は最強よ！」



奏

「イサギさんも強いね、こんなに強いのに元に負けたんだね」

イサギ

「自分きついなあ、でも、獅童に勝てんのは事実やしな、後、わいが強いんじゃない、こいつらが弱いだけや、機械四皇帝はわいなんかじゃ足元にも及ばん奴らばっかや」

そうして、この4人で会話をした後、イサギに、どうしてここに来たのかを聞いた。

イサギ

「これは全部ジグザの命令や、こいつら（機械暗殺者）はあいつが行ってこい言ったから来ただけや」

奏

「それじゃあジグザにはこっちの作戦がバレてたってこと？」

イサギ

「それはわからへん、せやけどジグザはいきなり四皇帝をぶつけようとしとる、せやからわいがあんたらを迎えに来たんや」

そう言々とイサギは近くに置いていた車を指差しながら言った。

こうして私達もマシンナーズキャッスルへ向かった。

## 第28話 機械暗殺者（マシンアサシン）（後書き）

次はもう少し早く投稿できるよう頑張りたいと思います

## 第29話 2人の息子達（前書き）

お久しぶりです

スリ師キャンドルです

今回は修騎の視点で修騎と秀院がビャコ相手に奮闘します

時系列でいうと第27話潜入のビャコが『戦闘開始だ！』と言った後からです

では、本編をどうぞ

## 第29話 2人の息子達

ビヤコ

「おら、戦闘開始だ！」

ビヤコがそう叫んだと同時に俺と秀院は左右に分かれて走っていく。

ビヤコ

「来いガキ共！」

俺は左から、秀院は右から同時にビヤコに切りかかった。

しかし、ビヤコはその斬撃を難なく受け止める。

そして、ビヤコは秀院の持っている日本刀を弾き飛ばし、俺には左手を拳に変え、殴り飛ばし、更に、そのまま秀院を蹴り飛ばした。吹っ飛ばされた俺と秀院は壁に激突した。

ビヤコ

「おい、そんなもんか？もつとガンガン来いよ！」

修騎

「っ痛う、流石にあれ位じゃ駄目か…、…やれるか？秀院」

秀院

「誰に聞いてんの？当たり前だよ」

俺たちは立ち上がり、もう一度左右に分かれ、走り出した。

ビヤコ

「バカの一つ覚えか？何度やっても同じだ！」

秀院はハンドガンを取り出しビヤコ目掛け打ちながら、ビヤコに弾

き飛ばされた日本刀のもとへ走っていった。

それと同時に俺はビヤコ目掛け切りかかる、しかし、再びビヤコに受け止められた。

俺が止められると同時に、日本刀を拾い上げた秀院も、ビヤコに切りかかった。

それもビヤコに受け止められた。

しかし今度は、秀院の斬撃が受け止められると同時に、秀院が手榴弾をビヤコに投げつけ、後ろに飛び退いた。

それと同時に、俺も同じように手榴弾を投げつけ、後ろに飛び退いた。

2つの手榴弾はビヤコに直撃した。

ビヤコ

「ハハッ、効いたぜ、やつぱこうじゃねえとな！…おいセリユ！遊んでねーでさっさと戦え！」

ビヤコはセリユに怒鳴りつけた。

その後、ゆつくりとこちらを向いた。

ビヤコ

「さて、それじゃあ今度は俺様の番だ！」

ビヤコがそう言った次の瞬間、ビヤコは秀院の目の前に来ていた。

そして、ビヤコは秀院目掛け刀を振り下ろす。

秀院はかろうじてそれを受け止めた。

しかし、更にビヤコはあいているもう片方の手を刀に変え、切りかかってきた。

秀院は一撃目の斬撃を受け止めたままなので身動きが取れず、二撃目の斬撃をかわせない。

しかし、ビヤコの二撃目の斬撃が秀院を切り裂くことは無かった。

斬撃が秀院に到達する前に俺がライフルでビヤコを吹き飛ばしていたのだ。

更に俺は、ビヤコの飛んでいった所へ手榴弾を投げた。

修騎

「ハアハア、やったか？」

秀院

「ハア、…どうだろうね」

手榴弾の爆発が直撃したビヤコは、床に倒れていた。

修騎

「よし、ハア、こっちは片付いた、ハアハア、向こうの援護に…」

俺は息を切らせながらジョニーのもとへ向かった。

秀院もそれに続いた。

ビヤコ

「おい、待てやガキ共、俺様はまだやられてねえぜ」

振り返ると、そこにはビヤコが立っていた。

修騎

「うそ、だろ、ハア、今までの奴なら、今ので確実に…」

ビヤコ

「ああ？俺様をそんな雑魚と一緒にすんじゃねえ！」

俺と秀院は再び戦闘態勢を取った。

ビヤコ

「特別だ、てめえらに俺様の本気を見せてやる、光栄に思いやがれ

「！」

ビヤコがそう叫ぶと、ビヤコの2本の刀が電気を帯び始めた。

ビヤコ

「こいつは俺様の最強の武器、『二本の電気刀<sup>ツインボルテックス</sup>』だ！」

修騎

「なんだよ、ハア、まだそんなのあんのかよ」

ビヤコは掛かってこいと言わんばかりに手招きしている。

秀院はビヤコに切りかかった。

ビヤコは腕だけを動かし、二本の電気刀で受け止めた。

秀院

「あゝ、がああああああ」

秀院は二本の電気刀に触れた瞬間、感電しその場に倒れた。

修騎

「秀院！」

ビヤコ

「お前バカか？鉄の塊で電気に触れたら感電するのは当たり前だろ」  
俺は秀院に駆け寄りたかったが、傍にビヤコが居るので迂闊に動けない。

ビヤコ

「次はお前だ」

ビヤコがゆっくり近づいてくる。

俺はビヤコから距離を取るように後ずさる。

今のビヤコには日本刀は使えない、なら俺が使える武器はハンドガンとライフル、それと手榴弾が2個、これでどうする？

そんな考えを巡らせている中、ビヤコが目の前まで来ていた。

俺は慌てて距離を取り、ライフルを構えた。

ビヤコ

「おいおい、ビビりすぎたろ」

俺はビヤコ目掛けライフルを打った。

ビヤコは2本の電気刀でライフルの弾を防いだ。

修騎

「うそだろ……」

ビヤコにはライフルも効かない。

俺はビヤコに手榴弾を投げつけた。

すると、ビヤコは、2本の電気刀を手榴弾の少し上の空を切った。

手榴弾はビヤコにぶつかる、しかし爆発しない。

修騎

「な！？」

ビヤコ

「残念だったな、手榴弾に電気を通して、機能を停止させた。」

ビヤコにはもう手榴弾も通用しなかった。

ビヤコ

「それでおしまいかな？ ならもう死ね」



ビヤコの2本の電気刀が俺目掛け振り下ろされた。

第29話 2人の息子達 END

## 第29話 2人の息子達（後書き）

修騎と秀院が負けてしまいました

これから二人はどうなるのでしょうか？

私は知っています

だって作者だから

次回は修騎と秀院は少し置いておいて、ジョニーの話になると思います（確定ではないが）

それではまた次回まで

### 第30話 ジョニーの戦い（前書き）

お久しぶりです

約1ヶ月ぶりの投稿です

前回の後書き通り今回はジョニーの話です  
では本編をどうぞ！

### 第30話 ジョニーの戦い

ゲン

「ビャコは喧嘩っ早いな」

ジョニー

「ヨソミ、シテルナヨ、オマエノ、アイテハ、コノオレダ」

ジョニーはゲンの前に立ちはだかった。

ゲン

「なんだよ、どうせ君たちじゃ、僕らには勝てないんだから止めときなよ」

と、ゲンは戦いを拒んでいる。

しかしジョニーは、そんなことお構いなしで切りかかる。

ゲンは左手を刀に変え、受け止める。

ゲン

「そんなの僕には効かないよ」

ゲンは余裕を見せながらそう言った。

ジョニーはそんなゲンを見て連続で刀を振るう。

右から左から斜めから刀を振るうジョニー、しかし、ゲンはそれを全て受け止める。

ゲン

「もう止めなよ、この程度の実力じゃ僕に傷を付けることすらできないよ?」

ジョニー

「ハッ! ナニ、イッテルンダ? オレハ、マダ、ゼンリヨクノ、イチワリモ、ダシテナイズ」

ゲン

「はあ、もう何でも良いよ。どうせ君たちはここで死ぬんだ」

ジョニー

「ナニイッテルンダ、オマエ、バカニナツタノカ? モトモト、バカナノカ? バカヤロー! ココデ、キエルノハ、オマエラダヨ!」

ジョニーがそこまで言うと、ゲンの動きが止まった。

ゲン

「バカだって? 人間ごときがこの僕をバカ呼ばわりするな! この三下が!」

ゲンはジョニーにそう怒鳴りつけると、ジョニーに切りかかってきた。

ジョニーはゲンの攻撃を全て受け止めている。

更にゲンは右手を刀に変え2本の刀で攻撃を続ける。

先程よりも激しくなったゲンの攻撃を、ジョニーは、受け止め、受け流し、かわしている。

暫くゲンの攻撃をかわしていたジョニーが反撃にでた。

ジョニーはゲンの攻撃をかわしながら距離を取り、右手で刀を構え、左手でライフルを構えた。

そして、ジョニーは器用に片手でライフルを操り、ゲンを狙い撃つ。ゲンは咄嗟にそれを避けようとするが、避けられず命中する。

ジョニー

「コノテイドカ？コノテイドノ、ジツリヨクジャ、オレニ、キズヲ、ツケルコトスラ、デキナイゾ」  
と、先程ゲンに言われたことを言い返した。

ゲン

「……そうだね、少し頭に血が上り過ぎてたよ。…血、通ってないけど…、それじゃあ、僕は本気を出させてもらっよ」

ゲンがそう言うと、ゲンの刀から冷気が出てきた。

ジョニー

「ナンダ？ケムリカ？」

ゲン

「これは冷気だよ！…僕にこの刀を使わせたのは、君で4人目だよ」

ジョニー

「ソレガ、ドウシタ」

ジョニーはそう言うのとゲン目掛け、ライフルを撃った。

ゲンは冷静にその弾丸を刀で弾いた。

ゲン

「もう僕には君の攻撃は効かないよ」

その言葉に触発されたのか、ジョニーが奇声を上げながら、ゲンに切りかかった。

ジョニー

「ヒヤッホー！」

ゲンはそれを刀で受け止めた。すると、ジョニーの持っていた日本刀が凍りついてしまった。

ジョニー

「ナンジャ、コリヤー！」

ゲン

「僕の刀に触れた物は全て凍りつく」

ジョニー

「ソナナコト、ミタラ、ワカルダロ、イチイチ、セツメイ、スルナ」

ゲン

「せっかく説明してあげてるのに…まあ良いよ、君の刀はもう使えない」

ジョニーはゲンが喋っているのを無視して、ゲンに手榴弾を投げつけた。  
ゲンは手榴弾に刀を触れさせる。すると手榴弾は凍りついて地面に落ちた。

ゲン

「こんな物が僕に効くわけ…ゴッ」

ジョニーはゲンの言葉を最後まで聞かずにゲンを蹴り飛ばした。

ゲン

「ちよっ、話ぐらいちゃんと聞けよ！…痛っ」

また、ジョニーがゲンを蹴り飛ばした。

ジョニー

「セントウチュウニ、ナニッテルンダ？スキヲ、ミセルホウガ、ワルイダロ」



ゲン

「理不尽だ！普通こついつ時は最後まで話を聞いておくものだろ？」

ジョニー

「ソナ、キマリハ、ナイ！」

ジョニーはそう言つと今度は殴りかかった。

ゲン

「ちよつ、ちよつと待つ…うつ」

ジョニー

「H A H A H A H A H A」

ジョニーは笑いながらゲンを殴り続けている。

ゲン

「ちよつ、待つ、止めつ、助けつ…」

第30話 ジョニーの戦い END

### 第30話 ジョニーの戦い（後書き）

ジョニーめちやくちやでしたね（笑）  
さて次回は健太達のはずの番です  
それでは次回まで

### 第31話 セリユとの戦い（前書き）

今回は早く投稿出来ました。

今回の視点は二人居ます。

一人称が俺なら健太、私なら秋季です。  
それではどうぞ

### 第31話 セリユとの戦い

セリユ

「怒られてしまいました。仕方ない、そろそろ始めますか」

セリユはそう言ったものの、一向に仕掛けて来ない。

なので私から切りかった。

しかし、セリユは私の斬撃をいともたやすく受け止める。

もちろん受け止められることは予想していた。

そこで、私は手榴弾をセリユに投げつけ、飛び退き、健太と雄騎に、ハンドガンでセリユを撃つよう指示し、自分自身もハンドガンで、セリユを撃ち始めた。

セリユ

「無駄ですよ。僕には効きません」

セリユは弾丸の雨の中、何食わぬ顔で立っていた。

私は再びセリユに切りかった。

しかし、当然セリユに止められ、そして、セリユに弾き飛ばされた。

秋季

「かはっ」

健太・雄騎

「「秋季！」」

俺は秋季に駆け寄って来てすぐに、刀を構えセリユへ走って行った。

健太

「うおおおお！」

俺はセリユに切りかかった。

セリユはそれを素手で受け止めた。

セリユ

「あなたでは無理ですよ」

セリユはそう言っただけで俺の刀を折った。

雄騎

「大丈夫か秋季？」

秋季

「う、ん…雄騎、さん？お父さんは？」

私がそう聞くと、雄騎は後ろに振り向いた。

私が雄騎の振り向いた方を見ると、健太の刀がセリユに折られていた。

その光景を見た私は、健太の所へ駆け出していた。

セリユ

「さあどうします？あなたの刀はこの通り真っ二つです」

セリユは刀の刃の方を持ってそう言ってきた。  
俺は少し後退りをした。そのとき後ろから秋季の声が聞こえた。

秋季

「お父さん屈んで！」

健太は私の声に即座に反応し屈んだ。

私は健太の上を飛び越え、セリユに切りかかった。

そしてセリユはその斬撃を受け止める。

そこでセリユが口を開いた。

セリユ

「中嶋秋季、本気で戦ったらどうです？その二人がダメージを受けないように気を配りながら、ビヤコやゲン達があなただけのお仲間を殺さないように注意しながら、では大変でしょう」

第29話二人の息子達では『ビヤコは床に倒れていた』あたりです。

セリユ

「あなたが本気でこないなら僕はあなたを殺すだけです」

セリユはそう言つと殺気が増した。

セリユ

「では、いきますよ」

と言った次の瞬間、セリユの姿が視界から消え、私の後ろに回り込み、私の胸に刀を突き刺した。

私はその場に倒れ込んだ。

私の胸の傷口からは止めどなく血が溢れ出し、止まる気配が全くない。

健太

「秋季！しっかりしろ！死ぬな！」

秋季

（お父さんの声が聞こえる。そうだ、お父さんに謝っておこう。助けてあげられなくてごめんね）

秋季

「……………」

秋季

（あれ？おかしいな？声が出ない、そうか、声を出す力も残ってないのか、だんだん目が霞んできた。

私、ここで死ぬのかな？ヤダな、まだ、死にたく、ない）

秋季の目が完全に閉じ、涙がこぼれ落ち、意識が無くなった。

健太

「おい、秋季、目醒ませよ。何でだよ、ここで死ぬのは俺なんだろ、秋季いいいい！」

セリユ

「感動的な別れのシーンですが、あなたにも死んでいただきます」

そう言うと、セリユは健太目掛け刀を振り下ろした。

セリユ

「ジ・エンドです」

第31話 セリユとの戦いEND



### 第31話 セリユとの戦い（後書き）

それではまた次回です

### 第32話 機械四皇帝の最後（前書き）

今回は雄騎の視点です

### 第32話 機械四皇帝の最後

セリユ

「ジ・エンドです」

セリユの刀は健太目掛け振り下ろされた。

雄騎

「危ない健太！」

しかし、セリユの刀は健太に届く前に誰かによって止められた。

????

「大丈夫か健太？」

そこには俺たちのよく知る人物が立っていた。

健太

「殿、下？」

その人物は、俺たちの担任教師、殿下こと須雅多清水先生だった。  
(そこ、名前わすれてただろ)

雄騎

「なんで殿下がこんな所に？」

俺は驚た。

殿下がここに居ることがではない、確かに殿下がこんな所に居るこ

とも驚きだが、それ以上に俺は殿下の容姿に驚いていた。  
殿下の容姿は20年前、つまり俺たちの居た時代の殿下にそっくり  
だったのだ。

殿下

「何で？つて、そんなの愛する夫が殺されようとしてるのに指くわ  
えて見てるわけ無いだろ」

健太

「秋季い…」

健太は心ここに在らずといった様子だ。

雄騎

「待て待て待て！健太が殿下の夫！？嘘だろ！？」

殿下

「ちっ、折角ボケたのにコイツは無視かよ」

健太が夫だというのは、殿下のボケだったようだ。  
俺はなぜかホッとしていた。

殿下

「おいお前、セリユとか言ったな？私の可愛い教え子に手を出して、  
ただですむと思うなよ」

と、睨みだけで人を殺せそうな剣幕でセリユを睨みつけた。

流石殿下、怒らせたら皇修で一番恐い先生なだけあるぜ！味方でよ

かった。

セリユ

「『ただでは済まない』では、どうなるのでしょうか？」

殿下

「自分で確かめな」

ドカーン！

殿下がそう言い終わった瞬間にセリユが爆発した。

俺はなにが起きたのか理解できなかった。

いや、正確には爆発したのはなんとか理解できた。ただ、なぜ爆発したのか解らなかった。

俺がそんなことを考えていると、隣からビヤコの声が聞こえてきた。

ビヤコ

「それでおしまいかな？ならもう死ね」

俺が振り返ると、まさにビヤコが修騎目掛け、刀を振り下ろそうとしていた。

俺は修騎を助けるため走り出した。

俺が動くと同時にビヤコは刀を振り下ろす。

ダメだ、間に合わない。

ビヤコの刀は修騎の目の前まで迫っていた。が、それ以上進むことはなかった。

なぜなら、ビヤコの斬撃は殿下が受け止めていたからだ。

ビヤコ

「な！？てめえ何しやる！」

殿下はビヤコの言葉を全て無視し、ビヤコを蹴り飛ばした。  
ドカーン！

そして、蹴り飛ばされたビヤコは、壁に激突し、爆発した。

また俺の頭では理解できないことが起きた。なぜ爆発する？しかし俺はその疑問を一旦置いておいて修騎に駆け寄った。

雄騎

「大丈夫か修騎」

修騎

「なんとか」

ゲン

「ちょ、ま、待って、ちょっと待って！」

ジョニー

「H A H A H A H A H A、ソレムリ」

後ろからジョニーとゲンの声が聞こえてきた。

ゲン

「ごめん、こうさ、降参するからもう許して」

ジョニー

「ダガコトワル！」

ジョニーはゲンの降参宣言を断った！

と、そこへ殿下が話へ割って入っていった。

殿下

「まあまあ、コイツも謝ってんだから許してやったらどうだ？」  
と、ゲンの肩に手を置きながらジョニーを説得した。

ジョニー

「ン？ベツニイゾ、タダ、イイタカタ、ダケダカラナ」

ジョニーはあっさり攻撃を止めた。

そして、殿下とジョニーがこちらに向かって歩いてきた。

そのとき、ゲンが不意を打って攻撃してきた。

ゲン

「背中を見せたな！死ねー！！」

ドカーン！

そして、切りかかってきたゲンは爆発した。

雄騎

「なんで爆発するんだよ！」

俺は声を大にして叫んだ。

殿下

「そんなことはどうでもいいだろ、それよりも…」

と、殿下は秋季や秀院の方を見た。

いや、どうでもよくはないだろ。

そして、殿下は秀院の方へ歩いった。

殿下

「……よし大丈夫、気絶してるだけだ」

そして次に、秋季の方へ歩いていった。

健太は相も変わらず秋季の前で涙を流していた。

殿下

「中嶋そこをどけ、今から秋季を助ける。だからおまえ達は先に行け」

と、殿下は俺達に先に行くよう促してきた。しかし、健太は秋季の傍を離れようとしなかった。

殿下

「おい、中嶋聞いてるのか」

健太

「…機械人間…許さない」

健太は急に立ち上がり歩き出した。

俺はそれを追いかけた。



第32話

機械四皇帝の最後

E  
N  
D

### 戦士の休暇3（前書き）

今回は戦士の休暇です。

これは本編とは関係ありません。  
興味のある方はご覧ください。

### 戦士の休暇3

紫

「ヤッホー！紫だよ」

珊瑚

「うちは珊瑚だよ、みんな覚えとるかな？」

礁

「今回から戦士の休暇の進行は俺たち細波兄妹に任せました。」

珊瑚

「健にいたちは本編で大変やからね」

紫

「私も本編キャラだけどこっちに来ちゃった」

礁

「今回はキャラクターの裏（？）話をするそうですよ」

紫

「裏話と言うよりただ単に名前の付け方や本編の補足を書いてるだけって気もするけどね」

珊瑚

「決め方と補足って？」

紫

「例えば、細波兄妹の場合だと珊ちーと礁ちーの名前をくつつける

と『サンゴ礁』になるとかだよ」

珊瑚

「へえ、そうなんやね」

礁

「いや、読者の皆さんもきづいてたと思うよ、珊瑚」

紫

「他には、ムーちゃんは作者の友達の名前をそのまま使ってるのか」

礁

「え？あの人実在するの？」

珊瑚

「ムーちゃんって、戸田幸之介やんね？1話しか出てへんかったけど」

礁

「この小説の作者は実際の友達ですら使い捨てだよ」

作者

「失敬な！さすがにリア友はそんな扱いじゃないはずだよ！」

礁

「不定形かよ！そこは確定してあげようよ」

紫

「次に…」

礁

「え？作者スルー？」

紫

「次にアリアさんの名前」

珊瑚

「アリアさんはどこもおかしなところないよ？」

礁

「確かに、結構居そうな名前だよな？」

紫

「実はこの小説の作者は天野こずえさんのコミックが大好きなんだよ」

珊瑚

「？どついつこと？」

紫

「天野こずえさんの漫画『ARIA』」

礁

「あゝ、なるほど」

紫

「スフィール・フェンリルはオリジナルだけど。後は、ジグザとか」

珊瑚

「ジグザって未来編の機械人間の？」

紫

「そうだよ」

ジグザ

「お呼びですか？」

礁

「な、何しに来た！」

ジグザ

「いえいえ、呼ばれたので馳せ参じたまで、争う気など毛頭御座いません」

作者

「大丈夫！こいつは何もしない！と言うわけで、ジグザどうぞ」

ジグザ

「有り難う御座います、…実は私の名前はポケモンの『ジグザグマ』からきているのです」

礁

「…まちで？」

ジグザ

「はい、本当です。」

礁

「なんで？」

作者

「それは、ジグザの名前を決めるとき、たまたまポケモンでジグザグマを使ってたから『あ、ジグザでいいや』ってなったのだよ」

珊瑚

「ジグさんの名前って適当やったんやね」

作者

「ちなみにジグザグマの技構成は、どろぼう、ほしがる、なみのり、いあいぎり、もちものはもちろん無しです」

礁

「聞いてねえーよ！」

紫

「後、機械四皇帝とか」

珊瑚

「あの人等もなんかあんの？」

礁

「人って言っても機械人間だけだな」

ジグザ

「彼らは、四神の名前を使ったそうですよ」

珊瑚

「ジグさん、四神ってなんやの？」

ジグザ

「四神と言うのは、青竜、白虎、玄武、朱雀の事ですよ」  
紫

「青竜 セイリユウ セリユ

白虎 ビヤッコ ビヤコ

玄武 ゲンブ ゲン

朱雀 シュジャク シュジャ

つてなっただらしいよ」

礁

「あれ？朱雀ってスザクじゃないの？」

作者

「そんなのどっちでもいいのだよ、スザクでもシュジャクでも読めるからね」

礁

「本当、適当だな、うちの作者」

作者

「そういえば『機械四皇帝の最後』で機械人間がなんで爆発したのか説明してなかったような…」

礁

「そうだ、それずっと気になってたんだ」

作者

「別に説明しなくてもいいか」

礁



「説明しろよ！手え抜くなよ！何で爆発したのか訳わかんねえたる！」

紫

「礁ちー落ち着いて」

礁

「ゼー、ゼー、」

作者

「礁…すっかりツツコミが定着したな？」

ジグザ

「貴方のせいでしょう」(作者に刀を突きつけながら)

紫

「兎に角仕事して」(作者の上下左右に魔法陣を出現させながら)

作者

「あつれゝおかしいな？ジグザ逆らうんだ？紫もなんで魔法使えるの？」

ジグザ

「私達の最大の敵は貴方だと判断しました」

紫

「ここでは何でも出来るって言ったの作者だよ」

作者

「あははは…」

珊瑚

「ちょっと待って！作者さんにも何か事情が在ったんや無いの？」

作者

「流石は珊瑚さん！それじゃあここは任せた。私は逃げる」

礁

「作者逃げやがった！」

ジグザ

「しまった逃げられてしまいました」

紫

「メテオインパクト！……（ドカーン！）ダメ届かない」

元

「俺が行く」

礁

「え？」

作者

「ふー、ここまで来ればもう大丈夫だろ。って、エー！ちょっと待て！お前は反則だろー！ー！ー！ー！」

元

「捕まえてきた。どうする？」

作者

「しくしく…」

珊瑚

「元さん、その人押さえとってな。ジグさん、ちょっとそれ（刀）ウチに貸したって」

ジグザ

「どうぞ、扱いには十分お気をつけください」

珊瑚

「ありがとうジグさん。ねえ作者さん、ブロッコリーとカリフラワ―、緑色なのはどっち？」

作者

「ブロッコリーブロッコリー、ブロッコリーしかない！ブロッコリーの一択！」

珊瑚

「そこは…カリフラワーって言うところでしょー！」

作者

「ちよっ、さそこだってブロッコリーって答えただろ！てか本当に止め……ギャー！！！」

礁

「さ、珊瑚、それくらいにしないと説明が…」

ジグザ

「もう手遅れでしょう」

紫

「そんなのはどうでもいいけど、説明はどうするの?」

元

「それなら俺が説明する。あれは爆弾で爆発してただけだ」(珊瑚に切り刻まれた作者を投げ捨て)

礁

「え?それだけ?」

元

「そうだ」

珊瑚

「でも爆弾なんてどこにあったん?」

元

「殿下がつけたんだよ、超小型リモコン式爆弾を、セリユとビヤコにはそれぞれの刀に、ゲンは肩にセットし、爆発させた」

礁

「そんな簡単な事だったんだ」

ジグザ

「ですが、戦闘の最中、相手に気づかれずにそのような物をセットするのは至難の業ですよ」

礁

「へえ」

珊瑚

「それよりも、元さんも殿下先生のこと殿下言っんやね」

元

「ああ、そうだな」

作者

「とりあえずこれくらいかな？私はもう帰りますね、それでは（ハ）ノシ」

礁

「生き返った！」

ジグザ

「それでは、私もそろそろ出番ですのでこの辺で退散しましょう」

珊瑚

「また来てや、ジグさん」

ジグザ

「ええ、また寄らせていただきます。それでは失礼を」

紫

「ジグザも帰って行ったね、それじゃあそろそろ終わろっか」

珊瑚

「みんなまた見てやゝ、それじゃあねえ」

礁

「それでは皆さん、また次回に」

オルペウス

「皆さん、私の事忘れてますね…。仕方がないので自分で打ち明けます。私の名前は神話のオルフェウスの旧約聖書版の名前を使っています。ちなみにオリュンポスもオリンポスの旧約聖書版です。では」

戦士の休日3END

### 戦士の休暇3（後書き）

次回は7月10日頃を投稿の目標に頑張ります

### 第33話 到着（前書き）

目標から1日過ぎました。

やっぱり一週間では無理でした

それでも頑張ったんですよ

とりあえず本編をどうぞ



### 第33話 到着

杏です。

私達はイサギの用意した車でマシンナーズキャッスルを目指しています。

今は高野を走っています。

今この車に乗っているのは私、奏、イサギの三人（それとも二人と一機？）です。

アリアさんはまた攻め込まれたら大変だ。ということでオリュンポスに残りました。

正直不安です。

私達二人は刀や銃を使ったことなんてないから。

一応オルフェウスさんがロケットランチャーを持たせてくれたけど私達でちゃんと扱えるかどうか…。

イサギ

「嬢ちゃんら、もう10分程で着くさかい用意しときや」

イサギに言われ私達は車を降りる準備を始めた。

10分後、イサギの言ったとおりマシンナーズキャッスルに到着した。

杏

「イサギ、早く健太達を助けに行こ！」

イサギ

「いや、わいらは頭叩きにいくで、あいつらには獅童がついとるから問題ないやろ、せやからわいらで少しでもダメージ与えとこ言うことや」

そついい終わると私達を縄で縛り付けだした。

杏

「なにすんのよ!」

イサギ

「なに言う тоннねん、なんもせえへんかつらわいら侵入者扱いされて殺されるで。それに右手首、左に捻つてみ、簡単に解けるさかい。」

私は言われた通りに手首を捻った。すると縄はするするっと解け地面に落ちた。

本当に解けた。

イサギは落ちた縄を拾い上げ、再び私を縛り上げた。

そして正面の扉からマシンナーズキャッスルに入って行こうとした。それを私は止めた。

杏

「正面から行って大丈夫なの? すぐに見つかるんじゃない?」

イサギ

「大丈夫やろ、中嶋らは多分裏に回つとるやろつからそつちに戦力行つとるはずや、わいなら敵の本拠地に正面から堂々と入るなんて真似絶対せえへん」

イサギがそこまで言ったところで、奏でがそういえばと前置きをし、言葉を続けた。

奏

「元が正面から突撃して、健太達が裏から潜入するって言ってましたよ」

奏から情報をもらいイサギはニツと笑った。

イサギ

「それなら尚更正面からや、獅童やつたらもう決着ついて健太達の方行つてやるうからな」

イサギがそこまで話したところで私は思った、「コイツどんだけ元信用してんだよ」と

イサギは「ほな行こか」とだけ言ってマシンナーズキャッスルに入ってた。

私達はマシンナーズキャッスル内部に入ってきた。

イサギ

「やつぱし思ってた通りや、この辺の機械兵士が全滅しとる」

とイサギは部屋の隅を指差して言った。

イサギの指差した方を見ると元機械兵士らしき残骸が鎮座していた。私達はその残骸を横目にエレベーターを使い上を目指した。

イサギ

「こつからは一応エレベーター使えんねんけどなちよつとめんどくさいで」

とエレベーターの中で説明を始めた。

私達は仕方がないので聞くことにした。

イサギ

「エレベーターで最上階行くにはな、まずこのエレベーターで7階（屋上）まで上がって、乗り換えて5階まで降りる更にまた乗り換えて2階に行き乗り換えて4階に行ってまた乗り換えて3階に行ってもう一度乗り換えてこれで6階（最上階）に到着や、どや？面倒やろ？ちなみに今言ったエレベーター一個一個全部が直通やからなそれと階段もあるけどこつちも同じ手順やからエレベーターの方が楽やろ？」

私達は啞然としていた。面倒臭過ぎるでしょ、もつと楽に昇れる方法はないの？

イサギ

「ほんまは各階止まりのエレベーターあんなねんけどな、わいそれ使われへんねん」

イサギは「すまん」と頭を下げてきた。

そうしているうちに屋上に到着した。

そしてエレベーターを乗り換えて5階を目指す。

このエレベーターの中では特に話すこともなく、何事もなく5階についた。

そして、2階に降りるエレベーターに乗り込もうとした。

その時後ろから声をかけられた。

???

「おや、イサギさん其方のお嬢様方はどうしたのですか？」

イサギ

「ジグザ…さん」

なんとジグザに見つかってしまった。

イサギ

「いや、この嬢ちゃんらはですね、オリュンポスから人質として攫ってきたんですよ」

ジグザ

「そうですか…、確か私はオリュンポスを潰してこいと言った筈ですが？それに他の者達はどうしました？」

イサギ

「実は、オリュンポスに居ったアリアっちゅう奴がやたらと強かったんですわ、それでわい以外はみんなやられてもって…、恥ずかしい話なんですがこの二人を盾にしてなんとか帰ってこれたんですわ」

ジグザ

「そうですか、アリア・スフィール・フェンリルですか、でしたら帰ってこれただけで十分、その上人質まで連れてくるとは、私は貴方を過小評価していたようですね」

イサギ

「いやそんな事はないですよ。それじゃあわいはこいつらを牢屋に連れてくさかい、これで失礼します」

ジグザ

「ええ、其れでは私も少々用事が在りますのでこれで失礼します」  
「そこまで言つとジグザは屋上へ上がるエレベーターに乗り込んで行った。」

イサギ

「ほんまビックリしたで、予想はしてたけどまさかほんまに鉢合わせるとは、でもバレンでよかったわ」

「とイサギはホツと胸を撫で下ろした。」

その後は特に何の問題もなく6階まで登ることが出来た。

そして、機械人間のボスの部屋の前までやって来た。

奏

「ここがボスの部屋？」

イサギ

「そや、それじゃあ行くで」

イサギは扉を開き、私達は部屋の中に入っていった。

部屋に入るとそこはとても広い空間が開けていた。

部屋の中央には長机が置かれており椅子は5つ、そして、机の奥には一際大きな椅子が置かれており、そこに一機の機械人間が鎮座していた。

その機械人間は私達を見ると口を開いた。

ボス

「イサギ、その者共はなんだ？」

イサギ

「こいつらは……、こいつらはあんたを倒す為にわいが連れてきたんや！」

イサギがそう言ったところで、私と奏は縄を解き、刀を構えた。

ボス

「そうか、裏切ったか。ならば墜ちろ」

ボスはそう言うと言った椅子の手すりでなにかの操作をしだした。すると、隣にいたイサギがいきなり倒れた。

杏

「え？」

ボス

「私に刃向かうからだ。次は貴様達だ」ボスは椅子に座りながらハ  
ンドガンを私に向けて撃ってきた。  
部屋にパァンと銃声が鳴り響いた。

第33話 到着 END



### 第33話 到着（後書き）

次回は20日を目標に頑張ります。

### 第34話 足止め（前書き）

今回は目標に間に合いました  
なかなか頑張りましたよ（笑）  
では、今回は元の視点になります。  
それではどうぞ！

### 第34話 足止め

紫

「なんなのこの階段、無駄に長くない？」

元は1階から屋上に続く階段をひたすら上り続けていた。

紫

「やっぱりさつき隣にあったエレベーター使いたかったな」

元

「動かなかつたんだから仕方ないだろ」

実は、元達はイサギが使用したエレベーターを使おうとしたが動かなかったのだ。

元は紫の文句を聞きながら、黙々と階段を上っていた。

そして、登り始めて約三分、元は屋上に到着した。

屋上には機械兵士が五機ほどいて、元を見たとたん元に襲い掛かってきた。

元はそんな機械兵士達を意図も容易く全滅させた。

紫

「元楽勝だね！」

元

「ああ、機械兵士は機械人間と比べて動きが単調で遅いからな」

紫

「それもそうだね、やっぱり所詮は量産型って感じだしね。……、あ、元！あっちにエレベーターがあるよ！」

紫はエレベーターに近づき、『のボタンを押した。するとエレベーターの扉が開き、中からジグザが現れた。

紫

「開いた！そんでもってジグザ出てきた！」

紫は驚き、元の下へ飛んでいった。

紫が元の後ろに隠れると同時に元は刀を構えた。

ジグザ

「随分と御挨拶ですね、貴方の判断は間違いではありませんが少しお話ししよう」

ジグザの提案に元は刀を鞘に納めることで答えた。

ジグザ

「ありがとうございます」

元

「それで？何の話だ？」

ジグザ

「そうですね、まずは私がここに来た目的でもお話ししよう、実は私、貴方を倒しに来た訳じゃないんですよ」

ジグザの言葉に疑問を持ち、元はジグザに質問をした。

元

「ならなにをしに来た？」

ジグザ

「私の目的は貴方の足止めなのですよ」

ジグザがそう言った瞬間、元は上ってきた階段とは違う方の階段を下りようとした。

しかし、その階段には機械兵士が鮎詰め状態で上ってきていた。流石の元もこの状況では引き下がった。

ジグザ

「ひとつ良いことを教えて差し上げましょう、貴方が目的地に到着するには今貴方が使おうとした階段か、こちらのエレベーターを使うしか在りません」

ジグザは特別ですよ一言付け足した。それを聞いた元は動きを止めた。

元

「…わかった。お前の足止め、甘んじて受けよう。その代わりにこいつら（機械兵士）は潰させてもらうぞ」

そう言った元は機兵士が鮎詰め状態になっていた階段に持っている手榴弾三つ全てを投げ込んだ。

ジグザ

「その程度の雑魚で貴方を足止め出来るなら安いものですよ」

そう言うときジグザはどこからともなくトランプを取り出してきた。

ジグザ

「ポーカーなど如何ですか？」

ジグザは時間を潰すのにポーカーを提案してきた。

元もそれに応じる。

ジグザ

「役の強さは下から『ノーペア』『ワンペア』『ツーペア』『スリーカード』『ストレート』『フラッシュ』『フルハウス』『フォーカード』『ストレートフラッシュ』『ロイヤルストレートフラッシュ』です。ジョーカーは入っていないので『ファイブカード』はありません。それと数字は最弱が2、最強がAでよろしいですか？」

元

「それで良い」

元の答えを聞いてジグザはカードを配り始めた。  
その時、元の後ろから紫が出てきた。

紫

「元！私もやりたい！」

紫のその言葉を聞いた元はジグザに向き直り、カードをもう一組配るよう頼んだ。

ジグザは明らかに疑問符を浮かべていたがもう一組追加で配ってくれた。

紫は今の自分の身長よりも一回り程大きなトランプを持ち上げた。

それを見たジグザは困惑している様だ。

ジグザには紫が見えていないのでカードが勝手に浮いているように見えるのだろう。

そして、配り終わり手札を確認する。

? 4 ? 8 ? 8 ? 8 ? 8

ジグザ

「チェンジは？」

元

「……いや、無しで良い。……こっちもチェンジは要らないらしい」

ジグザ

「私もチェンジは無しです」

そして、手札公開。

元は8のフォーカード、ジグザは?の3ゝ7のストレートフラッシュ、紫は?のロイヤルストレートフラッシュ

紫

「わーい、勝ったー！」

元

「ちょっと待て、明らかに固まってるだろ」

そう言った元は残りのトランプの山の表を向けた。

すると、殆どが開封したときと同じ配列で並んでいた。

元

「おいジグザ、何でこんなに固まってるんだ？ちゃんとシャッフルしてないだろ」

ジグザ

「ちよつとした冗談ではありませんか、次はちゃんとやりますよ」

ジグザはそう言うと言つて再びカードを配り始めた。

今度の手札は？2？7？9？9？9？K。

ちゃんとバラバラだった。

ジグザ

「チェンジは？」

元

「三枚、こっちは二枚」

元は配られたカードを確認した。？9？9？9？9？10？2

そしてカード公開。

元、9のスリーカード、ジグザ、3と6のツーペア、紫、？のフラッシュ

紫の勝ちだ。



その後暫くポーカーを続けた。

30分後

ジグザ

「また負けてしまいました、其方の方お強いですね。おや、もうこんな時間ですか、やはり楽しい時間というものはすぐに過ぎてしまいますね」

そう言つとジグザは立ち上がり、少し離れた場所の床を外した。

因みに戦績は63ゲームして元が21勝、ジグザが12勝、紫が30勝となつた。

ジグザ

「ここから行けば直接部屋の中へ行けます。」

元はジグザの説明を受け、床の穴に飛び込んだ。

第34話 足止め END

### 第34話 足止め（後書き）

次回で未来編は終わるかなあ〜とか思ってるんですけど、どうなるかはわかりません。

次回か、その次か、ま、とりあえず近いうちに終わります。

ついでに次回は1日を目標にします。

ではまた次回に！

### 第35話 予言の時（前書き）

1日過ぎました。

申し訳ないです。

兎に角本編をどうぞ！

### 第35話 予言の時

健太は歩き続けている。

雄騎はそんな健太に話し掛けながら隣を歩いている。

しかし、健太は返事をしなかった。

だが、雄騎が話すとたまに反応するので聞こえてはいるのだろう。

健太と雄騎が歩いていると隠してあるかのように設置されているエレベーターが現れた。

雄騎は気づいたようだが、健太はそれに気づいてないようで、そのエレベーターを通り過ぎてしまった。

雄騎

「健太ちよつと待つて、こっちにエレベーターがある、これ使つて行こうぜ」

この雄騎の申し出に健太は振り返りエレベーターの方へ歩いてきた。

二人はエレベーターの前に立った。

するとエレベーターからアナウンスが流れた。

アナウンス

「ICカードをスキャンして下さい。無ければ操作パネルにある×ボタンを押し、そこで暫く待機して下さい。」

健太はそのアナウンスに従い、ボタンを押し待機した。

するとエレベーターから恐らく赤外線であろう赤い光が健太に照らされた。

アナウンス

「認証しました。それではエレベーターが来るまで暫くお待ち下さい」

アナウンスがそう告げた後、6階に停まっていたエレベーターが動き始めた。

エレベーターを待っている中、とうとう健太が口を開いた。

健太

「ごめん雄騎、ずっと無視してて…。でももう大丈夫、もう落ち着いたらから」

雄騎

「いや、健太、お前は悪くない、修騎が同じ事になってたら俺もお前と同じだったと思う」

ここでエレベーターが降りてきた。二人はエレベーターに乗り込み、6階のボタンを押した。

健太

「俺さ、秋季が刺されたとき、色んな感情が溢れ出してきたんだ。悲しくて、辛くて、寂しくて。その後色んな感情全部が怒りに変わったんだ。それで我を忘れて機械人間を倒すことばったかり考えて…。でも雄騎がずっと話し掛けてくれた。だから自分を取り戻せた。だからありがとう雄騎」

雄騎

「そんなの当たり前だろ、俺達友達なんだからさ。それに秋季なら絶対助かる。だって殿下、医師免許持ってるもん」

健太

「雄騎…、そうだな、殿下が医師免許持ってるなんて始めて知ったけど、秋季は助かる、殿下がなんとかしてくれる！……なあ雄騎、俺、機械人間に勝ったら秋季に謝ろうと思うんだ、迷惑かけてごめんって」

雄騎

「健太…、やめろそれは死亡フラグだぞ」

健太

「しまった！」

そんなこんなで6階に到着した二人はボスの部屋を探し始めた。と言っても、フロア内は一本道だった為、真っ直ぐ歩いていただけだった。

ボスの部屋の前に辿り着き、扉を開ける。

するとそこには床に倒れているイサギ、立ち尽くす杏と奏、杏と奏にハンドガンを向ける機械人間、この風景を見た健太は咄嗟に駆け出した。

パン！

と杏を狙ったハンドガンが放たれた。

その弾丸は寸分の狂いもなく杏に襲い掛かる。

そこへ健太が割り込み、弾丸は健太の胸に命中し、健太は崩れ落ち

た。

杏・奏

「健太！」

健太

「良かった。俺でも守れた」

雄騎

「健太！フラグ拾うの早すぎたろ！」

健太

「あれ、やっぱり死亡フラグだったな……」

その言葉を最後に健太の意識はなくなり、呼吸も止まり、心音も停止した。

奏

「健太…ダメだよ…杏ちゃん、まだ健太に伝えてないことがあるのに……」

杏

「イヤ…何で…健太が…イヤアアアアアア！……」

雄騎

「お前えええ!!!」

雄騎は健太が撃たれ、意識がなくなった瞬間に機械人間のボスに口ケランを撃ち込み突っ込んでいった。

口ケランの弾はボスに命中する前に、ハンドガンで空中爆破された。雄騎はその爆炎の中に飛び込み、ボスに切りかかる。しかしボスは素手で刀を受け止め、雄騎を杏達のいる方へ投げ飛ばし、ハンドガンで雄騎を狙って撃った。

雄騎が投げ飛ばされ、ハンドガンの弾が着弾する直前に、元が天井から降りてきて弾丸を刀で弾き飛ばした。

天井から降りてきた元は健太に近づき、健太の額を触り、目を瞑る。その後機械人間のボスに向き直る。

杏

「元、健太が…」

元

「わかってる。…おい機械人間、お前の名前は何だ。答えろ」

ボス

「何故？」

元

「ここで名乗るとかないと永遠にボスだぞ」

ボス



「其れもそうだな…、よし名乗ってやる。我が名は『デウス・エクス・マキナ』」

元

「そうか、なら、覚悟を決めろ、お前は紫を泣かせた」  
元の後ろで紫は杏と並んで泣いていた。

デウス

「返り討ちにしてくれるわ」

元は手のひらをデウスに向ける。すると手のひらに炎が集まり、手のひらサイズの火の玉が完成した。

デウス

「何！？あれはまさか！？」

元はその火の玉をデウスに向けて打ち出した。  
そしてその火の玉はデウスに命中した。

デウス

「グウっ…、（まさか本当に魔法か！？なんという威力だ、この私ですらもう一度くらうと危うい、やはり魔法が相手だと分が悪い）」

元はもう一度デウスに手を向け、炎を集め始めた。  
それを見たデウスは椅子の手摺で何らかの操作をし、椅子から立ち上がり、壁に取り付けられているレバーを引いた。

すると、元や健太達のいる空間が歪み、五人全員の姿がこの場から無くなった。

ジグザ

「デウス様、加勢致しましょうか？」

健太達が居なくなつてすぐにジグザが現れた。

デウス

「ジグザか、いやいい、其れよりも私は今から瞑想に入る、暫くの間ここはお前に任せる」

ジグザ

「と言うことは現れたのですね」

デウス

「そう言うことだ。ではジグザ、ここは任せた」

第35話 予言の時 END

### 第35話 予言の時（後書き）

次回からは未来編になります！

今度は何時になるかわかりません

次は9月位になるかもしれません

気長に待つていただけるとありがたいです

では、また次回に！

## 戦士の休暇4（前書き）

お待たせしました！戦士の休暇です！

はいそこ、「別に待ってねえよ」とか「さつさと本編を進めろよ」とか言わないで下さい。

…え？そんなこと言っていない？思っただけ？

それなら良いんですよ。思うだけなら私はわかりませんからね

それでは戦士の休暇始まります！

これは本編とは関係ありません。

興味のある方はご覧下さい。

## 戦士の休暇 4

礁

「今回も始まりました戦士の休暇の第4弾！」

紫

「トウツトウルー 紫だよ！知ってる人もいると思うけど実は『トウツトウルー』の人、死ぬ死なないで大変なんだよね。だからあまり使わない方がいいのかな？あ、もちろんアニメのネタだよ？」

礁

「使わない方がいいと思ってるなら使うなよ。それにアニメと言うことくらいわかるよ」

珊瑚

「紫ちゃんまた来てくれたんやね」

礁

「紫のネタ全力でスルー！？」

紫

「本編キャラだけど元が居ないと出てこないからね」

礁

「紫も話引つ張らないのかよ！やりっぱなしかよ！」

珊瑚

「そついえば紫ちゃんって魔法使えたやんね？それ、うちにも教えてくれへん？」

礁

「うん、分かった。スルーしてるのは僕のことなんだね」

紫

「うん良いよ！さんちー向こうで練習しよー！」

礁

「……開始早々珊瑚と紫はどこかへ行っちゃいましたが、気を取り直して始めましょう。さて今回は僕は何をすればいいのかわかりません。どうしましょう？」

ジグザ

「お困りですか？」

礁

「あ、ジグザ、また来たんだ」

ジグザ

「ええ、私も暫く出番が無いようですからね」

礁

「え？ジグザの出番が無いって事は未来編終わりなの？中途半端じゃない？」

ジグザ

「はい、そうです。未来編は機械人間の完全勝利で幕を下ろしたのです」

礁

「それ本気じゃないよね？どう見てもデウスボロボロだったよね？」

ジグザ

「…はいその通りです。実際は未来編はまだ終わってません。しかし今回の未来編1はあれで完結です」

礁

「未来編1？」

ジグザ

「はい、現在この小説は『現代編』これはゲームセンターに行ったりテストをうけたりですね。そして『未来編1』これはイサギに過去の夢を見せられ未来に行きデウス様に挑むです。今回でここまで終わりました。次回からは『異世界編』その後に『未来編2』が掲載される予定です。これが未来編の決着です。」

礁

「…凄い時間掛かりそうだな」

ジグザ

「全くですね」

礁

「…話し終わっちゃったね」

ジグザ

「…そうですね、それではこの様なものはどうでしょう？細波兄妹が何故一話しか登場していないのに戦士の休暇の進行役を任されて

いるのか」

礁

「それは気になる、だって当事者だもん」

ジグザ

「それもそうですね。ではお話ししましょう。実は貴方方兄妹が本編に出られないのは全て珊瑚さんが原因なんです。けして作者の気まぐれではありません」

礁

「え？珊瑚のせい？何で？」

ジグザ

「よく考えて下さい、喋り方は関西弁、珊瑚という名前、双子という設定」

礁

「あ、そうか」

ジグザ

「そう、作者は意図していなかったがあまりにも似すぎていたのですよ、ToHeartの姫百合珊瑚に！」

礁

「確かに似てる…」

ジグザ

「更に言えば珊瑚さんは未来編でオリュンポスの電子機器の全てをパソコンで制御しているという設定で登場する筈だった。礁さん、



貴方も戦闘部隊隊長として登場する筈だったんですよ」

礁

「そうだったんだ。ん？でもその珊瑚の設定って」

ジグザ

「そうです。珊瑚さんにその設定が追加されていれば殆ど一致してしまっていました。唯一違うのは姉ではなく妹という設定だけですからね」

礁

「うちの作者も少しは考えてたんだね」

ジグザ

「ついでに言いますと未来編での貴方方兄妹の代わりは中嶋衆院と二修騎の二人が担い、礁さんの隊長の設定はオルペウスに、珊瑚さんのパソコンが使えるという設定は奏さんに、更に珊瑚さんの関西弁はイサギに振り分けられた。と作者が言っていました」

礁

「と言うことは衆院さんと修騎さん、イサギ、オルペウスは急遽作られたって事？」

ジグザ

「いえ、前者の二名はそうですが後者の二名はあくまで設定を追加されただけのようです」

礁

「へえ、そうなんだ。あ、そういえば赤井蒼太は？あの人ゲームセンターの話は全部出てたけどその後は雄騎さんの記憶で一度名前が

出ただけだったよね？」

ジグザ

「ああ、あれは只の使い捨てですよ」

蒼太

「ふざけるなー！もっと出番増やせー！ていつか作者出て来い？」

ジグザ

「今回作者は出てきませんよ。前回の事が在りますからね。私が縛り付けてクローゼットに叩き込んで来ました」

蒼太

「なん…だと…」

ジグザ

「次にそれ言ったら戦士の休暇ですら出られなくしますよ」

蒼太

「すみませんでしたっ！」

作者

「やめたげて！蒼太が何をしたって言うの？」

礁

「あ、作者だ」

ジグザ

「貴方、何故此处に？」

作者

「あの程度でこの私を止められると思うのか？」

ジグザ

「やはり亀甲縛りにして吊しておくべきでしたか」

作者

「今回は元は出さないから、ここからは拙者の独壇場ぜよ（キリッ

」

紫

「礁ちー！さんちーに魔法教えてきたよ……って作者来てるし！」

礁

「あ、紫、珊瑚も戻ってきた」

珊瑚

「…作者…。前回の恨み今ここで晴らす！」

礁

「ちよっ、紫！珊瑚に何教えたの！？性格変わってるんですけど！？」

紫

「え？次元転送魔法とちよっとした攻撃魔法だよ」

作者

「恨み？何が？」

珊瑚

「信じたのに…、信じたのに…！」

作者

「そんなの騙されるお前が悪い。それにお前に何が出来る？ 戦闘スキル0じゃないか」

珊瑚

「次元転送LV3！」「元」「デウス」「十年後の健太」！」

元

「何だ？」

デウス

「私を呼び出すとは良い度胸をしているではないか小娘」

十年後健太

「お、『第19話記憶5』以来だな。因みに記憶5では20年後に成ってたけど正しくは十年後だ。作者間違えたな（笑）」

作者

「何で元出てくんの！？何でデウス来るの！？何で十年後来れるの！？記憶5に関しては素で間違えました。すみません。てか、何この珊瑚の能力！？私知らないんですけど！」

十年後

「珊瑚久し振りだな、元気してたか？」

珊瑚

「うん、うちはめっちゃ元気だよ。只ちょっと許されへん事あってな、だからあの人やつつきたいねん」

十年後

「そっか、わかった。協力するよ。お前ら二人も良いよな？」

元

「勿論」

デウス

「ふん、面白い、特別に貴様の余興に付き合ってやろう」

珊瑚

「それじゃあ皆さん一斉にいきましょう」

十年後

「了解！食らえ、サンダーアックス！」

（雷で作られた斧が作者目掛け振り下ろされる）

元

「火炎地獄」

（作者の足元から炎が吹き出し作者を飲み込む）

デウス

「デス・レーザー」

（デウスの背中から触手のような物が現れ、地面に突き刺さり、デウスの体を固定し、体の前半分が開きそこからデウスの体と同じ大きさのレーザーが作者目掛け撃ち出される）

珊瑚

「エリアクラッシュ！！」

（作者の居る空間に罅が入り砕け散った）

作者

「ギャーーーー！！！！」

礁

「作者が…消し飛んだ…」

ジグザ

「礁さん、そろそろ時間ですよ」

礁

「え？でも作者はどうするの？」

ジグザ

「そんなものは放っておきましょう。其れでは読者の皆さんまた次回にお会い致しましょう」

戦士の休暇 4    E N D

#### 戦士の休暇4（後書き）

さて、実は今、新しく短編小説を書いているんですよ。  
多分その小説を投稿するまではこの小説の投稿が止まると思います  
楽しみにしていただいている方には申し訳ない限りです

### 第36話 離れ離れ（前書き）

皆さんお久しぶりです。

覚えているでしょうか？

みんなのアイドル、スリ師キャンドルです

え？誰がアイドルなんだって？

そうですね、私じゃアイドルになんてなれないですよ  
ね解ってるんです。

ただ、1つ言っておきたいことがあるんです。

投稿遅くなりました。申し訳ありません

では、気を取り直して…

てな訳で、今回から異世界編です！

楽しみにしていただいた方お待たせしました！

それではどうぞ！



### 第36話 離れ離れ

デウスによって姿を消された健太、雄騎、杏、奏、元の五人は未来に行く時に通った空間とよく似た空間を漂っていた。

雄騎

「（なんだこれ、身体がふわふわする、それに気分が悪い。未来に行く時を感じたけどこれはあの時の比じゃない。ヤバい…意識…が…）」

.....

???

「君ら大丈夫かいな？」

健太、雄騎、杏は深い森の中にあった。

その三人に背中に籠を背負った老人が心配そうに声を掛けていた。老人が声を掛け続けていると不意に雄騎が目を覚ました。

老人

「おお、気がついたか」

雄騎

「う、ん…はっ！奏！杏！元！健太！」

雄騎は周りを見渡す、そこには杏と健太の二人がうつ伏せで倒れていただけだった。

そして横で心配そうに見守る老人の存在に気がついた。

雄騎

「爺さん、後二人居なかったか？」

老人

「いんや、儂が来た時には御主とそこに倒れとる二人だけじゃったが。それより、何故御主は儂の名を知つとるんじゃ？」

雄騎

「え？何が？」

老人

「ほれ、御主、儂のことをジイさんと呼んだじゃろ？儂の名前は『ジイサ』じゃ、村のみんなからはジイさんと呼ばれとる」

雄騎

「そうなんだ……。あ、そうだ。杏！起きろ杏！」

雄騎が杏の体を揺すると、杏は目を覚ました。

杏

「ん…、雄、騎？…！健太、健太は！」

杏は目を覚ますと健太を探し、見つけ、駆け寄り、抱き寄せた。杏が抱き寄せた健太の服には血がベツトリと付着している。

ジイサ

「そつちの子怪我しとるのか！えらいこつちや、君らとりあえず農らの村まで来なさい」

健太の様子を見たジイサは雄騎達をジイサの村まで案内した。

村の子供 A

「あ、ジイさんだ！今日は何とってきたの？見せて見せて！」

ジイサ

「すまんのジフ、今怪我人が居るんじゃ、儂はお医者様の所へ行くからお前は村長さんと呼んできてくれ」

ジフ

「大変！急いで呼んでくる！」

ジフと呼ばれた村の子供 A は村の奥へ消えていった。

ジイサ

「さあ、こつちじゃ」

雄騎達はジイサに連れられ、一件の家へ入っていった。

ジイサ

「セグラさん、怪我人が居るんです。見てやってくれませんか？」

セグラ

「怪我人ですか！では、こっちの布団に寝かせて下さい」

セグラと呼ばれた二十歳前後の男性に促され、健太を布団に寝かせた。

セグラは健太の服を脱がせ、傷口を調べ、聴診器で心音を聴いたりしている。

雄騎達がそれを見守っていると家の扉が開き、ジフと亀が一匹入ってきた。

ジフ

「ジイさん連れてきたよ」

雄騎

「（村長ってどこ？もしかしてあの亀か？）」

杏

「（もしそうならツッコんだ方が良いのかな？でもみんな普通にしてるし…）」

ジイサ

「村長さん、事の経緯は奥で話しましょう」

村長亀

「うむ、では行くか」

杏

「（喋ったー！！え？亀が？えー？これはやっぱりツッコんだ方がいいよね？でも雄騎も何も言わないし…どうしょ）」

雄騎

「（へえゝ亀って村長に成ったら喋れるんだ…ってそんな事あるか？！危うく現実逃避しかけたぞ！やっぱりツッコむべきか？いやでも…うゝん…）」

杏と雄騎が迷想している最中、セグラが聴診器を置いた。

セグラ

「脈なし、心音停止、呼吸停止、残念だけどこの子はもう…」

その言葉を聞いた杏と雄騎のは迷想は一瞬にして霧散していった。

杏

「やっぱり…そうなんだ…」

雄騎

「なあ、あんた医者なんだろう？何とかしてくれよ！」

セグラ

「残念だけど僕にはどうすることも…」

村長亀

「一つだけ、助かるやもしれぬ方法がある」

雄騎

「本当か亀！」

ジイサ

「これ、村長と……」

村長亀

「よいよい……。主等、この方法は絶対ではない上、主等まで命を落とすやもしれぬ方法じゃ、それでもやるかの？」

杏

「やる……、健太が助かるなら何だってやる！」

村長亀

「そうか、ならば教えよう、その方法を」

第36話

離れ離れ

END

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4792j/>

---

現代と未来と異世界と

2011年11月17日21時18分発行